

2024 (令和6) 年度

京都府NIE実践報告書



Newspaper in Education

(教育に新聞を)

京都府N I E 推進協議会

目 次

□ 発刊にあたって

京都府N I E推進協議会 会長 位藤紀美子 …… 1

1. 生き方探究（キャリア）教育の視点でのNIEの活用について

京都市立新町小学校 主幹教諭 西村 崇 …… 2

2. 感じる つながる 自分から 自分らしく「かがやき」学びをつむぐ

京都市立御所南小学校 教諭 森川 亜里沙・谷口 真由 …… 8

3. 新聞を活用して、友達と考えを深め合い、自分の考えを発信しよう！

京都市立光徳小学校 教頭 岡本 洋子 …… 12

4. 子どもたちの主体的な学びにつながる新聞の活用

京都市立七条第三小学校 教諭 宮下 麻紀 …… 16

5. 新聞でつながる

京都市立上高野小学校 教諭 山本 敬武 …… 20

6. 「主体的に学び続ける子」につながる新聞の活用

京都市立伏見南浜小学校 教諭 谷井 勇介 …… 24

7. 新聞を読み取る力を活用し、表現する力を育む

京都市立羽束師小学校 教諭 古田 祐子 …… 28

8. 学園とともに「健康・未来創造」を実現する

光華小学校 校長 河原 聡子 …… 32

9. 「語意」ではなく『語彙力』を意識させる

京都市立松原中学校 教諭 川北 雅美 …… 36

10. 【対話×デジタル】新聞を活用した文学作品の読み

京都市立西京高等学校附属中学校 教諭 矢倉 裕也 …… 42

11. 社会と子ども、子どもと子どもをつなぐ「新聞」の活用

綾部市立八田中学校 教諭 船越 寿子 …… 48

12. 新聞で培う「ことばの力」

宮津市立栗田中学校 教諭 塩見 優真 …… 54

13. 新聞記事の読解、発表を通じて、読解力及び表現力、批判的思考力を育成する

京都府立峰山高等学校 教諭 馬木 勇語 …… 58

14. SNSメディアと「オールド」メディアから考えるメディアのあり方についての考察

京都両洋高等学校 教諭 西村 将太 …… 68

□第29回NIE全国大会京都大会を終えて

同実行委員会 …… 72

□NIEサポーター寄稿

京都府立田辺高等学校 講師 木村 信浩 …… 73

京都市学校歴史博物館 学芸員 林 潤平 …… 78

inote+P 代表 服部 加奈子 …… 83

大阪シティズンシップ研究会 西村 まさみ …… 85

□京都府NIEセミナー（2025年2月1日開催）

…… 90

□これまでの実践校、準実践校、奨励校、トライアル校

…… 92

※報告書内の時制・所属・肩書きは、2024年度在籍校のものです。

発刊にあたって

ご あ い さ つ

京都府N I E推進協議会 2024年度 会長 位藤 紀美子

2024（令和6）年度は、第29回N I E全国大会京都大会を開催し、京都府におけるほぼ30年になるN I E活動の節目とすることができました。

「探究と対話を深めるN I E～デジタル・多様性社会の学びに生かす～」をテーマとして、8月1・2日、厳しい暑さの中、開催されました。全国から、会員や関係者をはじめ、一般のかたがたも多く、約1200名の参加により、熱気のこもる大会となり、講演や討論等をはじめ、公開授業や実践報告に加え、新たな試みの「ポスターセッション」や「企画展」などもあり、大会全体が相互交流の場となり、好評を得たようです。

おかげさまで、京都におけるN I E活動について、これまでの成果と今後の課題を考えることができます。推進協議会では、大会実行委員会の提案から「N I Eサポーター」制度を設置し、既に任命されたかたがたが学校や地域で新聞活用の指導をされております。また、本年度N I E実践指定校の先生が、大会に参加（発表等）されて学ばれたことを、その後の実践に生かされているという報告があります。年度途中のため、方針を大きく変えることはできませんが、来年度以降が楽しみになります。

本年度のN I E実践指定校として、小学校8校、中学校4校、高等学校2校から報告書をいただきました。力作が多く、熱心に取り組まれたのがよく分かります。

小・中・高を通して、N I Eの実践校として、初年度校から4年目校まであり、またN I Eの指導が初めての先生から8年目になるという先生（勤務校は途中で転任）もいらっしゃいます。いずれの報告書も、学校の教育目標と関連させてN I Eを位置づけています。学校全体として、新聞や児童・生徒の新聞関連作品の配架（掲示）と利用（図書館司書の先生や図書委員の協力のもと）や、新聞と学校行事等との関連づけがなされています。

また、学級指導（朝読書等）や各教科及び「総合的学習・研究」等の授業での新聞の活用や新聞制作・発表・交流を「カリキュラム」に位置づけようとされています。ただ、新聞活用に関して、児童・生徒の興味や問題意識、力や方法等に関する発達段階の実態把握という課題があり、各学年段階、小・中・高という各学校段階の全体を見通すのに、もう少し時間がかかりそうです。

高等学校の2つの報告書は、いずれも「18歳成人」を目指し、「SDGs」や「沖縄の風土や歴史」「自分の将来像」「18歳、今伝えたいこと」「SNS」などがテーマとして挙げられ、一連の活動を通して、選挙権を持つ社会人になる自覚と認識をはかろうとされています。

現在「紙面の新聞」が学校でのN I E学習に限られてきており、通常の学習や生活では、情報機器を使用する児童・生徒がふえています。社会情勢が激しく動き、SNS等で無責任な情報が拡散されていくなか、確かな情報を選択・取得・活用する力は、生きるために必須のものとなります。ひとりひとりがこれからの時代社会を生きていくための情報教育・N I E活動として考究し実施していかなければならないと存じます。

生き方探究（キャリア）教育の視点でのNIEの活用について

京都市立新町小学校 主幹教諭 西村 崇

1. 実践の概要

本校は、教育の理念「自立 共生 創造」、学校目標「自ら進んで考え、ともに高め合い、夢に向かって歩む子の育成」を掲げ、研究に関わる取組を進めてきた。

研究では生き方探究（キャリア）教育について長年取組を進めており、研究主題を「社会的自立を目指す子どもの育成」目指す子ども像を、①人や社会とかかわり、学び合おうとする子（人間関係形成・社会形成能力）②自分を知り、自分をコントロールできる子（自己理解・自己管理能力）③課題を見つけ、解決する子（課題対応能力）④目標を思い描く子（キャリアプランニング能力）に設定し、生き方探究教育における基礎的汎用的能力を伸ばしていくことが必要だと考えてきた。

また、本校では目指す子ども像をモチーフにした新町キャラクターを作り、子どもたちにも基礎的汎用的能力が理解しやすいようにしている。これらのキャラクターを毎日の授業やあらゆる教育的な活動の場面で示すことにしている。



NIE実践指定校となり、この学校全体で取り組んでいる生き方探究教育にNIEを有効に関連付け、取組の一部として加えていくことで、より目指す資質能力に近づけるのではないかと、また学校全体に広めていきやすいのではないかと考えて2年間の取組を進めてきた。とくに今年度は授業の中での活用を意識していくことにした。

2. 新聞の置き場所と活用方法

新聞は、学校図書館に置いて、児童がいつでも手に取って読めるように環境整備を行った。学校司書が中心となり、新聞を掲示して紹介したり、スクラップをして児童が手に取って読めるようにしたり様々な工夫を考えて取り組んだ。

読み物として読むだけでなく、調べ学習で自分が関連する記事をバックナンバーから探して活用するなど、学校図書館の学習・情報センターとしての役割をより一層高めるものになっていた。また、バックナンバーは授業に必要な学年が持っていき活用できるように、

一定期間職員室に保管をし、必要な時に使えるようにした。

また、学校図書館に新聞を置いても教職員はなかなか新聞を手にする機会がないため、朝の時間は職員室の交流スペースに新聞を置き、朝の教職員同士の会話の話題にしたり、朝の会で児童に話すネタを探したりするようにした。昨今教職員でも新聞を購読していない人も多い。昨年度から続けていくことで、その日の情報を朝出勤して確認するような使い方をする教職員も増えた。

さらに、児童が一人一台所有しているGIGA端末をなんとか有効に活用できないかと考え、配信される新聞のワークシートを全校児童が閲覧できるTeamsの共有フォルダに保存して共有し、朝学習の時間や、空き時間に児童が読書の代わりに読めるようにした。こちらでも継続していくことで徐々に広まっていき、読んだ児童がリアクションボタンで反応を返したり、印刷して自主学習で活用したりすることも見られるようになった。



3. 実践の内容

〇5 年生の取組

★生き方探究教育との関連（人間関係形成・社会形成能力）

5年生は社会科「米作りのさかんな地域」の単元のまとめとして、米作りに関するデジタル新聞作成の実践を行った。

デジタル新聞を作成する際、1枚にまとめるためのレイアウトが決まらなかったり、書いていくうちにレイアウトがずれてしまい、その修正に時間がかかったりすることがこれまでにあった。そこで、今回は子どもたちが学習でよく使用している「ロイロノートスクール」を使って作成をすることにした。

ロイロノートを使用して作成するとよいと感じた点が3つある。1つ目は、記事をカードにして書き溜められるということ。社会科の日々の学習でも、自分の意見や調べたことをカードにまとめ、児童同士で意見交流を行ってきた。自分たちのカードが学習の足跡として残っていることで、単元の振り返りがしやすく、まとめ新聞にも活かすことができた。

2つ目はレイアウトがしやすいこと。1枚のカードが1つの記事となるので、配置に困る児童はほとんどいなかった。図の挿入も簡単にできるため、作成時間が非常に短く抑えることができた。

3つ目は手直しがしやすいこと。ロイロノートの共有機能を用いて、お互いに誤字脱字や校正のチェック、アドバイスをし合うことができた。修正もデジタルなので簡単に行うことができた。

完成した原稿は紙で印刷をし、教室の後ろに掲示をして誰でも読めるようにした。デジタルと紙の良い点を生かして新聞作りを行っていくことで、主体的で対話的な学習を行うことができた。

(米作り新聞の作品)



課題を見つけ、
解決する力



○4年生の取組

★生き方探究教育との関連（課題対応能力）

国語科「要約するとき」の学習で、新聞記事を活用した学習を行った。

この単元は、「要約」という言葉の意味に触れ、実際に文章を100字程度で要約するという学習を行う。要約を行う際に大切な点は、教科書に、

- ・伝える相手と要約する目的、まとめる分量をたしかめる。
- ・その話を知らない人や、その文章を読んでいない人にも正しく伝わるようにする。
- ・説明する文章や物語など、元の文章の種類に応じたまとめ方をする。
- ・要約した部分と、自分の感想や意見とをくべつする。と記載されている。

そこで、要約する題材を、「今までの学習に関連のある記事」で「クラスみんなが一読して内容把握ができるもの」に限定し、新聞記事から探すことにした。

4年生は、総合的な学習の時間で地球温暖化やCO2削減など環境学習に取り組んでいたこと、先述したGIGA端末に配信していたワークシートは児童にもなじみがあり内容も比較的容易であることから、よむYOMUワークシートの「プラごみ削減 道半ば」という記事を選定した。

要約に必要な条件は、相手：4年生 目的：プラごみの削減について知らせる 字数：12字程度と決めた。まず新聞記事を読んで、「大切な言葉」「よく使われている言葉」「中心となる言葉」などに色分けをして線を引いていった。その活動をしていくことで、「レジ袋」「40年後に世界のプラごみの量は現在の約3倍となり、10億トンを超えるとされている。」などの単語や文章を見つけていった。

大体的内容は掴めても、4年生にとっては新聞記事には少し難しい言葉もあり、補足の説明を入れる必要はあったが、子どもたちは線を引いたところを拾って、まとめることが

国語科と総合的な学習の時間を合科的に扱い、新聞の特徴も活かした授業展開で授業を進めていくことができた。

[illegible]

字数：百二十字でいど

する。	サイケル	の	勢	力	が	必	要	バ	ー	と	指	摘	部
レ	ジ	袋	な	ど	の	フ	ラ	製	品	は	分	解	さ
れ	バ	く	く	ご	み	と	な	て	川	や	海	バ	
流	上	す	る	と	地	球	の	自	然	を	こ	わ	
と	バ	な	る	そ	の	に	め	レ	ジ	袋	の	代	
わ	ソ	と	な	る	紙	袋	が	有	料	化	され	エ	
コ	バ	グ	を	時	々	す	る	市	民	の	割	合	
知	名	ま	で	増	加	し	た	と	う	環	境	関	
題	の	専	門	家	は	さ	う	な	る	削	減	ヤ	
サイケル	の	勢	力	が	必	要	バ	ー	と	指	摘	部	

2020年7月からレジ袋の有料化が義務づけられた。なぜかというレジ袋によろかんきょうはいをふせぐためだ。有効な対策をしなければ10年後にゴミの量は今の約3倍となり10億トン超えるところまで増えていく。一人一人がレジ袋を持ちこずたためにエコバッグを持ち歩くことを怠りきらないといけな

レ	シ	袋	な	ど	の	ア
に	く	く	こ	み	と	な
出	ず	る	と	地	球	の
に	なる	。	そ	の	た	め
レ	ジ	袋	を	へ	ら	そ
月	か	ら	レ	ジ	袋	の
な	。	そ	の	た	の	レ
紙	袋	が	有	料	化	さ
持	参	す	る	市	民	の
加	した	とい	う	割	合	は
						ま
						で
						増

課題を見つけ、
解決する力

かいけつ

ここでは教材文の中で、筆者の下村さんが、情報を受信しやすくするために書いたスイッチとして、

- ・『まだ分からないよね。』
- ・『事実かな、印象かな。』
- ・『他の見方もないかな。』
- ・『何がかくれているかな。』

このスイッチは新聞記事を読む際にも活かされるのではないかと考えて、授業を展開した。児童は、ロイロノートスクールの色分けしたカードを4つのスイッチと対応させ、気づきを入力した後、交流を図った。

ただ、今まさに起こっている話題を授業に扱うことの意味は大きく、子どもたちは「もっといろいろなニュースを読んでみたい。」「他の見方という視点で読むことが大切だとわかった。」と、情報を多面的に見る重要性に気づいていた児童も多く見られた。

さびと食 研究発表		国語科学習指導案	
1 日 時 令和7年1月21日(火) 3校時 2 単元(題材)名 想像力のスイッチを入れよう 3 本時の目標 新聞を読んで、情報に対する感想を交流し、情報を受け取る側の努力とはどんなことか話し合うことができる。【思】 4 本時の展開 4/6 時間		5年1組 指導者:	
学習活動		主な発問(○)予想される児童の反応(・)	
1. これまでの学習をふりかえる		○筆者のト村さんが、情報を受信しやすくなるために書いたスイッチを確かめよう。 『まだ分からないよね。』 『事実かな、印象かな。』 『他の見方もないかな。』 『何かかくれているかな。』 支援・留意点(●) ☐ ①は、本時の評価規準	
2. 新聞記事を読んで感想や意見を書く。(1人学習)		○4つのスイッチを入れたら、朝日小学生新聞「アメリカ大統領選の」の記事を読んでロイノートに感想を書きましょう。	
3. ニュースを読んだ感想をグループで交流する。(グループ学習)		○グループで感想を交流しましょう。 ・アメリカファーストの流れになるかはまだ分からないね。 ・選挙でどちらが勝ってもおかしくなかったというのは印象ではないかな。 ・悪い面だけでなく日本に良い面もないのかな。 ・他の人はこの話をどう考えているのかな。	
4. グループで交流したことを全体に内けて発表する。(全体学習)		○交流した感想をロイノートに書きましょう。 ○ロイノートに書いたことを発表しましょう。 ・スイッチを仮にしながら読むと、いつもと違う読み方になることに気づきました。 ・自分が気づいていなかった部分を○○さんはず本当かな。と考えながら読んでいました。	
5. 筆者の考えを重ね合わせて、これらのニュースをどのように受け取ったらよいのか話し合う。		○情報の受信者として、どんな努力をしたらよいのかグループで話し合いましょう。 ・一つの情報だけでなく、その行動を決めつけない。 ・他のニュースも読んでから内容を判断するとよい。	

6. ふり返り	○どんな考えを持てばよいのかを一つの視点にふり返りを書きましょう。	●ロイノートに書き、提出する。 【評価の視点】 「読心」において、文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げている。【他】
---------	-----------------------------------	---

5. 板書計画

ふりかえり	情事と読心取の板書計画	スイッチを入れてニュースを読心と読心	読心力のスイッチを入れるよ の読心力のスイッチを入れてニュースを読心と読心 を読むことができるよ。
-------	-------------	--------------------	---

6. 授業参観の視点（自由にいくでも）

① 既習内容を意識して新聞記事を読み、考えをもつ手立てになっていたか。
 ② 新聞記事を読心を通して、情報の受け手としての努力をグループで考えることに繋がっていたか。

読心力を高めるには、

読心力を高めるには、

読心力を高めるには、

読心力を高めるには、

読心力を高めるには、

○ 読心力を高めるには、

○ 読心力を高めるには、

(資料)



4. 成果と課題

【成果】

- ・新聞記事を授業で活用することは、社会と自分とのつながりを考えることができるので活用次第では意見の深まりが見られる。
- ・今起こっているニュースを扱うことや、様々な人のニュースを読むことは、生き方探究教育の「夢や目標を思い描く力」の向上にも効果的だと感じた。
- ・新聞とインターネットやGIGA 端末などを効果的に組み合わせることで、授業の幅が広がった。

【課題】

- ・新聞を活用した実践を全体に広めることに難しさを感じる。
- ・新聞の管理面の大変さと、実際に活用する量とのバランスを取るのが難しい。
- ・授業で活用する際には、記事の内容の認知度や理解度を考慮して提示の仕方を工夫する必要を感じた。

【実践者の感想】

年間の取組を通じて、生き方探究（キャリア）教育で育てたい資質能力の向上にNIEは効果的に働くことを実感できた。効果的に活用できる反面、授業で使う際に、指導者の教材開発や教材準備にどうしても時間が割かれるため、多くの実践者に広げていくことには難しさを感じている。

授業での活用だけでなく、新聞作成の取組は全体に広がりつつある。見出し、図・写真・表を効果的に使う、決められた文字数でまとめた文を書くという活動は、教科領域を超えて必要な力であり、単元のまとめの学習の中に位置付けるなどして、学校全体でも良さを共有していきたい。

小学校 読解

感じる つながる 自分から 自分らしく「かがやき」学びをつむぐ ～新聞の効果を理解し、自分たちの願い・思いを表現する～

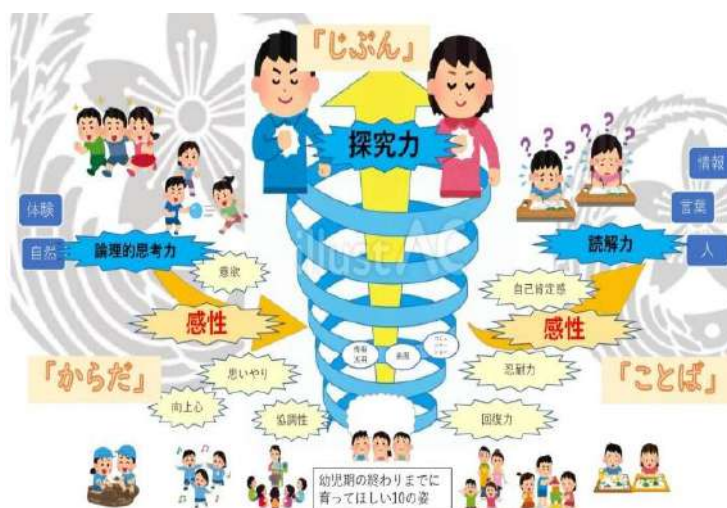
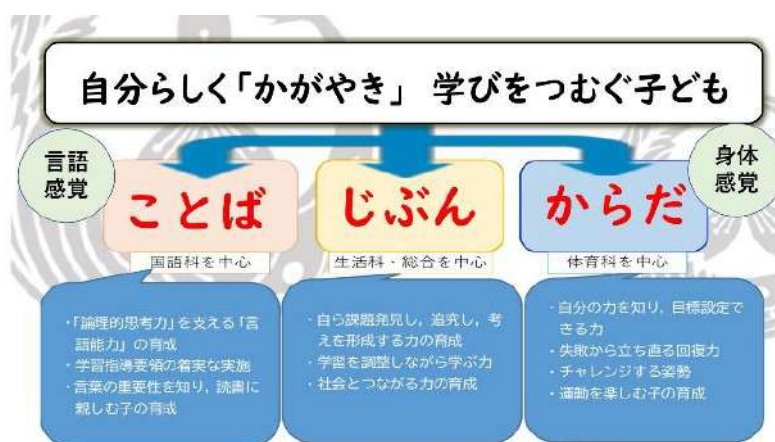
京都市立御所南小学校 教諭 森川 亜里沙・谷口 真由

1. 実践の概要

本校は、「感じる つながる 自分から」という学校教育目標、そして「自分らしくかがやき 学びをつむぐ子ども」という研究主題を掲げ、生活科・総合的な学習の時間、国語科、体育科を中心に取組を進めている。

特に、2つの力を基盤として研究を進めてきた。1つ目は、「読解力」である。様々なテキストはもちろん自分以外の「他者」、直面した「状況」・「事象」を読み解く力のことを指す。そして、2つ目は、「論理的思考力」である。情報と情報、既知の知識・経験などを結び付けながら、筋道立てて考える力である。これらの力を基盤とし、子どもたちが自ら問題解決に向かって探究する姿を目指している。

その中でN I E実践指定校2年目の令和6年度は、4年生の実践を中心に実践を行った。総合的な学習の時間「かがやき」においての探究的な学びの中で、新聞というメディアの効果やよさを実感するとともに、自分たちの「もっと多くの人に伝えたい！」という思いや願いから主体的に学ぶ姿を期待して取り組みを行った。探究的な学びの中で、必然性のある新聞との出会いは子どもたちの「よりよく伝えたい。」という思いに火が付く様子が見られた。ここに実践の成果と課題を報告する。



2. 環境としてのNIE

① 玄関ホールの新聞コーナー

子どもたちが新聞に触れ合える環境として、玄関ホールに新聞コーナーを設置した。

数社の新聞を用意して、その日の新聞が手軽に読めるようにした。学年関わらず、登校してからの朝の時間や休み時間、さらには放課後まで新聞を広げて読む子どもたちの姿が見られた。新聞コーナーの近くには、読書に親しみ、腰をかけて本を読むことのできる「読書の木」があり、その周辺で新聞を読む子どもも見られた。



② 英語に触れる教材として

新聞コーナーには英語版の新聞も設置した。英語版の新聞は世界のニュースも知ることができるとともに、教科の学習で学んだ表現も見られる教材である。また、「今週の見出し英語」として、見出しの英語を切り抜き、和訳を掲示するなど、子どもたちが興味をもてるように意識してコーナーを設置した。



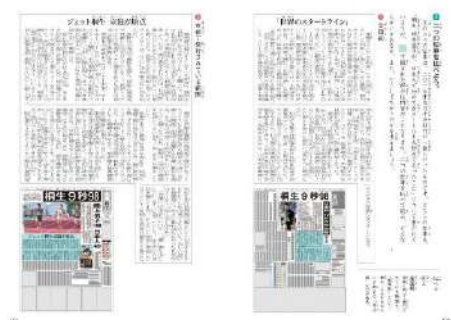
③ みんなで書き込む新聞掲示板

定期的に比較できる記事や子どもたちに問いかける記事の掲示板を設置した。記事を読むことはもちろん、問いに対して自分の考えや意見を書き込んだり、その根拠を表したりするなどの工夫を加えた。子どもたちはその前で立ち止まり、書き込む姿が見られた。また、校長先生からのコメントもあり、嬉しそうにする姿も見られた。



④ 4年国語科「新聞を作ろう」

国語科の学習では新聞の基本的な構成について学習した。見出しの言葉で引き付けられて読みたくなることができたり使う写真の効果に着目したりすることができた。教科書教材だけでなく実際の新聞も活用して学ぶことで、さらに新聞に興味をもって読む姿が見られた。



比べよう！探ろう！新聞の効果的な伝え方 ～総合的な学習の時間との関連を生かして～

今年度4年生で実践に取り組んだ事例を紹介する。

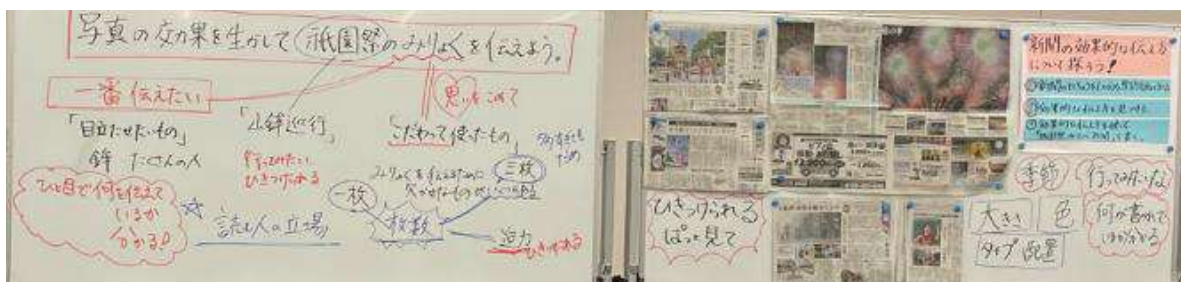
総合的な学習の時間で「祇園祭の魅力を多くの人に伝えたい」という思いから学習をスタートさせた。そこで、国語科の学習で新聞と出会い、新聞という方法で地域の方や家族、他学年に向けて発信することにした。

まずは、自分が思うように新聞を作成してみた。自分たちでは上手く新聞に表現できたと達成感をもつことができた。読解1時間目には、自分たちの新聞をよりよくするためにはどのような学習が必要かを話し合った。「写真の使い方がよくわからない」、「読みたいと思える見出しを書きたい」、「文末表現がもっと工夫できそうだな」など、困りやよりよくするためのことを話したり、それらに共感したりする声が上がった。そこで次時は、より祇園祭の魅力を伝える新聞を作成するために、本物の新聞と比べ、効果的な伝え方を探っていくこととした。

読解2時間目は、グループで作成した「祇園祭の魅力新聞」と「各社新聞の紙面」とを比較した。記事を読み比べ、各紙の記事の書き方の工夫についてグループで話し合った。自分たちが書いた記事の見出しやリードを読み返し、記事に合う言葉は、どんな言葉なのか、言葉にこだわって話し合い、修正ポイントを見つけた。



また、写真表現の工夫を調べたクラスでは、祇園祭の魅力についてまとめたパワーポイントの資料を見比べ、写真の効果について話し合った。読む人の立場に立って考えること、一目で何を伝えているか分かる写真を選ぶことが大事だと考え、次時の新聞作成につなげた。



単元の最後である3時間目では、本物の新聞から読み取ったことを生かして新聞を作成したり、修正したりした。1、2時間目に気付いたことや考えたことをもとにして作成できたので、子どもたち自身、読む人の立場に立って、言葉や写真にこだわる事ができた。完成した新聞は、御所南小学校30周年記念イベントや参観日に新聞を掲示し、保護者や地域の方にも見ていただくことができた。新聞作りを学習のねらいや目的を明確にして新聞を活用することができた。

3. 成果と課題

<成果>

教室に新聞を常備し、子どもたちが新聞記事に触れる機会を増やすように取り組んだ。ただ新聞を配架するだけではなく、今年度ならば「祇園祭」や「全国のお祭り」に関する記事を読んでみようテーマを与えることで子どもたちが新聞を手にする機会と新聞記事をもとにした子どもたち同士のコミュニケーションの機会が増えた。また、学校以外でも自分の興味をもった新聞記事をスクラップし、感想や自分の考えを書く取り組みをする子どもたちも増えた。新聞を他教科と関連させたり日常的に活用させる機会を設けたりすることで、子どもたちが様々なジャンルに興味・関心をもち、自ら情報を得ようとするようになった。

<課題>

子どもたちは興味津々に新聞を手に取り、読もうとするが、難しい言葉や読めない漢字が多く、内容の理解が難しいと感じた。調べ学習に使用した際も、自分も理解できていない状態のまま、情報として発信しようとしていたので、国語辞典を上手く活用していきたい。



小学校 全学年 国語科・総合的な学習の時間など

新聞を活用して、友達と考えを深め合い、 自分の考えを発信しよう！

京都市立光徳小学校 教頭 岡本 洋子

1. 実践の概要

本校では「自ら学び 自信と誇りをもち 共に高め合う子の育成」を学校教育目標に掲げ、育成したい資質・能力を「問題解決力」と「コミュニケーション力」としている。令和4年度からは、NIE実践校として「新聞を活用して、友達と考えを深め合い、自分の考えを発信しよう！」というテーマで3年間、取組を進めてきた。NIE実践用の新聞やはがき新聞原稿用紙、透明ポケット「ミテミテ」を活用して、各学年の授業だけでなく、さまざまな教育場面で実践することができた。総合的な学習の時間では、これまで学んできたインタビューの仕方や新聞のレイアウトの構成などを生かし、壁新聞やポスター発表などで活用して発表してきた。

2. 実践事例

○ 配架と活用方法

5・6年生の教室前にNIEコーナーを設置し、毎月2社の朝刊・夕刊を配架した。朝の読書の時間や休み時間、空き時間などに、児童は自由に新聞を手にとって読むことができた。スキルタイム（帯時間）で取り組んでいる「対話力アップトレーニング」では、新聞で見つけた記事について、二人組やグループで意見交流をした。また、全学年で取り組んでいるスキルアップ学習（家庭学習）では新聞記事からテーマを選んで自主学習を進めている児童もいた。はがき新聞原稿用紙はいつでも自由に使用できるよう種類ごとに棚に備えた。



○ NIE 全国大会京都大会への参加

① 8月1日（木）に行われた開会式の歓迎公演では地域で活動されている京都中堂寺六斎会と一緒に、本校の児童が太鼓や踊りを披露した。



② 8月2日（金）のポスターセッションでは、5・6年生の児童が前年度に取り組んだ内容を発表した。5年生は「六斎念仏」、6年生は「中堂寺大根」について、総合的な学習で学んだことを新聞にまとめ、全国の教育関係者や報道の方に向けて自分たちの考えを伝えることができた。たくさんの参加者から感想や質問を受け、児童は緊張しながらも自分の考えを伝えようと意識して取り組む姿が見られた。



○ 各学年の取組の内容

① 3年生 国語科「聞き取りメモのくふう」

国語科で学んだメモの取り方を学習のまとめとして、教職員に小学生の頃夢中になっていたことについてインタビューをした。項目ごとに分けてメモをとったり、話を聞くときは、メモばかりに集中するのではなく話し手の顔を見て聞いたりするなどの工夫をすることができた。インタビューの後には自分のメモを見ながら、クラスの友達に伝えることができた。



② 3年生 総合的な学習「すてき 大好き 光徳のまち」

校区内にある京都市中央市場や京都リサーチパークなどについて調べたことをグループごとに新聞にまとめた。新聞にまとめる際には、はがき新聞原稿用紙を活用し、見出しやレイアウトなどを工夫することができた。出来上がった新聞はグループごとに発表し、お互いに見合って感想やアドバイスを受けることができた。



③ 5年生 スキルタイム「対話力アップトレーニング」

スキルタイム（帯時間）の中で、新聞記事から見つけたニュースを話題にして、付箋を使ってメモをとりながら聞いたり、質問をしながら話を広げたりして対話を楽しむ姿が見られた。



④ 6年生 国語科「聞いて、考えを深めよう」

国語科で、光徳小学校のよいところを考えた。学校のためにボランティアで活動していただいている「PTA」「わあのなかま」の皆さんにインタビューをし、どのような思いで活動されているのかについて聞かせていただいた。

初めて経験する1対1のインタビューとあって、児童はとても緊張していたが、「相手の顔を見ながら」「相槌を打って」「要点をメモしながら」といった5年生までに学習したインタビューの時のポイントを思い出しながら、しっかりと話を聞くことができた。インタビューで情報を集めたことは、はがき新聞原稿用紙を使うことで、文字数を調整したり、レイアウトを工夫したりして、まとめることができた。



3. 成果と課題

【成果】

身近なところに新聞を配架することで、児童は気軽に手に取ることができた。対話力アップトレーニングの時間には、児童は新聞の記事から話題を見つけ、国内だけでなく世界各国のニュースにまで広がりが見られた。

総合的な学習などの時間でどの学年も新聞作成を行った。児童は交流を通して内容を吟味し、検討をしていた。児童は新聞を作り上げるという目的意識をもち、熱心に取り組むことができていた。

学習の中で、はがき新聞原稿用紙を活用したことにより、学年が上がるにつれてわかりやすい表現で作り上げることができた。そして実際の新聞を参考にレイアウトを考え、工夫して新聞づくりに取り組むことができた。新聞完成後、友達や他学年、保護者などに発表する際にも自信をもって発表している姿が見られた。

【課題】

新聞の配架は高学年の教室前だったので、今後は図書館に配架したり、子ども新聞やデジタル新聞などの活用も検討していきたい。

どの学年も新聞作成の取組を計画し、新聞作成の力は身についたと思われるが、記事から読み取る力やお互いの新聞を見合って質問や自分の考えを発信する力はまだ十分とは言えないので、継続的に研究していきたい。

小学校 全学年 自学自習・児童会との連携

子どもたちの主体的な学びにつながる新聞の活用

京都市立七条第三小学校 教諭 宮下 麻紀

1. 実践の概要

本校は「未来を拓く～めざそう！なりたい自分～」を学校教育目標として掲げ、全ての子どもたちが「なりたい自分になれること」「将来やりたいと思ったことができること」、義務教育修了時に「進路選択の幅を広くもてること」、そして、自分の未来だけではなく、社会全体の未来を拓く力をつけることを目指して日々の教育活動に取り組んでいます。

令和5年度からNIE実践協力校の指定を受け、2年目になる今年度は1年目の実践をもとにした新たな実践に取り組んできました。1つ目は新聞という教材を子どもたちの自学自習に活用する実践です。2つ目はNIE実践協力校として取り組む中で子どもたちが新聞に触れる機会が増え、委員会活動の一環として「新聞委員会」を立ち上げた実践です。どちらの実践も手探りの中で始めたばかりの取組であり、至らぬ点も多々あるかと思いますが、今後もよりよい実践となるように努めていきます。

2. 実践内容

○ 教職員も新聞に目を向ける環境づくりを

教職員自身が新聞記事に触れる機会も増やすために、職員室の給湯室にある机に過日分の新聞を配架する取組を、今年度も引き続き行いました。

教育に関する記事や教室で子どもに話せるネタになるような記事に加えて、連載記事も壁面に掲示するようにしました。京都新聞の連載「はれたらいいね～ある発達障害児との日々～」の記事を読むことが、保護者の思いや願いに触れることにつながり、教室で困りのある児童のかかわりのヒントにもなりました。

新聞記事をもとに教職員間で話をしたり、本校の総合育成支援教育を充実させていくきっかけになったりする効果がありました。



2024年9月4日付 京都新聞掲載

○ 子どもの自学自習につなげる取組（４年１組 大西 裕樹）

児童に新聞を提示して、子どもたちの学びにつなげる４年１組の実践について紹介します。以下のような流れで、児童に新聞を提示して、子どもたちの自学自習へとつなげていきました。様々なしかけを取り入れることで、児童の「知りたい！」「調べたい！」という学ぶ姿勢が向上しました。

【新聞を児童に提示する流れ】

① 前日の夕刊２紙を指導者が目を通して、２紙より１記事ずつ選ぶようにする。

→最優先は学習に関連する記事。すでに学習した内容と関連する記事や、場合によっては予習につながる記事を提示しました。

→学習に関連する記事がない場合は、時事問題に関連する記事。

→場合によっては同じ写真が使われていることがあるため、あえて同じ写真の記事を提示して新聞社２紙のちがいに気付けるように働きかけました。

★ポイント★

- ・学習と関連付けを意識して意図的に課題を提示する。
- ・読むための必然性を生み出す５つの工夫を行う。（次ページ参照）

② ２つの記事をまとめたコピーを児童に配付する。

→あわせて、縮小した記事を教室内の特定の場所に置くようにしました。児童が自由に手に取れるようにして自学ノートに貼って活用できるようにしました。

★ポイント★

- ・それぞれのサイズのちがいの利点を生かせるように、読むためのコピーと自学に活用できる縮小コピーに分ける。
- ・新聞記事を読んだ後の児童どうしの会話を聞きながら、児童に縮小コピーされた記事を手取るように働きかける。

③ その場で記事の概要を指導者より紹介して、児童に読むように促す。

★ポイント★

- ・単に読むのではなく、あえて疑問を生むように児童に問いかける。
- ・時間がない時は、見出しのみ紹介して気になることを調べるように促す。
- ・新聞記事とは関係がない話題ともキーワードで結びつける。
- ・配って終わりにならないように、柔軟に声をかけて配付する。

【読むための必然性を生み出す5つの工夫】

(工夫①)

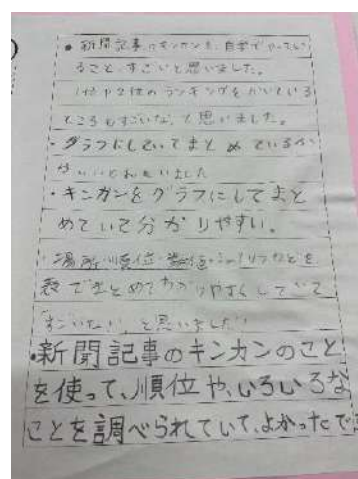
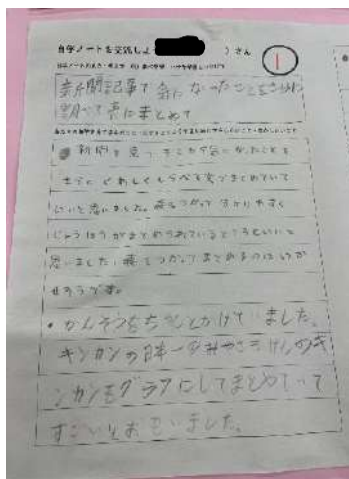
自学自習につながるように、気になることを調べたり、自分の思いや考えをまとめたりすることにつながるように、新聞記事を活用して取り組んだ自学を紹介しました。指導者の例のような声かけでも子どもたちの刺激になりました。

例：「〇〇さんがこんな新聞記事を使って、こんなことをしていたよ。」

「こんなふうにもまとめるといいね。」

(工夫②)

自学交流会で新聞記事を使って取り組んだ自学ノートを、互いに見合っって肯定的なコメントをしあいました。コメントをした自学ノートは教室や廊下に掲示をして、互いの頑張りを認め合えるようにしました。



(工夫③)

指導者が、新聞記事に関係するクイズを毎日朝に黒板に書いておき、一日の中でクイズの答え合わせをしました。新聞を読まないクイズに答えられないもので、新聞記事を読む必然性が生まれます。

(工夫④)

学習で新聞記事の内容にふれる声かけをしました。

例：前に配った〇〇の記事があったけれど、覚えているかな。

このような声かけが子どもたちへのプラスの刺激になり、継続することで、例のような声かけだけで、翌日には数人の児童が自学自習で深めたり広げたりするようになりました。

(工夫⑤)

子どもたちの「調べ学習をしたい！」という気持ちを妨げないように、記事について気になることがあれば、その場や次の休み時間や空き時間にGIGA端末を積極的に使うように促しました。習慣化すれば、「先生、〇〇について調べたいので昼休みにGIGA端末を使っていいですか？」など、新聞記事をきっかけに自発的に学びに向かうようになりました。

○児童会活動での取組

【七三新聞委員会の発足】

本校では、既存の委員会活動にとらわれず、6年生児童が学校をよりよくするための委員会活動の立ち上げを一から行っています。今年度は、「学校の出来事をみんなに伝えたい。」「新聞を書いてみたい。」という児童が、七三新聞委員会を立ち上げました。各学年に取材に行き、行事の感想などについてインタビューをして記事を書きました。GIGA端末を使って作成をしました。国語科の学習で習ったことを生かして、読みたくなる見出しをつけたり、クイズコーナーや先生紹介コーナーなど連載をつくったり、工夫をこらした新聞づくりに励んでいました。作った新聞は、校舎に飾られ多くの児童が立ち止まって見ていました。



3. 成果と課題

(1) 成果

実践2年目を迎えましたが、昨年度からの校長室前にある新聞掲示を見て、児童が新聞に興味をもち「自分たちも新聞をつくってみたい。」という意欲を引き出したからこそ、今年度は新聞委員会が発足したのだと思います。この2年間で児童・教職員ともに新聞に親しみをもち、新聞から様々な情報を得ることができました。また、ただ新聞を配架するだけではなく、児童が「知りたい!」「調べたい!」と思えるきっかけとなるような、声かけや準備を行うことで、学ぶ意欲の向上につながりました。自学自習につながる実践は4年生が中心に行いましたが、様々な働きかけを行うことで、他の学年にも応用することができると思います。今後も、新聞を教科の実践に取り入れるだけでなく、様々な場面で新聞を教育に取り入れていきたいです。

(2) 課題

新聞に親しみをもった児童が増えている一方で、活字を読むことに意欲がもてない児童も一定数います。「新聞は読んでみるとおもしろい!」と実感をもてるように、低学年からきっかけを作っていく必要があると思います。

小学校 5年生 総合的な学習の時間

新聞でつながる ～自分の思いを伝える手段として～

京都市立上高野小学校 教諭 山本 敬武

1. 実践の概要

本校は、本年度令和6年度よりNIE実践校となった。学校教育目標「思いやりにあふれ、自ら考え行動する子の育成」を中心に据え、「つながり」を意識し、よりよく生きるための資質・能力を育成することを目指している。また、本校の研究主題「つながりを意識した授業・環境づくり～3年後の姿を考える～」を支えていく上でも、NIEの実践が効果的であると考えた。

2. 実践内容

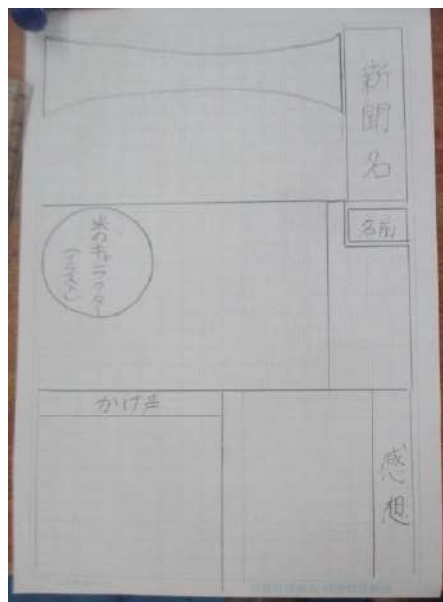
○新聞の掲示の工夫

子どもたちに少しでも新聞に興味をもってもらうために高学年の下駄箱の上にある掲示板を活用した。掲示板には2社のその日の新聞の一面を掲示し、新聞社によってトップ記事や見出しの付け方などが違うということに気付いたり、世の中の動きに興味をもったりできるようにした。朝登校して教室に上がる前に、一瞬でも目に入る場所に掲示することで、少しずつではあるが新聞に対して関心をもつ児童が増えた。

自分たちが取り組んだ「はがき新聞」を書く際、見出しの付け方や割付けの仕方の参考にもなった。



(上) 新聞の一面の掲示コーナー



(右) 新聞の割り付けを参考に子どもが考えた「はがき新聞」の割り付け案

○総合的な学習の時間での活用

今年度は実践1年目でもあり、5年生の総合的な学習の時間のみでの実践とした。総合的な学習の時間『かみたかの農業ではたらく』における、米作りにかかわる内容を「はがき新聞」に書くという形で行った。田植え・稲刈り・販売の三部作ではがき新聞の作成を行った。

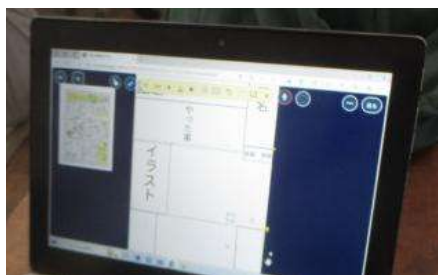
対象：5年生

教科「单元名」：総合的な学習の時間 「かみたかの農業ではたらく」

方法：はがき新聞(公益財団法人 理想教育財団による提供)

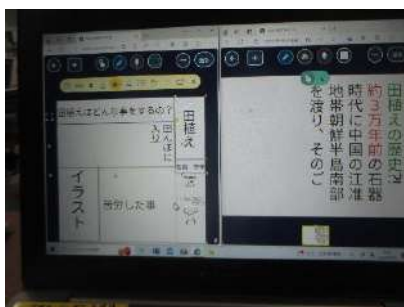
5年生は総合的な学習の時間の「わたしと仕事」で働くことについて考えていった。働き方について自分の見方や考えを深めていき、地域の方々にお世話になっている米作りにつなげていった。その実体験を「はがき新聞」で表現していった。自分自身が新聞を書くにあたって、新聞の一面掲示コーナーの環境づくりが子どもたちに大いに役立った。新聞作成にあたっては、タブレット端末を使って進めていく子、紙媒体を使って進めていく子、その両方を組み合わせてハイブリッド的に進めていく子など子の実態に合わせて選択させた。

① ロイロノートを活用して書きたい話題を挙げていく。



② タブレット端末や紙で割り付けを考える。

③ 話題を選び、記事に書き表していく。



④ 見出しを工夫する。



⑤ 新聞を完成させる。



実際の掲示の様子



はがき新聞を掲示することによって、自分と友だちの新聞を比較することができた。友だちの新聞の良さに気付くことで、自らの新聞づくりの参考になった。また、回数を重ねることで意欲的に取り組む児童も増え、見出しや割り付けなど新聞づくりの工夫も考えられるようになった。また、自分の思いを記事の中にどのように組み込んでいくかを意識して新聞を作ろうとする姿がたくさん見られた。

個々の作品

～田植え編～



～稲刈り編～



～販売編～



3. 成果と課題

(1) 成果

- ・日頃、新聞をはじめ活字に触れる機会が少ない児童にとって新聞が学校に毎日届けられ、それに触れられるように意図的に仕掛けることで、児童が新聞に対して興味をもったり、新聞に対する抵抗をなくしたりすることができた。また、新聞を目にすることで必然的に世の中の動きにも目を向けられるような児童が増えた。
- ・はがき新聞を活用し、どのような情報をどのようにまとめていくのかなどを考えることを通して、個々の情報処理能力が高まった。
- ・『かみたかの農業ではたらく』の单元以外でもはがき新聞でまとめてみたいという意欲にもつながった。実際に、総合的な学習の時間のもうひとつの柱である『わたしと仕事』の单元のまとめにもはがき新聞を活用し、自分の将来の夢についてまとめることができた。

(2) 課題

- ・学校全体にN I Eの取組を広げていくには系統立てた綿密な計画やカリキュラムマネジメントが必要になる。
- ・N I Eの取組を十分に教職員に周知する時間が必要である。
- ・新聞の配架に関しては、学校司書などと連携を図っていくのが望ましい。

小学校 全学年 国語科等

「主体的に学び続ける子」につながる新聞の活用 ～子どもたちが新聞に親しめる環境づくり～

京都市立伏見南浜小学校 教諭 谷井 勇介

1. 実践の概要

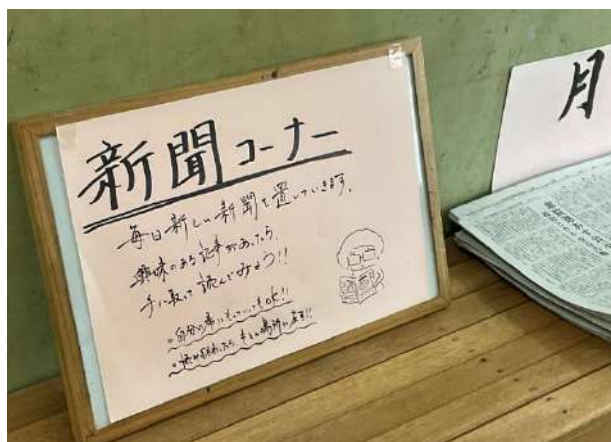
本校は、「笑顔 かがやく 南浜の子～自ら考え判断し、つながりを大切にしながら、豊かに表現する子の育成～」を学校教育目標として掲げ、全ての子どもたちが「主体的に学び続ける子ども」となることを目指し、日々の教育活動に取り組みました。

本校の5年生を対象に聞き取り調査を行ったところ、新聞をとっている家庭はかなり少なく、多くの子どもたちはテレビやインターネットのニュースで様々な情報を得ているという実態が分かりました。そこで、NIEの実践として、まずは「子どもたちが新聞に親しむ」ことを目標に設定し、そのための環境づくりを行いました。また、国語科の学習で新聞を活用し、より主体的に学ぶ姿を目指した実践を行いました。

2. 実践内容

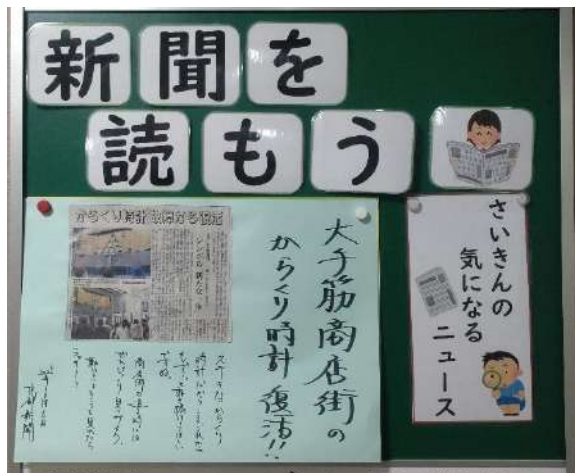
○ 子どもたちが新聞に親しむ環境づくり ＜新聞コーナーの設置＞

子どもたちが気軽に新聞に触れ、新聞に親しむことができるよう、新聞コーナーを設置しました。以下で述べる国語科での実践をした時期とあわせて、5年生の教室前に、各新聞社の新聞を配架しました。実践をする前にはほとんど新聞を読んだことがなかった子どもたちも、すぐ手にとれる場所に新聞が置かれていて、自分の席に持って行って読んでもよいという環境を作ったことで、朝の読書の時間などに新聞を読んでいる姿を少しずつ見かけるようになりました。「こんな記事見つけた」と自分が興味をもった記事を担任に紹介してくる子も出てきて、新聞が情報を入手する手段の1つになっているように感じられました。

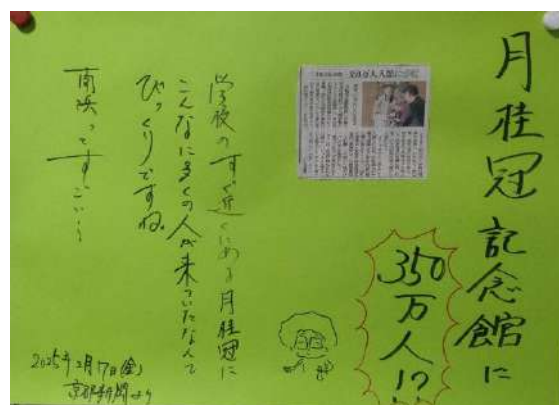


＜気になるニュースの掲示＞

全校児童を対象として、少しでも新聞に興味をもつことができるよう、「さいきんの気になるニュース」を紹介するコーナーを作りました。できるだけ多くの子どもの目に触れるよう、どの学年も給食当番が毎日通る場所である職員室前に設置しました。コーナーを通りかかった子どもが「何これ?」「読んでみたい」と興味をもてるよう、伏見南浜地域のニュース記事を中心に選び、新聞記事、簡単な記事の内容、N I E担当教職員のコメントを掲示しました。



身近な出来事の記事を選んでいることもあり、通りかかって掲示を見た子どもたちは「大手筋のからくり時計や」「今度通ったときじっくり見てみよ」と口々に感想を言っていました。中には「復活ってどういうこと?」と言いながら、あわせて掲示している記事をじっくり読んでいる姿も見られました。



○ 教科指導の中での活用

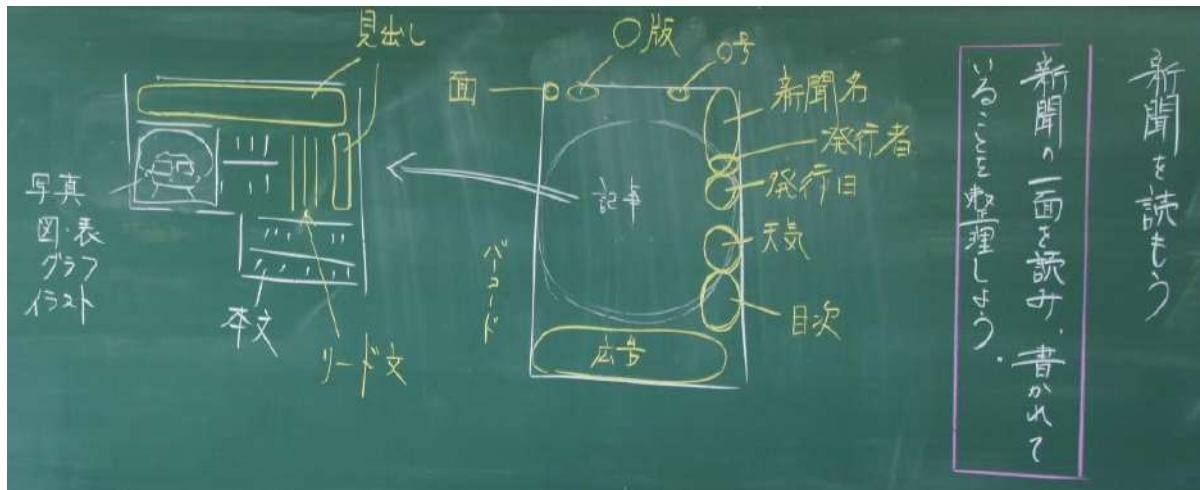
＜国語科での取組＞

教科指導としては、5年生の「新聞を読もう」の学習で、新聞を活用しました。この単元では、新聞記事の構成を理解すること、新聞記事では編集の過程で事実が取捨選択されることを理解することを目的としています。そこで、実際の新聞を使って学習を進めることで、子どもたちの興味をより引き出し、より主体的な学びにできるよう、実践を行いました。

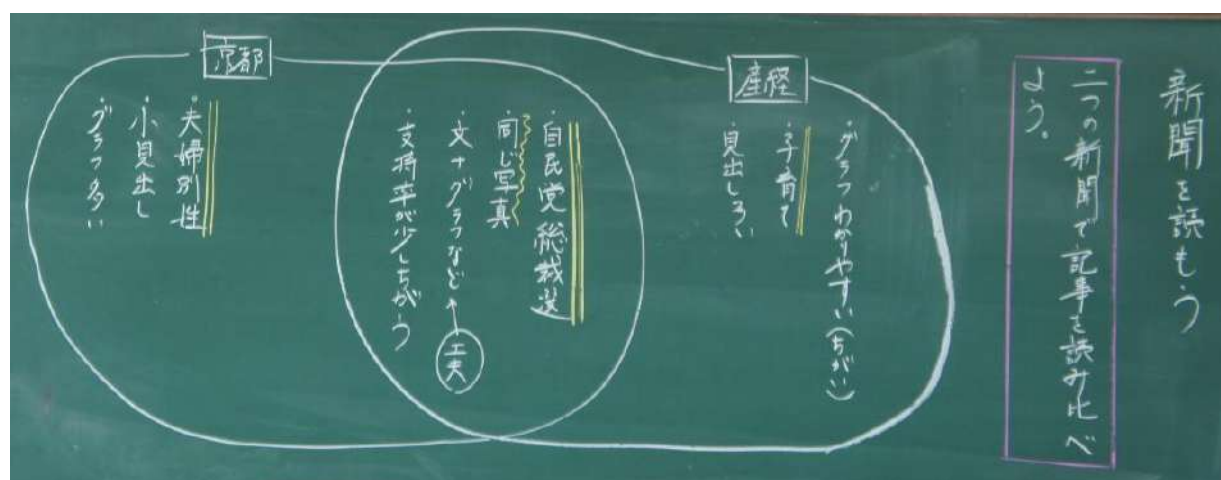
全2時間のうち、1時間目は、見出しやリード文、本文などの、新聞記事の構成について調べました。クラス全員がそれぞれ異なる新聞を見て、一面に書かれていることを交流しました。全体交流をする中で、発行された日も新聞の種類も違うのに共通して書かれている



ことを見つけ、それぞれに「見出し」や「リード文」などの言葉をつけていきました。子どもたちは、全員バラバラの新聞を読んでいたはずなのに、全員に共通している項目があることに驚き、他の新聞でも同じようになっているのか確かめようと、自分から休み時間にも新聞を開いている様子が見られました。



続く2時間目では、新聞記事の編集の過程で事実が取捨選択されることを学びました。同じ日の同じテーマの記事を2つ選び、それぞれの新聞で何が書かれているのかを読み取りました。今回は「総裁選」をテーマに選び、書かれている記事にどのような違いがあるのかを読みました。書き方だけでなく、書かれている内容についても、それぞれの新聞で違っていることを知りました。その後、教科書に掲載されている記事を使って、実際の新聞記事から読んだことと同じであることに気づくことができました。この授業でも、授業の途中から「他の新聞やとどうなってるんやろ」「他のも調べてみたい」と子どもたちの意欲を高めることができ、授業後にも自主的に学びを深めようとしている姿が見られました。



3. 成果と課題

(1) 成果

今年度は、取組1年目ということで、子どもたちが新聞記事に触れ、新聞に少しでも親しめるようにすることを目標として取り組んできました。教科学習の中で新聞を活用したことで「新聞を読んでみよう」「もっと調べてみたい」という子どもたちの意欲を引き出すことができ、その意欲を実現できる新聞コーナーを授業時期に合わせて設置したことで、新聞に触れる機会を多く作ることができました。気になるニュース紹介コーナーを設置し、地域に関係の深いニュースを中心に紹介したことで、授業実践をした5年生以外の様々な学年の子どもも新聞に興味・関心をもつことができました。

(2) 課題

新聞に触れ、親しむ場面が増えてきたものの、自分で新聞を読んで理解できる高学年以外は「新聞を活用する」段階には至っていないと感じました。高学年だけに向けた取組を進めるのではなく、全校児童に向けた取組を進めていく必要があると感じました。また、次年度以降は、教職員主導の取組だけでなく、委員会活動などの中で、児童主導の取組として進めていきたいと感じました。

小学校 全学年 国語・社会科・生活科・総合的な学習の時間

新聞を読み取る力を活用し、表現する力を育む

～NIE エッセンス「羽束師モデル」～

京都市立羽束師小学校 教諭 古田 祐子

1. 実践の概要

本校は、京都市の伏見区に位置し、学校周辺には田畑が広がり、川が流れる自然豊かな地域である。児童数 597 名、学級数 24 学級、教職員 50 名の比較的規模の大きな学校である。令和 3 年度より N I E 実践校となり、本年度 4 年目になる。学校教育目標を「なりたい自分に向かって学び合いしなやかに 生きる子の育成」と設定し、これまで研究を進めてきた。

本校の子ども達は素直で真面目な児童が多く、自分から進んで学習しようという力や、学習したことを使って考えたり、自分で選んで使ったりする力に課題がある。それを踏まえ、子ども達に各教科で培った力を活用する力をつけていきたいと考えた。グランドデザインの中心には、育てたい資質・能力「活用力」と「思考・表現力」、育てたい非認知能力「ねばり強く自己調整する力」を据えている。その一つとして、各教科で学んだ力を新聞に書き表したり、新聞を読み解くことで、自分の考えを深めたりできるのではないかと考え、昨年度より活用力・表現力・課題設定力の育成に取り組んでいる。新聞を読むことで読み取る力をつけたり、新聞が身近なところにあることで対話力や表現力をつけたり、新聞から自分たちの学びにつなげる活用力を育成したいと考えている。

2. 実践内容

○学校全体として

（１）活用のための研修

新聞を活用した授業の工夫について、校内研修を実施した。各学年それぞれが行ってきた様々な教科学習での活用方法や、帯時間での実践を交流し、学校全体としてどのような取組ができるのかを考えていった。夏季休業中には、2 学期の開始に向けて、『はがき新聞の書き方』についての研修を行った。また、道徳科での新聞活用の研修、京都新聞社の記者の方を講師に迎えて研修などを実施した。



（２）校内の環境

子どもたちがいつでも閲覧し、手にとって読むことができる場所として、校長室前に新聞コーナーを設置している。さらに、新聞コーナーの横に掲示板を設置し、複数紙の新聞を読み比べたり、注目される記事を取り上げて掲示したりしている。新聞の書かれ方についても示し、どのような構成で書かれているのかも分かるようにしている。同じ日の別の新聞を3社分掲載し、「リード文で比べてみよう。」と短くまとめられた文章に着目できるように色を付けて示した。子ども達もよく通る場所なので、コーナーに置いている新聞を立ち止まって読んだり、教室に持ち帰って読んだりする子どもたちの姿が見られるようになった。また、教室の入口に新聞を掲示し、常に新聞から情報収集ができるようにしている。

また、帯時間や朝読書の時間を活用し、新聞を読む時間を設定している。新聞記事を使ったクイズを解かせたり、見出しを付ける活動を行ったりすることで、子どもたちが新聞に興味を持てるようにしている。デジタル新聞も購読し、子どもたちが自分のパソコンを使っていつでも新聞を読めるようにしている。



(2) N I E 委員会の開設

新聞記事に、より親しみがもてるよう、令和5年度より委員会活動の中にNIE委員会を立ち上げた。新聞を各教室前に掲示し、それをクラスで読み合う活動を行っている。コラージュ新聞を作成し、廊下に掲示することで、他の子ども達も興味をもって新聞を読んだり、コラージュ新聞を見たりしていた。より自分たちの身近なところで友達が書いたコラージュ新聞には大変興味を示していた。

(3) カリキュラム・マネジメント（年間を通しての位置づけ）

各教科の中で、新聞を使った学習をどこに取り入れるのか学年で学期ごとに話し合った。教科横断的に学習できるよう、単元配列表にN I Eの項目を位置づけた。各学年、概ね1学期に1単元、年間で3単元、重点的に取り組むよう設定した。昨年度取り組んだ「新聞をスクラップしよう」「クラスの係からみんなへ

[illegible]

新聞で伝えよう」「日本文化を発信しよう」に加え、「SDGsを進めよう」「社会見学新聞」「歴史新聞」など、各教科でどのような取組ができるのかを考え、学習内容に適した単元構成で実践を深めてきた。このようにすることで、他教科や行事との関連性を見える化し系統立てて指導できるようになっている。

○各学年の取組

1年生では、まず新聞に親しむところから始めた。新聞の中からひらがなやカタカナを見つけたりすることで、新聞記事の文字をよく見ることができるようにした。また、お気に入りの新聞を紹介するスピーチ活動も行い、話す・聞く力が育成できるような取組を進めている。



2年生では、生活科の学習で町探検に行ったあと、はがき新聞にまとめた。そして書いた新聞をお店や施設に届けた。調べたことを新聞にまとめられたことに対して多くの子どもたちは達成感を得ていた。また、地域のお店に発信したことで、お店の方からも、「新聞に詳しくまとめてもらえて良く分かる」という声もいただいた。

3年生では、地域の人にインタビューをして新聞にまとめた。また、インタビューに行く前には、京都新聞社の方に記者派遣事業に申し込みゲストティーチャーとして、取材の仕方を教えていただきました。3年生からも取材に力を入れて学習を進めた。

4年生では、国語科の「新聞を作ろう」の学習で、1年生から3年生までに行ってきた学習を活用して、取り組むことができた。これまでたくさんの新聞に触れてきたおかげで、どの子も新聞に対する抵抗が少なく、記事の内容や見出しを工夫するなど様々なアイデアを凝らして新聞を書くことができた。



5年生では、国語の物語文を読んで作品の魅力をはがき新聞にまとめたり、総合的な学習において新聞にまとめたりする活動を行った。

6年生では、様々な教科において、今までに新聞を活用して行った学習をもとに取組を進めた。(はがき新聞・新聞を読む活動・社会科歴史新聞・学習のまとめ新聞) 総合的な学習の時間において、最後に発信する方法を子どもたちに聞くと、「新聞」という声があがった。理由を聞くと、「一度の発表で分かりにくいことも掲示しておくを見て読んでもらえるから」と新聞の良さにも触れることができていた。

◎ 6年生での実践の紹介

- ・学級活動 「生まれた日の新聞を読もう」

6年生の学級活動の学習で、自分の生まれた日の新聞を読む活動を行った。一般紙なので、記事を読むのは難しいかもしれないと挑戦する思いで取り組んだ。



子どもたちは、自分の生まれた日の新聞と聞いて、「その日はどんなことがあったのかな」と、とても興味がわいたようで、一人一人新聞記事を黙々と読むことができた。いくつかの記事の中から友達に知らせたい記事を選び、その記事について「喜怒哀楽」のどれに当てはまるかを考え友達に伝えた。子ども達からは「友達と交流することで自分が知らないことが知れた」や「1歳の子が救助隊に助けてもらった記事について話を聞いて、こんな風に命が救われ子どもの未来がつながっていくとじて私までうれしくなった」と紹介した友達に自分の考えを伝えることができる子もいた。学習が終わった後も自分の生まれた日の新聞を、大事に持って読み、友達と話をしている子も見られた。

6年生の子どもたちは、新聞を活用した取組を3年生の頃から4年間積み重ねてきた。新聞を間に挟んで、子ども同士で対話をするすることで、自分だけでは見えなかった世界が見えるようになり、そこからさらに知りたいと思う探究心へとつながる活動が少しずつできるようになったと感じた時間となった。

3. 成果と課題

(1) 成果

- ・学校の様々な場所に新聞がある環境を作り、新聞への抵抗感が少なくなり、手に取る児童が増えた。
- ・掲示している新聞やスクラップ新聞から身近な社会や世の中の出来事に関心をもつ子どもが増えた。
- ・教員が資料として新聞を意識できるようになり、研修を重ねることで授業での活用の幅が広がった。

(2) 課題

- ・低学年では、ふりがなをつけても新聞の内容を理解することが難しい子どももいる。
- ・活動内容によっては、子どもの意欲を高めにくいものもあった。資料教材等の選定が大事である。
- ・新聞記事を読む際、興味がある分野から読むので、幅広い知識を得るところまでには至りにくい。

小学校 全学年 国語・社会科・総合的な学習の時間・図画工作等

学園とともに「健康・未来創造」を実現する ～教育・環境活動を通して～

光華小学校 校長 河原 聡子

1. 実践の概要

本校は「真実心の実践として「こうかの心」「心の教育」を基盤に、「SEL」（社会性と情動性の学習）のプログラムを取り入れた研究を進めてきました。非認知能力、すなわち社会性・感情のコントロール、協調性、忍耐力などは、子どもたちが社会で活躍するために欠かせない重要なスキルです。これらは、学力だけではなく、豊かな人間性を育む上でも大切な要素となります。本校では、学習指導要領に示されている「生きる力」の育成や「学びに向かう態度の育成」に重点を置き、非認知能力の育成と深く関わっていることを認識しながら、取り組んできました。教科指導や多様な活動を通じて、非認知能力をどのように育むことができるかについて、議論を重ね、実践的なアイデアを共有してきました。

令和6年度は、NIE全国大会京都大会への参加を機に、新聞を活用した学びや発表の機会を提供しました。新聞の作成の仕方や読み方などを学び、実際に新聞を作成して発表する活動を行うなど、またかなり前から続けている「環境教育報告」の取組と結びつけました。これらの活動を通じて、2023年度の報告書と新聞を基に、同大会のポスターセッション部門で成果を報告し、本校の研究テーマであるコミュニケーション力・自己肯定感等の非認知能力の育成に大きな成果がありました。本校での取組や教科における実践事例を以下に紹介します。

2. 実践内容

○ 環境教育

環境を大切にする本学は、今年度も環境教育に積極的に取り組みました。そのひとつが、今回で15回目を数えるKOKAエコアワード(境教育推進室主催)です。教職員、保護者・ご家族、本学園のお取引様、そしてオープンキャンパスや公開講座などの参加者からエコ作品を募集し、1,375件もの応募がありました。KOKAエコアワードが環境を考えるきっかけとなり、それぞれが新聞等で環境について調べ、自分の思いを発表する機会となっています。その思いは、今回発表した「ポスター」や「新聞」「しおり」「工作」等の作品として学園の皆さんに発表しました。

○ KOKAエコアワード

平成22年の学園創立70周年を記念して設立されたKOKAエコアワードは、

今年度で 15 回目を迎えました。この取り組みは幼稚園から大学・大学院までの本学園で学ぶすべてのものを対象とし、エコ活動を啓発する作品（エコアイデア部門、作文部門、標語・短歌（和歌）部門、ポスター部門、作品部門）を広く募集するものです。また、本学園に関係するすべての方、本学園が取り組む環境活動に関心のある方、本学園のお取引先様など募集範囲を広め、「標語・短歌（和歌）部門」へのエントリーを可能としています。「標語・短歌（和歌）部門」に関しては、応募フォームを作成し、HP やチラシをご覧いただいた方にも、パソコンやスマートフォンから気軽にご応募いただけるような仕組みで、幅広く皆様へのエコ活動の啓発に取り組んでいます。

今年度は皆様から合計 1,375 件の作品をご応募いただき、優れた作品に対して表彰をおこないました。



○ 各学年の取組

【1年生】 1年生の身の回りにも、たくさんの環境問題が存在するということを気づかせるために、食品の容器（紙パック・ペットボトルなど）を家から持って来て、普通ならそのままゴミになるところを、エコ工作としてかわいい／かっこいい作品に生まれ変わらせる時間としました。特に読んだ後の新聞紙を使うことで、様々な形を生み出し、イメージを広げることができ、新聞紙の再利用につながりました。また、紙面の写真や見出しの大きな文字を自分のイメージと重ね合わせて考える子もいました。

【2年生】 2年生はエコ標語に挑戦しました。標語を作成するにあたり、大学の先生による講演「クイズに答えて地球にいいこと考えよう」の中や新聞からエコ活動に関する言葉を思い出しながら、各々発表していました。「分別」「リサイクル」「海洋プラスチック」「買い物袋」等のキーワードを念頭に、児童それぞれが思い思いの標語を作っていました。できあがった標語は、教室前のコモンスペースに掲示しました。



【3年生】 夏休みの課題で取り組んだ「エコ工作作品」の鑑賞会を開きました。普段気にせず捨ててしまう空き容器やトイレットペーパーの芯などが、子どもたちの手によって生まれ変わり芸術作品に。同じ大きさの空き缶を積み上げて城を作ったり、ペットボトルを水槽に見立てて水族館を開いたりとその作品は十人十色。元の材料の形や性質を生かしながら作られた力作をお互いに鑑賞し合いました。友達の作品の工夫されている部分や、こだわりのポイントも発見し、お互いを認め合う機会にもなったと思います。普段は捨ててしまうような物も、工夫次第で素敵なものへと生まれ変わらせることができるということに子どもたちは気づいていました。今回の活動が、リサイクルを始めとした環境への取り組みについて考えるきっかけとなったのではないかと思います。

【4年生】 4年生は、1学期から社会科でゴミのことや水のことなど、自然環境について学習しており、新聞や図書だけでなく、社会科見学にも行きました。学習で得た知識や体験活動を通して、自分が一番伝えたいこと、訴えたい気持ちを考え、そしてそれを相手に伝えるためにはどうするのが良いか、じっくりと時間をかけて全員が取り組んでいました。児童たちはゴミ処理の問題が一番心に残ったようで、分別の大切さや、新聞紙の再利用やゴミを減らすことを訴えるポスターがたくさん出来上がりました。

【5年生】 年度当初より「環境問題」について、個人でテーマを設定し、調べ学習を行いました。生活の中や新聞のニュースなどで気になった環境に関する問題点を出し合いました。個々で行った調べ学習としては、ごみの問題、二酸化炭素を減らすための取り組み、オゾン層や森林破壊、絶滅危惧種、地球温暖化などさまざまなテーマが挙げられていました。調べた内容をリーフレットに分かりやすくまとめ、その後、環境問題について全体で考えました。光華環境DAYでは中間報告として、これまでの調査や話し合ったことなどをもとに、「環境問題」をテーマにした作文を書きました。9月には「海と日本プロジェクト in 丹後」プロジェクトで、フィールドワークを通して海の環境について学びました。そのフィールドワークを切り口に、「海洋」に焦点を当てた環境問題についてより深く調べる活動を行いました。11月には、それまで学習してきたことをまとめ、発表し合いました。

【6年生】 6年生は、前年度に年間を通して海や山の環境について調べ、実際に足を運んで体験し、大学の先生からお話を聞くなど、環境問題については既にたくさん学習してきました。そして令和6年度の光華環境DAYでは、よりよい



環境づくりのための『エコ標語』を作成しました。今まで環境について学ぶ中で感じたことや、自分にできること、みんなに知ってほしいことなど、それぞれ思いを込めて標語を作り、イラストを添えて完成させました。たくさんの人に見ていただき、一人でも多くの人に環境に関心を持ってもらえるよう、1年間廊下に掲示しています。地球のことを思っていることをお互いに認め合う、良い時間になりました。

3. 成果と課題

(1) 成果

今年度は、N I E 全国大会京都大会に参加を機会に、子どもたちが新聞を通して学び、発表する機会を増やすことに重点を置いて取組を進めました。長年取り組んでいる「環境教育」を通して、子どもたちが新聞を手にする機会と新聞記事をもとにした発表やコミュニケーションの機会が増えました。また、自ら情報を得ようとするようになりました。本学園ではそれぞれの校



園において講義、授業、課外活動やボランティア活動を通し、学齢にあったN I E 教育に力を注いでおり、私たち個々が今、何をなすべきかを考え、表現するとともに、身近なところから自主的に取り組むきっかけの一つとして、新聞があると考えています。また、新聞を活用した授業では、環境などの実際の社会課題を題材にすることで、探究的な学びが深まると考えています。

(2) 課題

N I E は、新聞を教材として活用する教育活動で、情報リテラシーの向上や批判的思考の育成に大きな役割を果たします。本校は、S T E A M 教育の推進を実践しています。環境関連の記事を読み、「データ（C O 2 排出量の推移など）」を整理・可視化する「地域の環境ニュース」や、学校の取り組み（例：校庭緑化プロジェクト）と連携させる「新聞を再利用」したワークショップ（例：新聞紙で防災グッズ制作）など、アイデアは色々あるのですが、どれも中高学年対象となってしまいます。低学年等の子どもたちが自ら新聞を読み、内容を理解することは、難しいと感じています。そこで、今後は「A I と新聞」両方の活用の仕方を考えています。

中学校 1 学年 国語科

「語意」ではなく『語彙力』を意識させる ～実践 1 年目 生徒が新聞の言葉に興味をもつために～

京都市立松原中学校 教諭 川北 雅美

1. 実践の概要

本校は、祇園祭、壬生狂言、ユネスコの重要無形民俗文化財の六斎念仏など伝統文化を身近に感じ受け継いでいる生徒がいる学校である。

学校教育目標は「自ら考え行動し、仲間と協働できる、未来を切り拓く生徒の育成」である。そして、目指す生徒像に「相手の考えをしっかりと聞き、折合いをつけることができる生徒」がある。また、重点方針の中に「生徒が探究心を向上させる学びの授業を実践する」というものがある。これらを達成させる一つに新聞を使った学習を実践することにした。新聞の実践が初めての2, 3年の担当者に重荷になると、継続はかなわないので、一年間継続してできる取り組みを行ってもらった。

3年は進路を念頭に興味を持たせて手に取らせることを考えた。入試に関わることも多くなるので、声掛けで、新聞に興味を持つ生徒も増えた、新聞3紙は、図書館に配架される。3年は、同じ階に教室があるため比較的手に取りやすい環境であった。2年は上階で、昼休みの図書開館は足を運びやすい環境であった。しかし、1年は、かなり離れた別棟にあることと昼食を15分で完結することができず、昼休みすらほとんどないような状況であった。そのため、授業で図書館に連れていく機会を設けた。

新聞は、2日分をラックにつるし、過去3日分は、ラックに立てて並べることとした。年度の後半は、6紙が順番に配架されるようになったので、ラックだけでなく長机に1週間分を並べた。新聞の管理は、文化図書委員と学校図書館司書の方とで行った。

平常の活動実践は、コラムを使った。文化図書委員に、各新聞の朝刊のコラムや、四コマ漫画を切り抜き、セリフを考えさせたり、内容をオチもわかるように説明させる作文の課題を出したりした。

全学年活用することになるので、基本的に当日の新聞は使わないようにしていた。

2. 実践内容

(コラムの活用)

既存の新聞と新たに配達される新聞のコラムを切り抜いて「音読」「早読み」「意味調べ」「写し書き」の課題を与えた。最初だけ、全員に印刷して同じもので行ったが、2回目からは切り抜いたものを自分で選ばせた。文字数の違いや書き方の違いもあるが、いろいろな文に触れさせるために切り抜いたコラムを活用した。

「黙読」では、間違っても読めなくても読み飛ばしてしまうが、「音読」では、読めないと止まってしまう。自分で確認させるために必ず行うようにさせた。

「早読み」は、音読をもっと意識させ頭をアイドリング状態にさせるために行った。45秒という目標を提示して読ませた。最初は1分以上かかった生徒もやり方に慣れると、目標に近づいた。

初見の文章を何回も読むことで、読めるようにもなるし、内容も頭に入ってくる。その上で写し書きをさせると優れた文章に触れることにもなる。特に、生徒は接続詞を多用する傾向にあるので接続詞のない500字程度の文章を体感してほしかった。今の生徒は、タブレット使用やプリント学習が増えているためか、書き写すという作業が減ってしまっている。そのため、一文を覚えて書くどころか、単語や、文節で書き写している。多くても3文節くらいしか書き写せないようである。時折、一行飛ばしで書き写すこともあった。

写し書きをしたことのある生徒は何人かいた。その生徒は、飛ばして写すことが多かった。おそらく、経験したことがあることで音読などの作業を適当にしていたのだろう。点検し指摘すると、音読し早読みをすることで内容が頭に入ることと、写し書きの間違いが減ったと感想に書いていた。同じ日の違う新聞を使うこともあったので、テーマが似ていても表現の違いに気付く生徒も出てきた。コラムは、各新聞社の顔ともいえる上に、記事と違い記者の主観も入っていることから、読み比べも面白いと思ったのだろう。

コラムの書き写しは通年の週末課題にしていきたかったが、様々な事情で実際には同じ状況での活動を続けることができなかった。

(回し読み新聞)

1年生での実践である。小学校でも新聞学習をしてきたので、夏休み前に一人一紙ずつ渡して活動を行った。

活動内容

1 時間目

- ① 興味のある見出しを選ぶ。
- ② 選んだ見出しの記事を読む。
- ③ 一番興味深く感じた記事を見出しも含めて色ペンで囲む。
- ④ ハサミで切り抜く。

2 時間目

- ⑤ 生活班（5～6人）で集まる。
- ⑥ 模造紙に貼りあわせる。
- ⑦ 記事の下に、自分がなぜこの記事に興味を持ったか簡単に書く。
- ⑧ 記事を読みあい、それぞれの記事とコメントに対してコメントを書く。
- ⑨ 意見交流をする。

この段取りを全員に配布して、図書館で活動した。

見事に失敗した。こちらの準備不足であった。

そもそも、新聞の勉強をした＝新聞の読み方や、言葉を知っている。という思い込みがあった。つまり、ほとんどの生徒が新聞に慣れていなかったのである。

小学校で教わっていないということではなく、授業で丁寧に指導されていても、家庭で新聞に触れる機会が少ないため定着していなかったのである。

具体的な間違いは、「見出し」がどれを指すのかわからない。（大見出し、脇見出し、中身だしなどたくさん見出しがあると、どれが正しい『見出し』か、わからなくなって一つだけ選んでしまっている）記事の読み方がわからず、途中で切ってしまう。（段組みの仕組みや、次の段のどこに続きがあるのかわからない）そもそも、記事がどれかわからず見出しだけを切り抜いている。一人二人ではなかった。家庭で紙の新聞を読まなくなったと聞いてから久しいが、これほど顕著な例はなかった。

生徒は、情報に無頓着ではない。むしろ情報バブルの中にいるくらいである。ただ、その情報が偏っていることに気づいていないこともあるし、情報から自分の方によってきている状態であることもわかっていない。目の前の情報が正しいかではなく、知っているかどうかの判断なのである。そこで、「語彙力」に戻って、正しい言葉の使い方、言葉そのものの持っている力も考えさせていきたいと考えた。最初の計画から練り直しとなった。

(新聞記事のレポート)

まず、学習計画を見直した。

1年国語「C 読むこと」の(1)ウ「目的に応じて必要な情報に着目して要約したり、場面と場面、場面と描写などを結び付けたりして、内容を解釈すること」を達成させようと考えている。読みことの指導ではあるけれど、「描写」したり「要約」したりするときに、言葉一つの使い方について深く考えさせたい。そこで語彙力を養いたい。

新聞の読み方、見出しについて、リード文について、段組について確認した。情報は、テレビや、ラジオなどからではなく、ほとんどネットニュースやSNSで得ている。今回は、より正確な情報を選ぶためにどんな情報媒体が適切か考えさせたい。

活動内容

1 時間目

- ① 新聞の中から気になる見出しを見つける。
- ② 選んだ見出しの記事を読む。
- ③ 記事の中から一番興味深いものを一つ選ぶ
- ④ 記事全体をペンで囲って切り抜く。
(わからない時には、確認をとることを伝えた)

2 時間目

- ⑤ レポートに、新聞名、朝、夕刊、日にちを書く。
- ⑥ レポートに、見出しを書く。(すべて)
- ⑦ 記事の内容を書く。(写すのではなくまとめる。)
- ⑧ 感想を書く。

個人で作らせた、この時は前回のような間違いはなかった。8月から9月中旬の新聞だったためかスポーツ記事が多くなった。見出しに注目させたところ、通常の授業でも、作品の題名に注目する生徒が増えたように思った。

(読み比べ新聞)

2月初めに、今年度最後になる「記事の読み比べ」をさせた。

同じ日の同じ記事を複数の新聞から探し、スクラップにさせる活動を行った。



事前に、白抜きの見出しの記事が出たので、切り抜いておいた。見出しを見るだけでもその違いが見えてくる。記事やグラフの数字は、版の違いからくるものもあった。この版の違いは、短時間で変化するような大きな記事だからこそ見られるものである。その違いを考えることも情報について知ることになるので、ここは、最初に指摘しておいた。

今回も、生活班（5～6人）で行うことにした。できるだけ多くの新聞記事を選んでほしかったので（多い日は6紙あるため）生活班とした。同じ記事が必ずあるとは限らず、結局他の班員と同じ新聞を使う生徒もいたが、それも認めた。

活動内容

1 時間目

- ① 興味をもった見出しをいくつか選ばせる。
- ② 班でなぜ、興味を持ったのかを簡単に伝えあい一つの記事に絞る。
- ③ 見出し、記事をしっかりと確認しペンで囲む。
- ④ それぞれ新聞名、日付、朝、夕の区別を書かせる。
- ⑤ 記事を切り抜く。

2 時間目

- ⑥ 見出しの読み比べをする。
＊言葉の使い方をよく考えさせた。似たような言い回しを考えさせ、なぜその表現で書かないのか考えさせた。
- ⑦ 記事の中身を比較させる。
- ⑧ 表現が違うとき、記事の内容が違うとき、なぜそうなるのか考える。
- ⑨ 読み比べをした感想を書く。

今回で今年度の大きな活動は終わった。話し合いは、見出しの単語一つの表現の是非にまで及んでいる班があった。同性婚に関わる記事であったが、人権に関わる言葉だといい、辞書で調べ、タブレットで調べ納得するまで考え話し合いを進めていた。結局記事には大きな違いを見つけなかったようだが、見出しで違いがあると捉え方にも違いがでるかもしれないと考えていた。

アジアの問題は、身近に捉えていたようだが、SNSの記事をみて話をしていた生徒が、新聞記事を読んで自分の知っている内容と少し違うと答えていた。その言葉は拾い上げて、新聞は記事になるまでのこと、記事になってしまっただけから責任ついて伝え、SNSがすべて悪いとは言わないが、その内容を信用する根拠は何かと聞いた。すると、他の人も同じ内容をしゃべっていたから正しいと思ったという答えだった。本当にそれはただしいのか？と疑問を持つことが大事だと伝えた。

3. 成果と課題

(1) 実践者の感想

今までも新聞を使った活動は行ってきたが、「紙の新聞を読んでいる家庭がどんどん減っている」という感想が代わることはなかった。そして、今回は一番読んでいない家庭が多かった。また、タブレットを学校でも使わせているが、情報を得るのは、ネットかSNSであった。ネットの怖さは、総合、学活、道徳で指導はされていても我がことになっていないのか、情報を読むだけのことが怖さにつながっているのではないようであった。新聞が100%と思うことも正解とはいえないが、より信頼できる情報として選択すべきものの一つであることには気が付いたようである。今回の目的である『語彙力』についても見出しから考えようとする姿に垣間見たきがする。国語の授業でも、題名について考えさせる時、よく考えて作品の中身を予測するようになってきた。

(2) 成果

語彙力をつけるために、小さな言葉一つにもひっかかりをもち、比較しながら考える姿勢が出たのはよかったと思う。

(3) 課題

大きく3回の活動しかできていない。本校は校舎の大規模な工事があり、図書館が移動図書館になってしまいなかなか新聞活用がしにくい環境である。今後は、新聞を手にとれる環境を作りつつ、新聞を使った継続し続ける学習を行いたい。語彙力や時事力、表現力も伸ばしていきたいと考える。

【対話×デジタル】新聞を活用した文学作品の読み

京都市立西京高等学校附属中学校 教諭 矢倉 裕也

1. 学校の概要

本校は、京都市立で唯一の併設型中高一貫校として、平成16年（2004年）に開校した。「進取・敢為・独創」を校是とし、進取の気性に富み、あえて困難に挑戦する独創性にあふれた未来社会を創造する人材の育成を目指している。「おもしろおかしく」をモットーとし、創造的コミュニケーション能力を駆使して、グローバルな視点で自然現象・社会事象を考察し、これからの国際社会に貢献し活躍できる人材の育成を目指し、カリキュラムに工夫を凝らし、日々教育実践を積み重ねている。全ての教育活動の基本は「授業」であると全教職員が強く認識し、特にICTを積極的に活用し「自ら学ぶ力」の育成を図る授業を創造している。

2. 実践の概要(日常の取組とこれまでの取り組み)

本校は、2023年、2024年にNIE実践校の指定を受け、新聞を用いたさまざまな実践を継続して行ってきた。

日常的に新聞に触れる仕組みとして「NIEボード」を職員室横に設置している。毎日、係の生徒が自分の気になる記事と記事に対する考えを書き、掲示している。同世代が関心を寄せている記事を共有することに役立っている。

また、紙媒体だけでなく、「京都新聞デジタル版」「日経電子版」「朝日けんさくくん」「ヨミダス for スクール」の電子版をタブレット端末で利用できる環境を整備している。それらを各教科・領域の授業において、常時使用できるようにしている。

これらの活動により、生徒たちも新聞に常に親しんでおり、何かを検索する時に、新聞からも情報を得るようになった。その他、年間を通じて以下のような取り組みを行ってきた。

<年間通じて行っている取り組み>

- ◆新聞記事の空欄部分に熟語を補充する。
- ◆西京生に伝えたい記事をスクラップし、その記事に対する自分の考えを100～200字で書く。

<国語科の取り組み>

〔話すこと・書くこと〕

◇テーマに沿った新聞記事を探し、選んだ理由や記事に対する考えを共有する。



NIEボード

〔書くこと〕

- ◇学校紹介パンフレットに載っていない「西京の魅力」についての新聞を作成する。
- ◇新聞記事を参考に、地域や社会全体の課題を取り上げ、それに対する意見文を書く。
- ◇「大人になれなかった弟たちに……」（令和3年度版 光村図書 国語1年）の学習後、戦争に関する記事を読み、意見文を400～600字で書く。

〔読むこと〕

- ◇新聞記事の内容を一文で要約し、班で読み比べる。
- ◇随筆「マドゥーの地で」（平成14年度版 光村図書 国語2年）、「パールハーバーの授業」（平成5年度版 光村図書 国語3年）で描かれている作品の背景を新聞記事等で調べ、作品の解釈に生かす。

3. 実践の内容（「第29回NIE全国大会京都大会」に向けての取り組み）

【研究テーマ】

様々な情報から文学作品の背景についての理解を広げ、対話を通して読みを深める力

文学作品は、完結した作品として作品の中に描かれたことをもとに解釈をするのが一般的であり、学校における国語教室においてもそのような指導が中心として行われてきた。一方で、読み手の生活体験や読書経験、知識、教養といったものが、内容の把握や解釈の深まりに影響することも明らかである。しかし、国語科における「読むこと」の実践においては、生徒自身のもっている知識や経験の差が作品の背景の理解に影響していることは踏まえつつも、既有的知識や経験といった部分に着目して指導することは少なかった。

現行学習指導要領で示された「対話的な学び」は、生徒が考えを共有することで自らの読みをさらに深めていくことができ、内容の把握や解釈を広げたり深めたりする点では大変有効である。だが、実際の学習場面で生徒が自分の解釈に、どのような読書経験が生かされているか、どのような既有的知識を活用したかに至るまで整理し詳細に語ることは難しい。でも、もし相手の解釈の裏側にどんな素地があるのかも含めて聞くことができたなら。生徒は、自分の解釈との違いにもっと関心を抱き、興味をもつことができるのではないだろうか。そこで、本実践では、随筆作品のある一文に着目し、そこから関連する新聞記事を調べることで作品の背景を知り、解釈の深まりや広がりを実感できる授業を目指した。

「新聞」の活用は、知的好奇心を満たすことに留まらず、物事の背景にある様々な要因、立場による状況、視点の違いなど、いわば社会の在り様の根底にもつながる世の中の仕組みを探知するきっかけとなるのではないだろうか。それは、国語の授業に留まらず、他の事柄にも応用されていく個々の内面＝「素養」を育むことになるだろう。このような仮説の下、新聞の情報を使って『思考』を支える『資質』の鍛錬、これを研究のねらいとするものである。

本校国語科では、学びの土台となる個々の資質を鍛え、読解力を培っていくものになると期待してNIEの授業計画を行った。

【実践事例】

単元名 新聞を活用して、「随筆」を読む

(1) 教材名

猪口邦子「パールハーバーの授業(平成5年度版 光村図書 国語3年)」光村図書出版

(2) 単元の目標

- ① 意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解することができる。

第2学年〔知識及び技能〕(2) 情報の扱い方に関する事項 ア

- ② 目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり、登場人物の言動の意味などについて考えたりして、内容を解釈することができる。

第2学年〔思考力、判断力、表現力等〕「C 読むこと」(1) イ

- ③ 文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。

第2学年〔思考力、判断力、表現力等〕「C 読むこと」(1) オ

(3) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
① 意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解している。 (2) ア)	① 「読むこと」において、目的に応じて複数の情報を整理しながら適切な情報を得たり、登場人物の言動の意味などについて考えたりして、内容を解釈している。 (C(1) イ) ② 「読むこと」において、文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりしている。 (C(1) オ)	① 積極的に新聞記事などを手掛かりに文章を解釈し、学習課題に沿って出典を明らかにしながら考えたことを説明しようとしている。

(4) 単元計画

時間	学習内容	評価
課題	○「パールハーバーの授業」を読み、初発の感想をまとめる。 ・印象に残った描写やその理由、疑問に思ったことなどをメモしておく。	
第1時	① まとめてきた初発の感想を交流する。 ② 「私」について様々な視点から考えてみる。 ・ブラジルのアメリカンスクールにいる「私」の立場 ・「パールハーバー」を起こした国の出身者である「私」の立場 ・世界史の先生から見た「私」の立場 ③ 「私」の気持ちが大きく動いた瞬間を描いている一文を探し交流する。	思①
第2時	① 「かつてないほど、私はパールハーバーを恥じていた。」の一文に着目し、「パールハーバーの何を恥じていたのか」を考える。 ② 自分が入れた言葉を手掛かりに、パールハーバーに関する新聞記事等の情報を集める。 ③ 自分が読んだ新聞記事等の情報を踏まえて、最初の考えをさらに練り直し、タブレット端末を使ってまとめる。	知① 思①
第3時 【公開授業当日】	① 新聞記事の内容を読んで気付いたこと、また、『かつてないほど、私は、パールハーバーを恥じていた』の何を恥じていたのかの解釈について、深まったり広がったりしたことを班で交流する。 ② 「パールハーバーの何を恥じていたのか」という問いの最終的な班の答えを整理してホワイトボードに書く。 ③ 全体で班の答えを交流する。 ④ 単元を振り返り、「随筆を読むときに並行して新聞記事を活用したこと」について自分の考えを書く。	思② 主①

<事前授業の様子>

デジタル新聞で関連記事を調べている



調べた記事を発表している



<全国大会の様子>

個人で調べた新聞記事を共有している



個人の考えを班で整理している



ホワイトボードを使って班で発表している



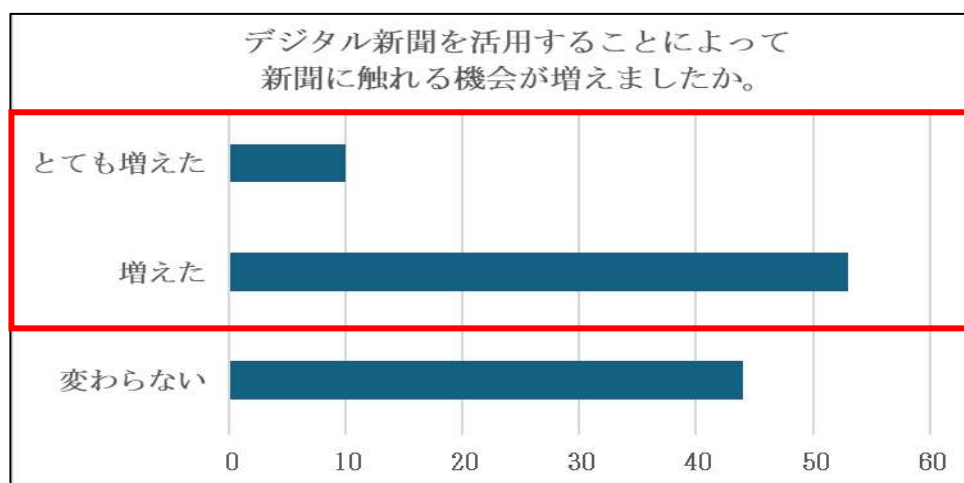
調べた新聞記事を用いて発表している



4. 成果と課題

【成果】

- ・デジタル新聞を活用することによって新聞に触れる機会が増えたと 63 名が回答。



調査対象：中学2年生 107 名

※単位は人数

【課題】

- ・情報を得る手段として、新聞を読むことが定着するところまで至っていない。
- ・国語科や社会科などで新聞を活用した授業を行うことで一定成果は上がったが、その他の教科における活用まで拡げることができなかった。

【生徒の振り返り】

- ・新聞はネットニュースなどに比べて信頼度が高く、自分の興味関心の話だけでなく、今、知っておいたほうが良い情報を入手できるので、自分の知識も増え、授業の内容をより深められる良いツールだと思った。
- ・新聞を読むことで自分の興味のなかった分野のことも知ることができるためもっと取り入れていきたい。また、デジタル新聞は過去の出来事も振り返ってもう一度記事を読むため、そのような活用法も行っていきたい。
- ・デジタル新聞を学びに取り入れることでインターネットにはなかった別の視点から情報を手に入れることができた。新聞に触れる機会も増え、世界情勢に興味をもつきっかけにもなり、その情報を入手するソースとして活用することができた。

社会と子ども、子どもと子どもをつなぐ「新聞」の活用

綾部市立八田中学校 教諭 船越 寿子

1 はじめに

現代社会において情報収集できる手段は多種多様にあり、情報を発信することについても、今や小学生がデジタルツールを駆使して世界に向けて発信できる時代である。しかし、利便性にのみ目を向けて情報を扱うと、偏った情報しか手に入らず、情報に踊らされてしまう。

N I Eに出会って8年。新聞と出会い、新聞を通して仲間とつながっていく子どもたちの姿を1年、1年と重ねる中で、「学校で新聞を取り扱う意味とは何だろう。」と問いながら実践を進めてきた。

今年度、本校での実践は2年目を迎え、一部の学年だけで取り組んできたことを学校全体に広げたいという思いがあった。第29回N I E全国大会京都大会での実践報告を機に、個人の取組が学校としての取組へと広がった経緯を中心に報告する。

2 実践内容

(1)「オピニオンタイム」～3年生だけの実践から全校の実践へ～

「オピニオンタイム」は、自分が気になった新聞記事を切り抜き、3～4人グループになって1人1分で記事の内容を紹介する活動である。本校では、毎週金曜日の朝8時30分から8時40分の10分間行っている。

実践2年目となる今年は、3月に卒業生から「オピニオンタイム」について目的や方法、感想を引き継いだ3年生のみで5月から実施した。初回は、準備を丁寧におこなっていても、1分で過不足なく記事を紹介することに苦労している様子が見られた。一方で、ノートに記事を貼り、読み取ったことをあらかじめ書いてまとめている生徒の姿も見られた。なぜ事前に準備したのか尋ねると、「自分が選んだ記事を記録として残しておきたい。」という思いと、「自分は、書かないと1分で紹介できないと思ったから。」という理由を答えてくれた。「みんなに紹介してもい

初回の「オピニオンタイム」の様子。
上手に話せる生徒は、ノートにまとめたり、新聞記事を相手が見えるように置いて紹介したり、身振り手振りを交えて相手の反応を見ながら話していた。



い？」と聞くと、照れくさそうに笑顔で承諾してくれた。

昨年度と同様、3年生は回を重ねるごとに話し方が上手になり、紹介し終わった後の質問や感想交流も活発になっていった。また、記事を選ぶ時に、自分は「〇〇新聞社がいい」「地域の出来事に興味がある」など、自分の興味・関心に応じた選び方をしている様子も見られた。

このまま3年生だけの取組として続けようと思っていたが、8月に開催された第29回N I E全国大会京都大会での実践報告に参加した本校の1・2年生の担任教員から、「1・2年生もやってみたいです」という声が上がった。しかし、新聞に慣れ親しんでいない状態からいきなり3年生と同じように取り組ませると、報告会のような形になりかねないと感じた。そこで、2学期から開始するにあたり、まずは新聞の面白さが伝わるように、1・2年生合同の授業を実施することにした。

（２）1・2年生合同授業「新聞記事でコラージュを作ろう！」

N I E全国大会京都大会開催直後、第44回全国学校図書館研究大会高松大会が開催された。札幌市立栄町中学校「学校図書館から広がるN I E」の研究発表において、新聞の持つ魅力の一つである写真に焦点化された実践を参考に、1・2年生合同授業を構想した。

ア 目的

- ①新聞にはどんな情報が載っているか知る。
- ②新聞には取材内容に応じた写真が使われていることを知る。

イ 方法

- ①グループ（縦割り）ごとに集める写真の観点（テーマ設定として「季節を感じる」「勝負の一瞬」「人物の表情」など）を決め、切り抜く。
- ②切り抜いた写真を四つ切り画用紙に貼り付ける。
- ③テーマを設定した理由、作成した感想を発表し合う。
- ④後日、廊下に掲示する。



新聞を実際に“めくる”経験のある生徒は非常に少ないので、担当になった生徒だけでなく、全員が新聞を手に取り、紙面をめくって、何が載っているのかを知る絶好の機会であった。子どもたちは、自分のグループで決めたテーマに合う写真を見つけることに夢中になり、切り抜いた写真を持ち寄って「これはちょっと違うんじゃない？」「この表情が〇〇やから、使おうよ」など、単に切って貼るだけの作業ではなく、観点を立てることでグループ内に対話が生まれていた。また、コラージュを作成する中で、新聞に使われている写真の大きさが話題性に関連していることに気付き、自分たちのグループが伝えたいテーマを他のグループに伝えるために、レイアウトを工夫したり、見出しを組み合わせたりする様子も見られた。

授業後、「あ～、面白かった！」と口にする生徒もあり、こちらの意図していた「新聞の面白さ」を実感させる取組となった。また、この後から開始した「オピニオンタイム」においても、使用する新聞記事を探す活動に抵抗感を持つことなく、スムーズにつなげることができた。



2年生の「オピニオンタイム」の様子。

担任教員も子どもたちと同じように新聞記事を選んで参加。

初回は、全員にワークシートを配布し、記事の要約、選んだ理由を書かせて行なった。

（３）「オピニオン交流会」～地域の方と「対話」する～

前任校でN I Eの実践に携わる中で、N I Eアドバイザーの方から「オピニオンタイムは、異年齢者と交流するとさらに効果が高まる」と伺っていたものの、コロナ禍に入り、思うように実践が進まなかった。今年度、本校において、学校運営協議会の方に提案し、念願だった地域の方との交流を実施することが叶うこととなった。

ア 目的

- ①異年齢・異世代の人と対話することで、言葉の選び方や使い方、表現の仕方を学び合う。
- ②立場の異なる人の意見や考え方に触れ、自分のものの見方や捉え方を広げる。

イ 内容

3年生の国語「合意形成に向けて話し合おう～課題解決のために会議を開く～」(話すこと・聞くこと)と取り合わせ、制定50周年を迎えた「綾部市民憲章」に関する新聞記事(あやべ市民新聞掲載)を読み、「住みよいまち」「住み続けたいまち」とはどのようなまちか考える。

ウ 方法

- ①中学生 2 人＋大人 2 人程度のグループで「あやべ市民新聞」の記事を読む。
- ②新聞記事から感じたことを交流する。
- ③「綾部市市民憲章」を基に、綾部の魅力について話し合う。
- ④③で話し合ったことから、「住み良いまち」「住み続けたいまち」とはどんな「まち」かについてグループの答えを導く。
- ⑤後日、話し合ったことを元に、さらに新聞を読んだり、調べたりしたことをふまえ、500 字以内で自分の考えをまとめ、投書する。



交流会での気づき
・安心安全なまち
・職業の選択が多い
・人とのつながり

先日、国語科の授業で「住みやすいまち」「住み続けたいまち」について地域の方と話し合いました。

話し合う中で、僕は綾部市は「住みやすいまちだ」と思いました。その理由は、綾部市は住民のことを考え、寄り添っていると考えたからです。

綾部市には、住民が一人ぼっちにならない福祉事業や施設がたくさんあります。僕が注目したのは、その事業が「日本初」であることが多いことです。

その中の一つは、「ふれあいメール」です。これは、一人暮らしの高齢者に毎月 1 回ハガキにメッセージを書いて送る事業です。

もう一つは、「消防団応援の店」を認定していることです。市内の 100 店舗以上の商店が、消防団員に対して、商品や施設の利用などを割引にするサービスを行い、まち全体で消防団の存続につなげています。

他にも、日本で初めての重複障害者施設があったり、図書館が駅裏に移設され、子育て支援の役割を担ったりする環境があります。

誰にとっても住みやすいまちとは、住民のことを考え、住民に寄り添った事業・施設があることだと思います。

私の暮らす綾部市の今年上半期の出生率を知って驚いた。市の人口約 3 万人中 56 人である。京都府全体で見ると、約半分が一人暮らしという結果だった。また、単身の高齢者の割合も増えている。今となっては、少子高齢化が進み、若者は都心に流れていることが現状だ。このままでは、地方都市で生活する未来の子供たちが不便な暮らしを送ることになるのではないかと心配になる。

綾部市の現状で私が不便に思っていることは、中学生全体の人数が少ないことだ。各学年 1 学級の小規模校が多いため、もし、人間関係で失敗しても、3 年間一緒に過ごさなければならない。1 年ごとにリセットできた方が、自分を成長させることができるのではないかな。

また、出生率が低いことで、伝統を継承することや綾部市の魅力を発信することが難しくなると考える。綾部市を発展していくには、人口の増加は欠かせない。

綾部市の良さは、人との温かいつながりや自然の美しさに居心地の良さを感じられるところだ。この良さと他市にも負けない魅力を掛け合わせれば、誰もが帰ってきたくなる「ふるさとのまち綾部」になるのではないだろうか。

上記は交流会後に 500 字程度にまとめた生徒の意見文の一部。京都新聞の「読者の『窓』」に投書した結果、2 名の意見文が掲載された。（3 月末現在）

子どもたちから「地域の方と話し合うことで、新しい視点で物事を考えることができた。」という声が上がった。地域の方からは、「今後も子どもたちと交流する機会を持ってほしい。」という感想を聞かせていただいた。

(4)「オピニオンタイム」～学期末・学年末に振り返る～

3年生では、1学期末に「オピニオンタイム」で紹介した新聞記事を振り返り、一番印象に残っている記事を選んで、A4用紙にまとめさせた。

1・2年生では、学年末にこれまで選んだ新聞記事を振り返り、「未来」というテーマを与え、再読し、「未来」につながっている記事を一つ選ばせ、B4用紙にまとめさせた。

学期末や学年末など、節目に活動を位置付け、自分が選んだ新聞記事の見返しをさせることで、自分はどんなニュースや社会問題に興味を持っているのか、なぜ関心を寄せるのかなど、自己分析、自己理解につながる。子どもたちの多くは、ネットやSNSのみから得た情報だけでニュースを捉え、偏った分野にしか興味を持たない。「オピニオンタイム」は、紙媒体の新聞を読むことで、読まないと出会わなかったニュースを知り、仲間と対話することで、普段の関わりではわからなかった相手の一面に出会うことができる。



活動を提示してから2週間後に発表できるよう準備をさせた。準備の時間は、朝読書の時間帯(8:30～8:40)を使っても良いとし、家庭学習として持って帰ったり、休み時間を使ったりと、自分の裁量で作成できるよう工夫した。また、作成後の保管のしやすさ、負担感なく気軽に作成できるように配慮し、用紙の大きさを工夫した。

3 実践を振り返って

(1) 子どもの変容

地方都市の小規模校で十代のほとんどを過ごす子どもたちにとって、今住んでいる場所が「社会」であり、「世界」なのである。今、世界で起きている出来事やさまざまな社会問題を取り上げた新聞を読むことで、子どもたちの視野は一気に広がる。また、読むことで、無意識のうちに社会問題について批判的に判断し、自分の考えを形成する思考の流れを作ることができた。その結果、課題を自分で見つけ、正解のない問いについて考える生徒の「書く」力が飛躍的に伸びている。2年生においても、6名の生徒が京都新聞の「読者の『窓』」に投書が掲載された。

「オピニオンタイム」を通して、各教科での話し合い活動も活発になってきた。相手がわかるまで、言葉を言い直しながら粘り強く説明したり、仲間の発言を聞いて、質問が出るようになったりする姿が見られるようになった。

(2) 子どもの感想

「先生、高校の社会の授業で気になる新聞記事を選んで、全員の前に立って紹介したんです。私、みんなより上手く話せましたよ。オピニオンタイムやって良かったって思ったし、中学生の時、新聞を読むの楽しかったんですね！」

上記は、実践2年目に入った夏に卒業生が話してくれた内容である。制限時間内に話すことは、とても難しい。何から話すか、どれくらい説明するかなど、あらかじめ組み立ていても、つい話しすぎたり、話している途中で迷子になったりすることは、大人でもよくある。

しかし、毎週「オピニオンタイム」を継続している生徒は、「1分」という時間を肌感覚で覚えていて、なめらかに話すことができる。話し終わった直後にタイマーの音が鳴った時の爽快感は、実際に体験してみないと味わえない。一回、また一回……を積み重ねてできるようになったことは、子どもの自信となって残っていく。さらに、単に1分で話せるだけでは満足せず、自分に対して、仲間はどんな記事を選べば関心を持ってくれるかを考えるようになったり、選んだ記事の内容をどんな言葉を使って表現するか工夫したりするようになるのである。

4 おわりに

本校校長が今年度のPTAだよりに以下の言葉を残している。

本校は、デジタル時代にNIE（教育に新聞を）実践校として教室に紙の新聞を置いており、子どもたちは休み時間などに読んでいます。現在、購読率20%台の新聞で何を学ばせたいのか。活字に触れさせる、多種多様な記事を読みバランスのとれた感覚を養うなど考えられますが、別の視点としては、本来学校とは、「家庭でできないことを扱う場」であるということがあります。各ご家庭には、家庭教育の考え方がありますが、子どもが社会化していくためには、家庭の考え方だけでは十分ではありません。自分の家の教育方針や生活スタイルとは違った世界で生活させ、少しずつ社会への適応を学習していきます。学校教育の意味はそういう部分にあると思います。

～一部抜粋～

インターネットやタブレット端末の普及、住んでいる場所を問わないテレワークなど、日常生活の様々な物事がデジタル化するたびに、私たちの世界は大きく広がったように感じていた。個人の趣味や価値観が多様化した反面、偏った世界、あるいは狭い視野でしか物事を判断できない人も増えている。

学校は、多種多様な考え方や多様な解釈をする仲間がいるからこそ「対話」が生まれる場所となる。本校の「オピニオンタイム」や「オピニオン交流会」は、「新聞」という情報ツールによって、子どもたちの世界を広げ、子どもたち同士をつなぐ役割を果たしているといえるだろう。

「学校で新聞を取り扱う意味は何だろう」という問いの答えが見つかった。

中学校 全学年 国語・社会・総合的な学習の時間 特別活動等

新聞で培う「ことばの力」

～豊かな表現力、読解力、対話力～

宮津市立栗田中学校 教諭 塩見 優真

1 本校の実態

本校では、「未来を生きる心身ともにたくましい生徒の育成」を教育目標とし、「新聞で培う「ことばの力」～豊かな表現力、読解力、対話力～」を令和6年度の研究テーマとして掲げて、教育活動を進めている。

生徒は、豊かな自然の中で、伸び伸び過ごし、学校行事や様々な活動においても意欲的に取り組むことができている。あたえられたことや課題に対して真面目にコツコツと取り組む力もある。

しかし、少人数での生活が続くため、人間関係があまり変わらず、多様な考えが出にくい実態がある。さらに、世間で起きていることに対して、関心が持てず、視野が広がりにくい状況で過ごしている面も見られる。

目的

- ・日常生活や学習の中で、生徒の「ことばの力」の育成を図る。
- ・社会に対するものの見方を広げたり、記事（意見）に対する自分の考えを述べさせたりする力（表現力）の育成をめざす。
- ・考えを深めさせるとともに、お互いを認め合い、主体的に情報を発信する力の育成を図る。

2 新聞の置き場所と整理方法

各学年フロアにN I Eコーナーを設け、廊下で手軽に新聞を手にすることができる環境を整えた。

委員会の生活図書委員を中心に新聞を管理し、図書室を保管する場所として設定している。

本校はN I Eの実践年数は4年目になるが、昨年度新聞コーナーに立ち止まって新聞に目を通す生徒が減少してきていた。そのなかで、委員会の生徒が興味を持ちそうな記事や、目にしてほしい記事が載っている面を表にした状態で置くようにしたことで、手に取って記事を読む生徒が増えてきた。



(1) 新聞づくり

社会科や総合的な学習の時間で新聞づくりを行った。新聞の特徴を確かめながら割り付けを考え、実際の新聞と見比べながら作成できた。

① 調査計画を立てよう

《作業の流れ》					
①テーマの決定	②情報の収集 調査	④情報の整理	⑤新聞レイアウト づくり	⑥清書 →完成	
①《テーマ決定・調査の計画を立てる》					
テーマ					
設定理由					
探究計画					
知りたいこと			調べる方法(手段・いつ・どこで)		

調べたこと、著書など、書いていこう。

- ・複数の資料を比較しよう。複数の資料に関連付けて考えよう。
- ・収集した資料に、自分で、考えたことやわからなかったことなどのコメントをつけよう。

②考察の仕方……レポートの構成や内容について考えましょう。資料から読み取った内容や、自分が考えた内容を次の表にまとめ、具体的にしていきたいと思います。

[illegible]

(中の点線は、目安です。参考程度に。)

[illegible]

また、社会科での新聞づくりの学習を生かして、総合的な学習の時間でも新聞づくりを行った。レイアウトや構成、伝える内容など、明確な根拠をもってまとめることができおり、書く力も育ってきていると実感した。

(2) 委員会活動での取組

生活図書委員を中心に新聞を活用した取組を行った。生活図書委員会主体で『生活図書委員おすすめ新聞記事』を実施した。各学年フロアに設置されているN I Eコーナーの新聞を読んで、興味を持ったり、他の人に知らせたいと思ったりした記事を切り抜き、掲示板に随時、貼っていくという活動である。記事内の考えや行動に対して、ポイントや感想を付けて掲示させていたことで、新聞記事に対して自分の考えや立場を明確にする機会が増えた。

(3) 週末課題での活用

本校では、平日に出す課題とは別に、週末に出す課題を『週末課題』として取り組んでいる。N I E実践を始めてからは、この週末課題を、新聞を活用した課題にしようと考え、オピニオンレポートに取り組んだ。内容は、教師が選んだ新聞記事に対して、読んで思ったこと・考えたことを自由に書く課題である。選ぶ記事は全学年同じであり、課題の裏面には、先週の記事に対する生徒たちの意見の点数を載せて配布していた。自分の書いた意見をもって交流させることまではできなかったが、他者の考えを載せることで、新たな気づきや考えが深まる様子がうかがえた。

また、投書を取組で掲載された生徒の新聞記事を扱うことも多くあり、その結果生徒の自己肯定感や主体性・意欲に大きくつながった。

新聞記事を選ぶ教師は、輪番制で本校の全教職員が担当し、多くの先生方にもかかわっていただいて活動を進めることができた。

[illegible]

(4) 投書での活用

国語の授業の一環として、京都新聞の投稿欄「窓」へ意見文を投稿する活動を行った。この投書の活動を行うまでに、上に記載の週末課題のなかで投書の記事について意見文を書く活動を繰り返し取り組み、決められたテーマで他者の意見に対して自分の考えを持つ練習を行った。そして本取組では、テーマを自由にし、意見文を書かせて京都新聞に投稿する投書を作成した。

投書をするということは、子どもたちが新聞に参加するということになり、非常に有益であると感じた。

鉛筆を書く。 京都新聞に投稿しよう。	半紙 番	応答
【目標】多様な読み手を想像して、自由なテーマで文章を書く。		
・関心のあふ事例や、書評興味を持ってのことや考えていることから、題材を決める。 ・自分の意見と根拠を整理し、○○○字以内で書く。 ・観点が異なるところで、「また」や「まず」「次に」「最後に」、「一つ目は」「二つは」などの言葉をふれるとわかりやすくなります。		
テーマ		
意見		
根拠		
↓これらを踏まえて・・・		
タイトル		
テーマ (80)	勉強	
意見 (80)	一度漢字でテストに臨むのはよくない。毎日の積み重ねが大切。	
根拠 (80)	一度漢字で臨んだとき、寝不足と疲れがためられているという精神的疲労で全然うまくいかなかったため。	
↓これらを踏まえて・・・		
タイトル	非効率な一度漢字。	

タイトル「 韓国をもっと大切に 」	
2年 1組	3番 氏名 ()
生年月日	
あなたは韓国の文化が好きですが、日本では2000年以降に韓国の文化が流行し、「韓流ブーム」が起こった。食べ物やコスメ、アーティストなど多様な韓国の文化が日本に浸透してきている。またYouTubeやNetflixといった全世界に向けられた動画配信サイトが充実したことによって、どこにいても韓国生まれのコンテンツを見ることが可能になり、韓国の文化は私たちにとっては身近なものになった。外国に行かなくても異国の文化を知れるのだから私たちにとっては良い影響が多い。しかし韓国に影響を受けすぎて自国の文化への関心を忘れてしまっている自分もいる。例えば、給食で焼き魚と味噌汁が出たときより、ピビンバやヤンニョムチキンが出たときの方が嬉しいと感じる。しかし改めて考えると日本食には新鮮な食材が使用されていて、栄養バランスが優れているという魅力がある。韓国の食文化の魅力ばかり目に入り、日本食の魅力に気付いていなかった。これを機に食以外の日本の文化についても考えていきたいと思う。私は自分が生まれ育った日本の文化が好きだ。この気持ち大切にしていきたい。	

タイトル「 小さな目標 」	
2年 1組	5番 氏名 ()
生年月日	
勉強はなかなか手につかない。「これから毎日自主勉強！」と意気込んでおきながら気づけばソファで寝転び、手にはスマホ。そんな経験はないだろうか。私は勉強に限らず、三日坊主になることがよくあった。部屋は綺麗に片付けても何日後かになったら物置部屋に変わっていることも…。「継続は力なり」という言葉がある。それは、小さな努力でも毎日続ければ大きな成果につながるという意味だ。 私がよく三日坊主になってしまっていたのは、高い目標を立ててしまっていたからだ。志が高ければ高いほど自分にストレスが返ってきてしまい、長続きはしないし、諦めてしまうことも多かった。 例えば、目標が小さかったとしてもコツコツと積み重ねることが大切だと思うし、自分にあったやり方を模索するののも一つの楽しみになるのではないだろうか。	

4 成果と課題

(1) 成果

各学年ともに、教科等の学習や学級での取組に新聞記事を教材・素材として取り入れたことで、身近な社会や世の中の出来事に関心をもつようになってきた。

また、新聞を用いて「今」の出来事などを取り上げて知らせたり、論評したりすることを通して、生徒たちと社会生活を直結させ、学習への意欲を引き出すことができた。

そして、教師側が資料としての新聞活用を意識することで、単なる知識にとどまらず、社会との関連の中で子どもたちの思考を広げる指導の工夫を心掛けるようになり、教材研究の幅が広がった。

資料を活用して、考察し、説得力のある説明をしたり、主張することについては苦手意識を抱いている生徒が多い。また、互いに意見を交換するような活動を好まず、他者の意見を取り入れ、自分の考えを深めることについて慣れていない生徒も多い。そのような中で、身近な話題を題材にして、様々な立場の人の気持ちに立って物事を判断することで、他者理解に繋がったり、感想や意見が違ふことで、様々な視点から考えたりすることができ、また、深く探求し理解することで、説得力のある説明をすることができる。

(2) 課題

各学科で新聞を使った取り組みを実施してくれているが、その数はあまり増えてはいない。意識的に取り組んでくれている先生は固定化されている様子である。私自身も、「新聞を使って学力向上を図る」という目標があったものの、なかなかスムーズな活用ができなかった。

生徒は新聞の読み方をほとんど知らず、最初は興味を持ち、目を通すことから始め、だんだんと慣れてきてはいるが、新聞というより、活字離れをしている生徒が大半でなかなか普段の生活に浸透するまでには至っていない。今後N I Eの位置付けをどのようにしていくかなど、戦略を再構築する必要があるが、学校としては継続して実践していけるように引き継いでいきたい。

新聞記事の読解、発表を通じて、 読解力及び表現力、批判的思考力を育成する

京都府立峰山高等学校 教諭 馬木 勇語

1. 実践の概要

昨年度に引き続き、主に総合的な探究の時間や国語科などの授業を通じて新聞記事を活用した学習を行った。活動を通して以下の点を身に付ける力として掲げた。

- ①正しい情報を取捨選択し、それらを読み解く情報活用能力
- ②読解力及び表現力、批判的思考力

社会の在り方に関わる現実社会の諸課題の解決に向けて探究するための手がかりとなる概念や理論などについて理解するとともに、社会の在り方に関わる情報を適切に調べ、また合意形成や社会参画に向け、国家および社会の形成者として必要な選択・判断の基準となる考え方や経済社会などに関する概念や理論などを活用し、現実社会に見られる複雑な課題について考察、説明（発表）することができるよう実践に取り組んだ。

2. 実践の内容

（1）総合的な探究の時間における実践 ＜1年生普通科 新聞教材を用いた発表＞

【取組内容】

探究活動の取りかかりとして、SDGsの理解を深め、日本や世界の問題を学ぶために学習内容を設定した。

まず、新聞記事の読解を通して、普段あまり意識しない国内外の問題に触れるとともに、読み取った内容を要約して伝える・聞くことを通して社会への関心を高めることを狙いとして、『読売新聞』、『神戸新聞』、独立行政法人国際協力機構 JICA より NIE 用教材として配信されているワークシートを活用した。生徒は4人1グループで活動し、17のゴールごとに分類された4枚組の新聞記事から1テーマを選んで読み、内容



をグループで交流した。(下例は「4 質の高い教育をみんなに」)



次に、問題点を分析し、わかりやすく伝える能力の育成および世界の諸問題について視野を広げ、発表を通して国際的な視野から問題を捉える力の育成、また問題を「自分事」として捉える視点を養うことを狙いとして、それぞれの新聞記事から考えられる問題を調査分析してグループごとに発表した。

さらに、学んだことを「自分事」として考え、自分の将来の姿や未来の世界のあり方を国際的に展望させることを狙いとして、実際に JICA 海外協力隊として現在ガボンで教育分野の開発協力に取り組んでおられる京丹後市出身の方を JICA 関西 京都デスク 西川玲奈氏より御紹介いただき、ガボンから講演会を行っていただいた。



【成果と課題】

新聞ワークシートの話題は、テーマが同じであっても内容的には異なる記事を意図的に選んで組み合わせたため、当初は「問題点をどこに設定するか」について議論が続いたが、それぞれに話し合いの中で合意を形成しながら問題点を設定し、分析結果をまとめることができた。

講演を終えた後、生徒からは「アフリカと聞くと“貧しい”“大変”“かわいそう”というイメージで、新聞記事を読んだときにもその印象だったが、現地にいる方からお話を聞くと、想像するよりもっと楽しそうだった。ガボンの小学生の笑顔が輝いていた。“豊かさ”ってなんだろうと考えるきっかけになった。」等の感想があった。先進国的・消費社会的なものの見方を相対化する視点を持たせることができた。

一方、発表課題の設定を緩やかにして生徒の自主性・創造性に任せた面があ

り、テーマ決定に向けた話し合いが難航したり問題が焦点化されず曖昧なまま発表に臨んだりするグループも見られた。より生徒にとってわかりやすく、自主性と創造性を発揮できる課題設定が今後の課題である。

（２）国語科における実践

< 1 年生普通科「現代の国語」 >

現代の国語の指導目標である「論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする」を狙いとして、指導事項A「書くこと」の中でも、(1)イ「情報の妥当性や信頼性を吟味しながら、自分の立場や論点を明確にして、主張を支える適切な根拠をそろえること」を主な目標として学習内容を設定した。1学期に1つ(①)、2学期に1つ(②)のテーマを与え、自ら考え、その内容を書くことができるよう指導した。

【取組内容】

昨年度より1年生に取り組んでいる課題である。記事については1つの事象における賛否・明暗など複数の視点から書かれたものを選定し、ワークシートに取り組みながら自らの考えを深められるようにした。

①米国フロリダ州 14歳未満の子どもアカウント保有を禁じる法案の成立
（『読売新聞』2024年4月22日付）

賛成の主張および論拠、反対の主張および論拠について、新聞記事を読んだり適宜調べたりしてまとめ、それぞれの立場を踏まえて今後の展望を述べる課題を設定した。

②男女別学高校 伝統か変革か（『読売新聞』2024年4月27日付）

「共学」「別学」の語の定義を確認し、どちらに賛成するかを述べる課題を設定した。意見を述べる際には公立と私立の設置意図の違いを踏まえ、意見を引用したり自身の経験から述べるよう指導した。また、学校以外の場合でも職業によって男女差を感じることにについて具体例を挙げながら自分の意見を述べる課題も設定した。

【成果と課題】

①については、大衆の想定を遙かに超えて普及し多様化するSNSのあり方について、立ち止まって捉え直す契機になった。子どものアカウント保有を禁じる立場に賛成の意見にも反対の意見にも論拠があり、それぞれに説得的であることを確認できたほか、SNSを利用している生徒自身が気づいていなかった視点も盛り込まれており、身近な話題でありながら気づきの多い取組になった。二項対立的に論を捉え、情報を整理して表現する点においては概ね目標は

達成されたが、今後の展望を見通した意見論述にはまだ書き方の理解が及んでいない点が見られる生徒が目立った。

②については、記事中の意見を引用するよう指示したこともあって、記事の意見に寄り添いすぎる傾向が見られた。優れた着眼と論述能力を発揮した生徒もいたものの、批判的な視点を確保しながら書かせる指導の難しさを実感することとなった。また、職業の男女差を考えさせる課題については発想の偏りが見られ（とくに看護師や保育士、大工など）、もう少し想像を働かせるための工夫が必要であったと感じられた。

いずれも本校教員が設定した課題であり、生徒はそれぞれに自身の考えを表現することができた。一方、より高い学習効果を求めるためにはより深い生徒観・指導観が求められ、次の一步に進ませるためにはどのような課題を設定するかの見極めが肝要である。今後も継続的に実用的な文章を用いた「書くこと」の指導を継続していく必要がある。

＜2年生普通科「論理国語」＞

論理国語の指導目標である「論理的、批判的に考える力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする」を狙いとして、指導事項A「書くこと」またはB「読むこと」の指導として学習内容を設定した。

5月上旬に1題(①)、7月上旬に1題(②)、11月下旬に1題(③)、それぞれテーマを変えながら取組を設定した。



【取組内容】

①～③は各1時間の授業として設定し、図書館司書の協力を得て、図書館で授業を行った。ワークシートを作成してデータをteamsの「課題」で配信、生徒はそれぞれOneNoteにデータを移動させ、写真を貼ったり書き込んだりして完成したワークシートを「課題」として提出することとした。授業にあたっては取組の目的とテーマを説明し、その後は生徒がそれぞれに新聞を読んで記事を選び、自らの意見を述べた。

①最近の気になるニュースを紹介する

ここでは「書くこと」(1)イ「情報の妥当性や信頼性を吟味しながら、自分の立場や論点を明確にして、主張を支える適切な根拠をそろえること」を主な学習目標とした。作成したワークシートは教室や廊下に掲示することを前提とし、「クラスメイトに記事を紹介する」ことを想定して作成させた。ワークシートには「事実」と「意見」をまとめる欄を設定し、両者を意識的に区別して読むことの重要性について指導した。また、筆者の「意見」を参考にしつつも、自ら関

連する情報を調べたりしながら、「事実」に基づいて自分なりの「意見」を書くことを意識させた。

②自分の将来なりたいもの、したいことに関する新聞記事を読む

ここでは「書くこと」(1)ア「実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めること」を主な学習目標とした。

LHRの進路指導とも関連付けながら、自分自身の生き方や将来の姿を想像し、社会の中で生きることを意識づけるとともに、その考えを自分の言葉で書くことを目的としてワークシートに取り組んだ。ワークシートには「内容の要約」、「自分の将来の目標」と「意見」を述べる欄を設定した。希望進路が明確になっている生徒には、自分の進路系統に類する記事を、まだ将来の姿を明確に思い描けない生徒には、

「こういう生き方がしたい」「この人のようになりたい」など、目標にしたい生き方を見つけて選ぶよう指導した。



③沖縄のニュースを紹介する

ここでは「読むこと」(1)カ「人間、社会、自然などについて、文章の内容や解釈を多様な論点や異なる価値観と結びつけて、新たな観点から自分の考えを深めること」を主な目標とした。

本校の2年生は11月末に沖縄へ修学旅行に向かう。その事前学習として平和学習を行うが、文化や言語、環境に関する事前学習までは行っていない。そこで、沖縄の文化等に触れられる話題を中心に、発行日としては古いものもあるが沖縄との関連性を重視して『読売新聞』と『神戸新聞』のNIE用ワークシートから4種類を選定して利用した。ワークシートのタイトルと発行日は以下の通り。

- 1 やりすぎ観光客 参った
(『読売新聞』2019年11月20日付)
- 2 沖縄の島言葉残したい
(『神戸新聞』2020年8月25日付)
- 3 奄美・沖縄 世界遺産へ
(『読売新聞』2021年6月2日付)
- 4 沖縄の祭事や方言 消滅の危機
(『読売新聞』2022年6月1日付)



生徒は4人1グループになり、1人につき1種類のワークシートを分担して取り組み、新聞記事やワークの内容を説明し、それに対する感想や考えをグループ内で共有した。

【成果と課題】

①最近の気になるニュースを紹介する

自由に記事を選択させたことで、一斉授業ではなかなか見えづらい生徒の興味関心の特色が強く発揮された。生徒はそれぞれに自分の意見や考えを表すことができ、考えを広げたり深めたりする目的は概ね達成された。一方、主述の不一致が稀に見られたほか、ら抜き言葉など現状では誤用される表現が散見された。表現の誤用や誤字に関しては、適宜生徒それぞれに指導した。

②自分の将来になりたいもの、したいことに関する新聞記事を読む

高校卒業後の進路を考える時期の生徒に、自分自身について考え、将来を想像する契機にすることができた。事前に本取組とその趣旨について担任にも報告した。提出された課題は Teams 上で担任も確認することができ、とくに「目標」欄の記述内容などは担任の進路指導の参考として役立てることができた面がある。

似た進路系統の生徒同士で新聞記事の内容を交流するなど、活発な言語活動の様子が見られた。同じ進路希望であってもそれぞれに少しずつ興味の対象が

異なっていることに気づくことができたほか、自分のしたいことを多少なりとも言語化することができた。いわゆる言葉の誤用に関しては今回も見られたため、適宜指導した。



③沖縄のニュースを紹介する

修学旅行先である沖縄の話題であり、興味・関心が高い状態で学習に取り組むことができた。とくに沖縄の方言について紹介したワークシートに対する関心が高く、沖縄で実際に使ってみたい方言について調べ、生徒同士で YouTube の動画を見ながら沖縄方言の話し方を練習する等、積極的に関心を深める様子が見られた。

＜3年生普通科「論理国語」 “18歳、いま伝えたいこと”＞

本校では多くの生徒が高校卒業を機に地元を離れて進学あるいは就職する。また、希望進路を見定め、決定させる過程を経ながら生徒は多くの事柄を内面化していく。18歳の成人として卒業後には社会の一員であることの責任を持ち、社会の出来事に関心を向けることを意識させることを目的として「18歳、いま伝えたいこと」と題し、生徒がいま考えていること、あるいは1・2年生に伝えたいこと、みんなに考えてみてほしいことを、新聞ポスターとレポート課題を通して考え、表現する取組を行った。論理国語の指導目標である「論理的、批判的に考える力を伸ばすとともに、創造的に考える力を養い、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする」を狙いとして、指導事項A「書くこと」(1)ア「実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、書き手の立場や論点などの様々な観点から情報を収集、整理して、目的や意図に応じた適切な題材を決めること」、エ「多面的・多角的な視点から自分の考えを見直したり、根拠や論拠の吟味を重ねたりして、主張を明確にすること」を主な指導目標として学習内容を設定した。

生徒はそれぞれ自分の大きなテーマを決め(災害、闇バイト、高齢者、自殺、平和、税金、AI、多様性、京丹後など)、関連する新聞記事を全国紙5紙および『京都新聞』から探した。およそ6時間を情報の収集にあて、情報整理・分類・ポスターテーマの決定および新聞記事の選定と配置に3時間、作成に3時間、ポスターに貼るメッセージおよびレポート執筆に4時間、およそ15時間の計画で実施した。

【成果と課題】

2024年に発行された6社の新聞をさまざまに使って情報を収集し、目的や意図に応じて適切に整理することができた。ただし、記事の分類テーマの立て方の適切さについてはもう少し思考を深めるような手立てが必要なケースもあった。

内容について新聞社ごとの捉え方、伝え方の違いに注目することで、多面的・多角的な視点から物事を捉える重要性に気づかせることができた。また、新聞ポスターとともに論述課題を設定することで、主張の妥当性や論拠の吟味を重ね、明確化して伝えるために試行錯誤することができた。生徒同士で相談し合い、お互いにアドバイスし合いながら考えを深める等、完成度を高める積極的な言語活動の様子が見られた。

課題としては、外部への発表を当初の予定に含めていなかったため、ポスターのサイズや完成時期の問題で、新聞コンクール等への応募を検討できなかったことを挙げたい。他の学習等との兼ね合いから、今年度は時期的に1月下旬に課題提出としたが、実施時期については今後もう少し検討の余地があるかもしれない。

本校の国語科では初めて取り組んだ学習課題であったが、生徒はそれぞれに大きな達成感を持って成果物を仕上げる事ができた。これからも実社会で生きるために求められる国語力の育成と、社会の諸課題を「自分事」として捉え、常に思考する主体を育むために、N I Eをはじめとしたさまざまな実践に取り組みたい。



（３）公民科における実践

< 3 年生普通科「政治・経済」 新聞記事の要約・考察 >

【取組内容】

3 年生「政治・経済」（3 単位）の授業において、年間通して週 2 回の頻度で各班（2 人組）による記事紹介を行った。2 人で新聞記事を選び、興味・関心を持った記事とともにプリントを提出させた。2 人で協力し、記事の概要紹介及び感想、考察を所定のプリントにまとめた。その記事及びプリントは、教員が生徒に配信し授業の冒頭で取り扱った。なお、新聞は本校キャリアカフェ（生徒共有スペース）に設置しているものから選んだ。

【記事紹介】年間計 45 回実施（2 講座）

- ①「カスタマーハラスメント 従業員保護義務化へ」 ②「『家族』多様化 動かぬ政治」 ③「玄海町 核ごみ調査受諾」 ④「『男は強く』抱えた苦悩」 ⑤「米金利上昇 円 157 円台後半」 ⑥「中高英語力 初の 50% 台」
- ⑦「深まる絶望 イスラエルとハマス」 ⑧「『金利のある世界』利上げ焦点」 ⑨「100 円ショップ 1 兆円市場」 ⑩「韓国『移民』受け入れ拡大」
- ⑪「強制不妊『除斥期間』夏にも判断（旧優生保護法訴訟）」 ⑫「強制不妊 人生救う判決を」 ⑬「フェミサイド『女性だから』殺される」 ⑭「間人ガニの産地偽装」 ⑮「ゼレンスキー大統領 中国へ『露支援中止を』」
- ⑯「少子化『思い切った対策を』婚姻数 50 万組割れ」 ⑰「出生率 1.20 過去最低」 ⑱「市職員→農業 集落守る転身」 ⑲「夫婦別姓導入 経団連が提言」
- ⑳「立憲民主党選挙カー 6 回追尾 つばさの党妨害動画 SNS 配信」
- ㉑「万博で挑戦 得られる成長」 ㉒「最低賃金 1,500 円 政労使協議へ」
- ㉓「ウクライナが軍用地上ロボットを増産 戦場のゲームチェンジャーになるか」 ㉔「子ども置き去り 電波で社内検知」 ㉕「セルフオーダー 視覚障害者に配慮は」 ㉖「慰霊の日 知事、南西シフト『不安』」 ㉗「非製造業 4 年ぶり悪化」 ㉘「新紙幣、経済効果は？」 ㉙「待機患者『間に合うのか』 移植体制整備遅れ」 ㉚「大人の食物アレルギー 誰でもリスク」
- ㉛「50 代の壁 『役職定年』廃止じわり」 ㉜「『死者復活』急拡大 肖像権侵害、中国野放し」 ㉝「認知症施策 本人目線で」 ㉞「すし職人 海外で争奪戦」 ㉟「ひそむ男性の更年期障害」 ㊱「出馬表明 最多の 9 名」
- ㊲「『読書月ゼロ』6 割」 ㊳「トランプ氏 暗殺未遂」 ㊴「対グーグル制裁金 無効」 ㊵「原発 最大限に活用」 ㊶「日本の研究力 続く下落傾向」
- ㊷「首相、少数与党で政権継続『野党主張取り入れる』」 ㊸「『103 万円の壁』見直しへ」 ㊹「不登校小中生 最多 34 万人」 ㊺「第 2 次石破内閣が発足 衆議院 30 年ぶりの決戦投票」

【成果と課題】

- ①新聞読解を通じて社会への関心を高め、時事的な内容について理解し、社会的諸課題について多角的に考察する良い機会となった。
- ②授業内容と関連した記事扱うことで、授業内容の理解が深まり、思考力も深まった。
- ③進学クラスのため、大学入学共通テストに向けた学習を進める必要から十分な時間を費やして意見交流などを実施できなかった。
- ④同じような内容の記事が取り扱われることがあった。

原稿番号 	提出日 年 月 日 ()	提出機関
---	------------------	---

「政治・経済」新聞記事読み(NIE) 原稿用紙

担当	年	期	氏名	氏名
記事	新聞	記事日付	令和	年 月 日

記事表題(テーマ)

記事の内容(概要)について

ニュースを深掘りして見てきたこと (社会的問題として捉える)

感想・意見・問題提起

(4) 地理歴史・公民科における実践

＜1、2年生普通科 新聞コンクール応募＞

【取組内容】

1年生144名、2年生155名の総勢299名が「第15回一緒に読もう！新聞コンクール」に取り組み応募した。

【成果と課題】

- ①新聞を読んだのち記事の要約をし、さらに家族や友人などに対しその記事について意見を伺うという作業があり、自分と異なる意見や様々な感想に触れることで、多少なりとも感性を磨くことができた。
- ②新聞の面白さを発見する様子が見られ、新聞から知識を得ていた。
- ③応募に至らない生徒が出てしまった。取組の意味を理解させる指導に課題が見られた。
- ④高校・高等専門学校生 3 万 966 編のうち、本校 2 年生 1 名が 10 作品に与えられる「優秀賞」（2 年生「関心アリ！親のみとり 代行サービス」読売新聞 2024 年 8 月 27 日付朝刊）を獲得した。また、本校においては昨年度に引き続き、「学校奨励賞」を受賞した（3 度目）。

高等学校 [総合的な探究の時間]

SNS メディアと「オールド」メディアから考えるメディアのあり方についての考察 ～2024 年の兵庫県知事選を巡る一連の報道から～

京都両洋高等学校 教諭 西村 将太

1 はじめに

本校は 1915（大正 4）年に開校された京都正則予備校を前身とする、創立 110 年目を迎える、全日制普通科の高等学校である。「東洋と西洋の架け橋となる国際人の育成」という建学の精神のもと、「3 年間という高校生活のなかで社会に出て役立つ青年として育て、次のステージに送り出す」という教育目標を掲げている。その実現のために、「自律」「尊重」「対話」「創造」という 4 つのキーワードにこだわりながら、基本的な生活習慣を確立し、目標を定め、他者を思いやりつつ協働できるなど「目指す生徒像」の精神を取り入れた教育活動を展開している。このような精神のもと、本校のコミュニケーションテーマである『「人」として、輝く。』ために、日々生徒と向き合い、学習活動・クラブ活動に取り組んでいる。

以上のような理念のもと、本校には 4 つのコースが設置されており、令和 6 年度においては、各学年 13 クラス（第 3 学年のみ 14 クラス）で編成され、全校生徒数は 1300 名を超える京都市内でも有数の大規模校である。

2 N I E の取り組みのねらい

本校における新聞記事を用いた指導に関しては、全校を巻き込んだもの、というよりも、学年単位、またはクラス単位で行われているにすぎなかった。そのため、体系的な取り組みがあるわけではなく、記事を選抜する基準や、その指導の方法などについても、各教員で統一されたものはなかった。

今回の取り組みにおいても、どうしても単発の指導になってしまうところがあるが、ある種のリサーチクエストの形として継続的に行ってきたクラスでもあるため、生徒たちは楽しみながら取り組んでいるようだった。

実践クラスは、3 年生の J キャリアコースというコースで、看護系や幼児教育系など特定の分野の学部を目指すコースである。クラスとしては 7 組と 8 組の 2 クラス、約 80 名である。もちろん、その全員が同じ看護学部や幼児教育系学部に進みたいという希望を持っているわけではないが、単純に「大学進学」を掲げる前にある種のキャリアプランを念頭においた進学を目指しているコースである。学力的には本校ではちょうど中間に位置するクラスである。

実施科目である「小論文」という科目は、その名前の通り、小論文を書くための基礎となる、日本語の組み立て方や文章全体の構造、段落の構造などを構造論的に指導したうえで、小論文を書くものである。また、6 月から 9 月末にかけて、探究型の学習として、論文の作成に取り組んでいる。テーマに沿っ

て、書籍や論文、データなどを読み、情報を集め、集約させていくことについては、時間をかけて行っている。そこで培った知恵を、実社会で発生している事象に目を向け、分析をすることで、自分たちの世界の見方や生き方を考えるきっかけをしてほしいと考え、実践テーマとした。

3 実践事例と課題・反省点

上で述べた通り、今回の実践クラスは、本校の J キャリアコースと呼ばれるコースに在籍している生徒たちである。志望校においては、中堅私立大学が多く、まじめでエネルギーのある生徒たちである。年内の入試が一段落した 12 月には多くの生徒が進学先を決めることができている状態であったため、12 月から 1 月初旬にかけて取り組みを行っている。

テーマとしては、2024 年に行われた兵庫県知事選挙であり、当時の兵庫県知事のパワハラについて告発した職員が死亡するという事件報道に端を発した一連の騒動があったことを取り上げた。その上で、県知事の辞職があり、その後、知事選挙への立候補をした中で、その立候補を取り上げた SNS において、元兵庫県知事を応援する内容が多くなっていった。その結果、あれだけ世間的にバッシングを受けたにもかかわらず、兵庫県知事に再選するという事態が起こった。テレビという「オールドメディア（今回の一連の動きの中でこの呼称が多く使われていたため、本記事においてもその呼称を用いている）」における報道の仕方と、X（旧ツイッター）や YouTube といった SNS における情報の切り取り方、伝え方に大きな差があったことは否めず、若年層は特に SNS を情報源にしているということが取り上げられていた。

この一連の事象から、メディアの真偽と役割というテーマで、取り組みを開始した。

グループ分けは個々人に委ねることとした。3 年生にとっては実質的に最後の課題であり、これまで積み重ねてきた経験や、あるいは授業担当者である私との関係性などを踏まえ、この生徒たちならばある程度の自由を与えたとしても、ゴールに向かって進んでいけると確信していたからである。その結果、単独で黙々と取り組む生徒がいたり、仲のいい友達とグループを作り、役割分担しながら協力して取り組む生徒がいたりしたが、どのような形であれ、それぞれが資料を調べ、その内容をまとめていた。

資料は、実際に兵庫県知事のことを書いた新聞記事を PDF にしたものを用意した。また、朝日けんさくくん (<https://kensaku.asahi.com/>) およびヨミダス スクール (<https://database.yomiuri.co.jp/about/school>) からも兵庫県知事選挙についての記事や、一連の騒動についての記事を調べた。資料は PDF として、ロイロノートで配布し、生徒が見られる状態にした。生徒は、このような実際の新聞記事の資料と、それと対になるように SNS を用いるよう指示した。iPad を用いて YouTube を確認する生徒もいれば、自身のスマートフ

オンを用いて、XやTikTokを調べる生徒もあり、新聞記事とどのように異なるか、どのような内容が投稿されたのかを整理して、少しずつ情報を掴んでいたように感じている。

実際に使用した時間数は4時間から5時間程度であるが、一連の騒動が、2024年の3月ごろから始まっており、まさに1年かけての動きがあり、その上、テレビや新聞の報道、SNSの情報など多岐にわたる情報を見て、整理し、そこからどのようなことが考察されるのか、また、自分はそれに対してどのような見解を持っているのかなど、考えることが多く、大変な作業であったように思う。しかしながら、生徒たちは、論文作成の経験もあつてのことだろうが、グループで、または一人で、少しずつ情報を整理し、うまく処理をしていったと感じている。小論文という授業は、3年生になってからのものであり、文章の書き方や情報の整理のしかたなど、この1年かけて磨いてきたものが、最後に結実したのではないかと考えている。

担当者として注意したことは、メディアの情報について扱う上、内容が現在進行形のものであったため、「何が正しくて、何が嘘であるのかを論ずるものではない」ということを強調し、生徒の発想が「この件に関しての真偽」とにとらわれないようにすることであった。その上で、メディアとはどうあるべきなのか、正しい情報とはどこにあるのか、メディアとどのように向き合うべきなのかを、考えさせ、今後の人生に役立ててほしいと考えている。

一方で課題としては、思った以上に情報量が多く、やはり満足な時間を確保することができなかったことである。最終的には冬休みの課題のような形で1月に提出をさせた。そのため、最後の仕上げの部分において指導不足があったことは間違いない。提出されたレポートを見ても、最後にしっかりと手を入れておけばもっと良くなったであろうものが散見されたため、余計に悔やまれることであった。

また、学校レベルの課題として、このような探究的な取り組みが体系立てられたカリキュラムとして存在しないことが挙げられる。もちろん授業構成としても用意されておらず、用意されていたとしても、探究的取り組みを指導できる教員が少ないという現状もある。NIEだけではないが、今後より重要性が増すであろう探究活動の活動例の一つとして、本校に周知し、さまざまな取り組みにつなげていきたい。以下は取り組み時の記録である。



<図1：生徒のレポート（一部抜粋）>

メディアの真偽と役割	
ことし3月、斎藤知事が職員を怒鳴りつけるハラスメント行為などをロー発した元局長は7月に自殺。斎藤知事はこれを見向きから否定しました。これによりTVニュースや新聞などで斎藤知事に対して厳しい意見が多く、多くの人が斎藤知事が悪い印象を持っていた。しかし「パワハラやおねだり疑惑は、県庁守旧派が改革派の知事を潰すために捏造（ねつそう）した」といった根拠不明の風説が、SNSを通じて拡散され、流れが変わり始めたのだ。ここでTVや新聞、SNSに情報の差が出てしまう。SNS（TikTok、X）では斎藤知事が1人で挨拶する姿を応援する声が多く挙げられた。TVでは挨拶する姿をよくないと思う意見を多く挙げられた。しかしSNSの力はすぐく斎藤知事は多くの支持者を増やしSNSを活用して支持を持つ人が多くなっていった。そのため到底からの大勝利とされ多くの話題をえました。斎藤知事の支持者はSNSを見て私は斎藤知事は若さを武器にSNSを上手に使い大勝利を得たと思う。Vニュースは若者のテレビ離れもありあまり大きくなかったのかと思う。しかしSNSではデマが多くありよくないデマが広がってしまう。その代わりTVは多くの人が関わっているため正しい情報がある。それをうまく使い分けていかないとこれからはより良い社会を作っていくのに必要な力なのではないかと思う。	メディアの真偽性と役割 調査結果 3月パワハラ告発 6月百条委員会設置 7月告発した職員自殺 8月斎藤知事証言、パワハラ否定 11月出直し戦 公益通報かどうか争点 考察 メディアの主な役割は、情報を正確かつ迅速に伝えることと考える。これにより、私たちは社会的、政治的、経済的な出来事に関して知識を得ることができ、個々の判断を下す材料となる。新聞記事等のメディアは私たちに信頼性のある情報を与えてくれる。その一方でSNS等のメディアは情報の考察や偽測、様々な人の意見の交流の場を設けてくれる。今回の題材である兵庫県知事選についても同じことが言えるだろう。 2024年11月18日付けの朝日新聞に『有権者は何を思い、斎藤氏に投票したのかに対して「県庁舎の建て替え凍結や退職金カットなど、不必要な所を見直している」と理由を話していた。その有権者は日頃から新聞やテレビは見ず、情報源はネットだという。』との記載がある。一方、同じ事柄に対して、YouTubeに投稿された斎藤氏に投票した20代学生の声があった。その20代学生は「パワハラとかいろいろ調べたところあることないこといわれていた、ネットとかYouTubeとかそれも本当かわからないけど本当っぽいものをしっかり見て考えました」という声があった。このYouTubeの投稿は実に11万回もの視聴がされており613件のいいねがついている。 最近では、テレビや新聞記事等を指す、オールドメディアという言葉も常用されるようになってきた。ニューメディアの普及により、オールドメディアの優位性は徐々に失われつつあるのだ。今回の選挙においても、斎藤氏が再選に至ったのはSNS等のメディアの力が大きく作用されている。

メディアの真偽と役割	
今回の斎藤知事に起きたことをまとめると当時の局長による告発、告発者死亡し、告発内容がパワハラや賄賂が行われていたと思われていたため、最初は斎藤知事は批判的であった。だが、調べていくうち、告発者の内容の信憑性が低いのではという意見が出てきた。その後、斎藤知事が自ら辞任を選び、選挙が始まる。結果は圧倒的に斎藤知事の獲得票が多く、斎藤知事の評価が以前より高くなっている。 私は、情報を受け取る側は正しいのか否かを確かめる能力が求められ、情報を発信・拡散する側はその情報の信憑性の高い情報を送る必要があると思います。 まず、メディアとSNSの相違点としては、斎藤知事への評価です。メディアは斎藤知事が悪いと否定的です。それに対して、SNSはそこまで否定的ではない。なので、メディアに疑問を持つ人が多かったのだろう。 次に、メディアとSNSの相違点としては、斎藤知事が悪い、悪くないとはっきりと分かれている点です。メディアは斎藤知事がパワハラを行ったと言う確実な証拠がないのに、否定的であった。SNSでも確実な証拠はないのに白黒はつきりしていた。私が思うに白黒はつきりしていないのにメディアは否定的な風にしか報道しなかったことで、余計SNSでは斎藤知事が正しいと思う人が増えたのではないかと。それらにより、SNSとメディアとの対立関係の構図が生まれたのだろう。 最後に、なぜ、最初は否定的な斎藤知事はもう一度当選をしたのだろうか。結論から言うと先に述べた相違点と相似点ともう一つある。もう一つはSNSとメディアの対立関係の構図ができ、それにより、興味を持つ人が増え、街頭演説を聞きに行く人が多くなり、SNSを通して、斎藤知事は正しいと言う声がさらに増えた。それを受け取った人がさらに拡散され、あまり知らない人も正しいと思うようになり、再当選されたのだと思う。 私の結論としては、SNS・メディアどちらが正しいかの真偽はわからないが、どちらも正しいことと嘘のことそして前後関係を飛ばし一部だけを抜粋するということが指摘している。そのため、我々が情報を受け取る際は、SNS・メディアの両方を活用し、その情報の信憑性をしっかりと確かめ、そこから疑問に思ったことを自分で考える能力が大切だと思う。また、SNSで情報を発信する際は責任をしっかりと持つことが大切である。メディアに関してはもっと客観的に見て、もっと疑うことを追求することが情報を受け取る我々が信用できる情報になると思います。 これからの社会では情報をただ受け取るだけでなく、疑う目を持つことが生きていく上で必要になると考えます。	

<図2：生徒の感想（授業そのものの）（一部抜粋）>

先生がおっしゃるようなこんなにも自由度の高い授業を受けたのは初めてです！小論文という名前の授業なだけあってずっと文章の構成や書き方、色々な構文を学んだり最初から最後まで文字に触れ続けてきた授業でした。はじめは正直文字ばかりでしんどいし、私自身国語があまり得意ではないので文章を読んだりするということは苦手でしたがこの授業を通じてどうすれば自分の考えを伝わりやすく文字に起こせるか、読み手が興味を持ち読みたくなるような文章はどのようなものかなど様々なことを学び文章を読むことが好きになりました！西村先生の授業は少しばかり眠くなる時もありますが、終始楽しい授業で後半は小論文の授業を楽しみにしてました。それくらい今では小論文の授業が好きです！おっきな課題である論文を作る授業ではクラスのみんなと交流するいい時間になりました！色々悩むことはありましたが、最後まで楽しかったです！大学でもがんばります！本当にありがとうございました！	1年間の授業を通してニュースを見て感じたことや考えたことでも、文字に起こしまとめることでより考えることができ、また自分の見解をより深めることができたと思う。 最初の論文では、こ普段ニュースを見て考えていることでも論文を書き終わった後ではより理解することができたし、知らなかった知識も増やすことができた。また、文を書くときの構成や文を書くためにどんなことを調べればよいかなどを学ぶことができたと思う。 また斎藤知事のレポートでは、普段全然考えないジャンルのニュースだったが、自分の意見をしっかりと持つことができた。またテレビ報道や新聞記事とSNSの内容のなにを信じて、信じないかととても難しいが大切なのは何が真実で事実なのかということだと思った。一つの報道だけを信じるのではなく色々な報道機関、SNSを見て判断することが大事だと考えた。 このように時間をかけた分しっかりと考えることができたし、新しい発見もありとても楽しく、成長できた授業だったと思います。
--	--

1年間ありがとうございました。
小論文や論文を書く上で、図書館に行って本を読んだり、インターネットで正しい情報を得るためにに長い時間をかけて調べたりと普段は絶対にできない経験ができました。論文やレポートを書くために必要なスキルを磨けたと思うし、大学生になって活かせる力がいちばん手に入った授業だと思います！

第29回N I E全国大会京都大会を終えて

第29回N I E全国大会京都大会実行委員会事務局

■ 大会概要

【スローガン】	探究と対話を深めるN I E ～デジタル・多様性社会の学びに生かす～
【期 日】	2024年8月1日(木)、2日(金)
【会 場】	8月1日(木) ロームシアター京都 メインホール 8月2日(金) 京都経済センター
【主 催】	日本新聞協会
【共 催】	京都府教育委員会、京都市教育委員会
【主 管】	京都府N I E推進協議会、京都新聞社
【参加人数】	2日間で約1200人

■ 大会総括

本大会は、N I Eに関わる諸団体との連携を重視し、各団体（一般社団法人、任意団体など）から実行委員に就いてもらい運営準備を進めた。

全体会は、各団体のあいさつ、講演、基調提案、パネル討論が一連のものになるようにつながりを意識した。幕あいには「ミニまわしよみ新聞ワーク」を行い、大会スローガンにちなんだ「究める」をテーマに対話を深めた。

分科会では13校が公開授業や実践発表を行った。児童・生徒や卒業生が発言・発表する「学習者参加型」の実践発表が特長で、地域課題や国際問題、SDGsなど探究学習に関係するものや、デジタル活用が際立った。特別分科会は「京都のN I E史」「子ども新聞、子ども記者活動」の2テーマで行った。

また、誰もが発表者となり得るポスターセッション部門を新たに設置し、54団体の応募が全国各地からあった。教育・新聞関係者だけでなく市民参加を積極的に進めたため、子どもたちやNPO、新聞社、社会教育施設が発表し、来場者や発表者同士の交流を深める場となった。

さらに、ニュースパーク（日本新聞博物館）の企画展「多様性 メディアが変えたもの、メディアを変えたもの」との連携も行った。

今大会は、門戸を教育、新聞・通信社の関係者に加えて一般にも広げることので、多くの市民に参加していただけた。

当京都府N I E推進協議会は、これらの成果を生かすため、幅広い分野や経歴の人に、学校や地域でのN I E実践のサポートに関わってもらう「N I Eサポーター」制度を設置した。この大会を機に、今後の京都府のN I E活動を盛んにしたいと考えている。

NIEサポーター

「生きる力」を育成するための新聞の活用

～授業に新聞利用をするための一考察～

京都府立田辺高等学校 講師 木村 信浩

1. 実践の概要

教員新採時より約40年間授業開始から5分～10分程度新聞を使用した授業を継続してきた。対象授業は地歴公民科の自分が受け持った全ての授業で実施。京都府立鳥羽高校・木津高校・久御山高校・田辺高校の四校を中心に実施してきた。

新聞を取り入れた授業を始めたきっかけは、歴史の授業に入る前に馴染みのある現代の話題から導入した方が生徒もスムーズに授業体制に入れるということ、新聞の記事から命の大切さやいじめの不合理さを導き出し、生徒に正しい道徳観や思いやりの心、人間としてやって良い事と悪い事のけじめを教えたかった事の二点であった。

2. 実践内容

実践の内容については、主に教師が前もって選択したしたいいくつかの記事を教壇上で論説する事が中心である。そのため毎朝7時頃出勤して当日または前日の新聞を広げて教材を選択し、重点を置いて説明したい箇所や難しい用語にマーカーを入れて念入りに準備をする。その際、ネットでも記事を取得するなど他の方面からの情報の収集をする事も最近は多くなった。

また、国際問題や税金関係・コロナなど感染症の記事などの場合、外務省・財務省・厚生労働省のパンフレットやリーフレットを参考にする場合もある。多くの情報をまとめ上げて短時間に説明する必要があるので毎時間となると手間がかかるが、かなりやりがいがある仕事だ。

新聞の選択については、生徒にとって身近な話題も多いということもあり「京都新聞」中心に利用してきた。一時期、「毎日新聞」を半年程度利用したがその後は「京都新聞」に回帰した。ただし、生徒に新聞による情報・論調の異なりも理解させるために時には「讀賣新聞」や「産経新聞」を利用することもあった。

○授業を実践するについての注意点及び心がけた点

- ・紙上に於いて異なる考え方や意見が読み取れる場合、どちらか一方だけでなく双方の意見を紹介する。また、記事に対する教師自らの考えも表明するが、できるだけそれと他の異なる意見も生徒に提示して自分なりに考えさせ、時には発問して意見を聞く。なによりも記事が一方的な決めつけにならないようにできるだけ心がける。

- ・生徒に新聞記事の理解の助けとなるように、記事に関わる事象について自ら学び実践してきた経験を記事とともに具体的に語る。

○論説の具体的内容について

・海外の記事の場合

記事がドイツ・イギリス・インド・ネパール・タイなど自らの海外渡航経験のある国ならば、その風土・環境・文化・日本との関係などを絡めながら話すと生徒のより深い理解を高められた。また、ジャイカなど国際協力機構のスタッフや民間企業で世界中を飛び回っている友人達の情報もしばしば伝えることがあった。特に民間企業で働いているビジネスマンの海外での経験談は、生徒にとって非常に興味深かったようだ。

・交通関係の記事の場合

自動車の事故については、自らの追突事故の経験を事故の記事とともに話をした。たとえば刑務所から出所したてということで経済的に困窮していて賠償責任をとる事が困難な男性に私自身が追突され、精神的につらかった話や、交通事故で亡くなった教え子の話をし、命の尊さとともに自動車やバイクの運転自体が重い社会的責任を負わされるなどの厳しい現実を啓蒙した。その際、四ない運動にもふれた。

また、公共交通機関の事故や事件などについては、府教委の「平成10年度現職教職員長期研修」のメンバーに選出され、半年間に渡る近畿日本鉄道での企業研修として10日間の運輸部教習所学科研修と半年間の京都駅実務実習を経験したことで、より正確に鉄道の様々な知識、不正乗車の問題・駅においての人々の社会的規範の喪失やマナーの問題など多くの事柄を生徒に伝える事ができた。

・学校関係の記事の場合（いじめ・部活・ボランティア活動など）

いじめやDVなどの記事語る場合、自分自身が小学校時代いじめを受けており、その時の経験も踏まえて話をしている。いじめがどれほど不合理な事象で、相手の心も体もひどく傷つける行為であるかを毎回話している。

また、いじめ撲滅のために絶えず努力されていた小学校の恩師の話も生徒は、真剣に聞いてくれた。

私の高校時代は公立ではなく仏教系の私学に通っていたが、相当荒れた状況で暴走族に所属する生徒も多くいたように記憶している。そのような過酷な環境であっても生徒達に前向きに接していた先生達の姿も生徒に包み隠さず話している。特に宗教科目の先生で生徒にどんなに罵詈雑言を浴びせられても敬語で紳士的にしかも堂々と接する先生がいたという話は、生徒にとってはかなり印象的だったようだ。これは、生徒たちに人生において正しい丁寧な言葉を使うことがいかに大切であるかを説いた一例である。

部活の顧問としては、過去には剣道部を主に受け持ったが、状況によっては、柔道部・古典音楽部・吹奏楽部・野球部なども受け持ったので新聞のスポーツ欄や文化欄を解説する際、その時の知識が結構役立った。

また、現在学校部活動の外部のスポーツクラブへの移行が、新聞紙上でもさかんに叫ばれているが、久御山高校奉職中に、総合型地域スポーツクラブ「久御山KBスポーツクラブ」を立ち上げの中心となり、事務局長として10年間活動した経験を語り、地域を取り込んでのスポーツクラブの創設は、京都府でも多くの府立高校が重要視し、相当以前から活動していた事や、その継続は、相当困難をともしなうことだということも解説した。ちなみに「久御山KBスポーツクラブ」は、現在も小中学生約100人の会員を擁すスポーツクラブとして現在も継続している。

ボランティア活動については、鳥羽高校奉職中に3年間JRC部の顧問の先生の紹介により祇園祭の鉾引きのボランティア活動に参加したが、毎年祇園祭が新聞報道される時期になると生徒達にはその時の楽しかった経験を話した上で日本の古くからの祭りなどの伝統を守ることの大切さを伝えた。

また、木津高校奉職中には、本校が平成4年度から5年度にかけてボランティア推進校に選定されたため、さまざまなボランティア活動を企画したが、その中でも注目したのは「おはなしボランティア」と呼ばれる高校生が老人ホームでお年寄りと会話し、介護のお手伝いをするボランティア活動である。

この時期、生徒会長でボランティア活動や手話にたけた生徒がいたが、彼がほとんど活動をしきってくれたので生徒会顧問の私は楽しませてもらった思い出がある。この活動は、京都府教育委員会の広報番組「教育の窓」で紹介されたので、ボランティア活動の記事をとりあげた時には、その活動と生徒会長の話をする事が多い。また、その映像を生徒に見せたりもした。

・殺人など凶悪犯罪・災害・特殊詐欺・戦争など

残虐な事件や災害などを伝える際には、生徒に配慮してできるだけソフトな表現にしたが、現実をしっかりと伝えたいということであえて避けることはしなかった。災害については、阪神淡路大震災など自らの体験をいれながら論説した。戦争については、父親が、少年航空兵に志願して2年間兵役についていた体験談をベースに父の著書を読み聞かせもした。いずれも命の尊さを強調し、その上で最後は「ご冥福を祈ります。」の言葉で結んだ。

特殊詐欺については、できるだけ詐欺の手口を新聞紙上やネット・警察が作成したパンフレットなどを活用して紹介した。生徒の家族や生徒自身が詐欺や闇バイトの被害にあわないように注意を喚呼した。

・政治や経済について

政治の記事については、今年度は第二次石破内閣の発足・トランプ氏の米大統領返り咲き・韓国の現職大統領の逮捕など盛りだくさんだった。また、政治家の政策の説明や各党の政策の相違点を指摘し様々な視点から政策を読み取るように指導した。なりよりも大切なこととして政治の決定権は国民にあることを強調し、そのために選挙における投票の意義の重要性を説いた。

経済については、米国の追加関税の発動、ホンダ・日産の「経営統合撤回」や実質賃金3年間連続マイナス・米価の高騰などインフレ・デフレ・スタグフレーションの話と絡めて説明をした。

3. 新聞を使用した授業についての生徒への評価

新聞論説についての生徒への評価として、担当した授業で定期考査ごとに一般的な問題の他に 400 字の字数で印象に残ったニュースや事件を書かせるという論述問題を出題している。現代の社会情勢に興味を持つことや文章を書くことに慣れることなどを目的として、これも約 20 年程度継続して実施しているが、本年度も、田辺高校の生徒が熱心に取り組んでくれた。

4. N I E 全国大会京都大会の特別分科会に登壇

2024 年 8 月 3 日大会 2 日目【特別分科会 社会を生き抜くための N I E 京都の歴史と実践から見えてくるもの】に学芸員の林潤平氏と共に対談形式で登壇させていただいた。私が話した内容は次の通りである。

一つは、現状多くの生徒は、ネットで自分の好みの情報しか得ることができない情報弱者であるとし、だからこそ教師や大人が人生を生きぬくため正しい情報を自らの経験もふまえて話をするべきだと説き、それを実践するのに必要でかつ有効なツールが新聞だということ。

二つ目は、今の若者は戦争や悲惨な犯罪など深刻な記事を避ける傾向にあるが、社会の厳しい現実を知り、それに対処するための力をつけるためには、そういう事象こそ伝えるべきだということ。そうすれば、生徒たちには、現実をしっかりと認識し、何があっても前向きに対処できる力が育つのではないかということも述べた。

三つ目として、生徒達は外面的には無関心を装いながらも、社会の様々な問題や犯罪、または国際情勢など漠然としてだが、かなりの不安感を抱いている現状がある。だからこそ多くの生徒が、このような指導ができる教師を内心は切望んでいるのではないかということなどである。

最後に昨年度、私が教鞭をとった木津高等学校の生徒諸君が授業についての感想をビデオレターにして送ってくれたものを会場に於いて披露したが、好評だったので改めてお礼を述べたい。また、大会参加のきっかけとなった取材に度々学校まで足を運んでくださった京都新聞の記者の方々や分科会で共に対談をした京都市学校歴史博物館の林潤平氏に感謝の思いを込めてお礼を述べたいと思う。

5. 成果と課題

成果については、生徒の授業アンケートから主なものを紹介したい。生徒が自分でニュースを調べるようになったというものや、実体験をもとにニュースを話してくれるので理解が深まったという意見が多かった。その他、客観的に物事を捉え自分の意見も持てるようになった、家へ帰ってから家族との会話のきっかけとなった、戦争や政治の話で先生と異なった見解を持つことも自覚できた、人と人とが殺し合う戦争について改めて疑問がでてきた、酷い事件でもどうしたらそれを防げたのかを解説してくれたのが良かった、命の大切さや思いやりの心がどれだけ大切かを知ることができた、などがある。さらには紙ベ-

スを中心とする旧態依然とした取り組みにもかかわらず、この実践について今までに経験したことのない授業だったので新鮮に感じたという、予想外の意見も少なからずあった。

また、新聞記事での報道やN I E 全国大会に登壇など、多くの人々にこの実践を知っていただいたことも大きな成果だと考えている。

以上、本年度の実践も多くの課題を残してはいるが、一定の意義あるものだったと自負している。

課題としては、実践に映像機器やタブレットを使用するなど、新しい形態を取り入れ発展させることがなかったということが一つあるが、なによりも40年の実践が生徒達にしっかりと浸透し、社会が良い方向に進んでいくのに十分な取り組みだったのかという事については、はなはだ疑問が残る。一教師の影響力は微力であるえども悩むところである。

最後に、この実践を継承する若い教師を育てなかったということも反省点であろう。準備に手間がかかり授業時間を割くことになる、その上記事は、読んでいてつらいものが多い。私も東日本大震災の直後、体調悪化もあり精神的に不安定な状況となり論説を一時取りやめたことがあり、生徒の要望で一ヶ月後なんとか再会したという苦い経験がある。この取り組みを望んで継承する教師は少ないかもしれない。しかし、私は生徒がこれを望み、自分の教師生命が続く限りは、この実践を地道に続けていきたいと考えている。時代遅れの取り組みかもしれないが、このレポートが読んで下さった人々に少しでも役立つ事を願ってペンを置きたい。

N I E サポーター

第 29 回 N I E 全国大会京都大会の成果と その後に見えてきた N I E（新聞教育）史の可能性と課題 ～ N I E 史研究の価値とその追究法について～

京都市学校歴史博物館 学芸員 林 潤平

1. 筆者と第 29 回 N I E 全国大会京都大会の関係

2024(令和 6)年 8 月 1 日と 2 日の 2 日間、京都の地で第 29 回 N I E 全国大会京都大会が開催された。そのなかで筆者には、1 日目の全体会のパネルディスカッション「きょうを読み、あすを解く（N I E の歴史と可能性）」、及び 2 日目の特別分科会「社会を生き抜くための N I E ～京都の歴史と実践から見えてくるもの～（京都の N I E 史）」に登壇し、調査研究の成果を報告できる機会が与えられた。筆者が京都市学校歴史博物館の学芸員として勤務し、日夜京都市の教育史、言い換えれば京都における N I E（新聞教育）史にも身近に触れ得る立場にあったからこそ、こうした幸運を得ることができたのであろう。そこで本論考では、改めて筆者が大会で行ったその報告の内容を紹介し、その調査研究や報告の一連の過程で得た成果、つまり「N I E（新聞教育）史」の可能性とその調査研究に関する課題について、その後も継続してきた「N I E（新聞教育）史」調査の知見も交えながら、考察を行なってみることとした。なお、この論考では筆者が大会で行った 2 つの報告のうちの後者のもの、つまり特別分科会における発表に内容を絞って考察を試みたい。なぜなら、前者の発表内容は後者の内容に大部分が含まれているからである。

2. 特別分科会「京都の N I E 史」の発表内容

それでは、筆者が行った発表の内容について、当日会場で投影したスライドの画面を交えながら、本節で振り返っていきたい。発表は主に 2 つの内容から構成した。1 つは、パネルディスカッションのテーマに象徴されるように、本大会で N I E の「歴史」に焦点が当てられたことから、その焦点化のきっかけとなった戦前期の京都における新聞を活用した教育の実践、つまり大正初期に京都市修道尋常小学校で眞下瀧吉（飛泉）校長らが行った N I E の内容、及びその歴史的背景に関する考察である（図 1）。また、2 つ目は、この歴史への注目に加えて、本大会が「探究と対話を深める N I E デジタル・多様性社会の学びに生かす」というスローガン、及びそれを踏まえた基調提案をなすものであった点から、こうした N I E の実践と歴史との関係性、具体的には「この

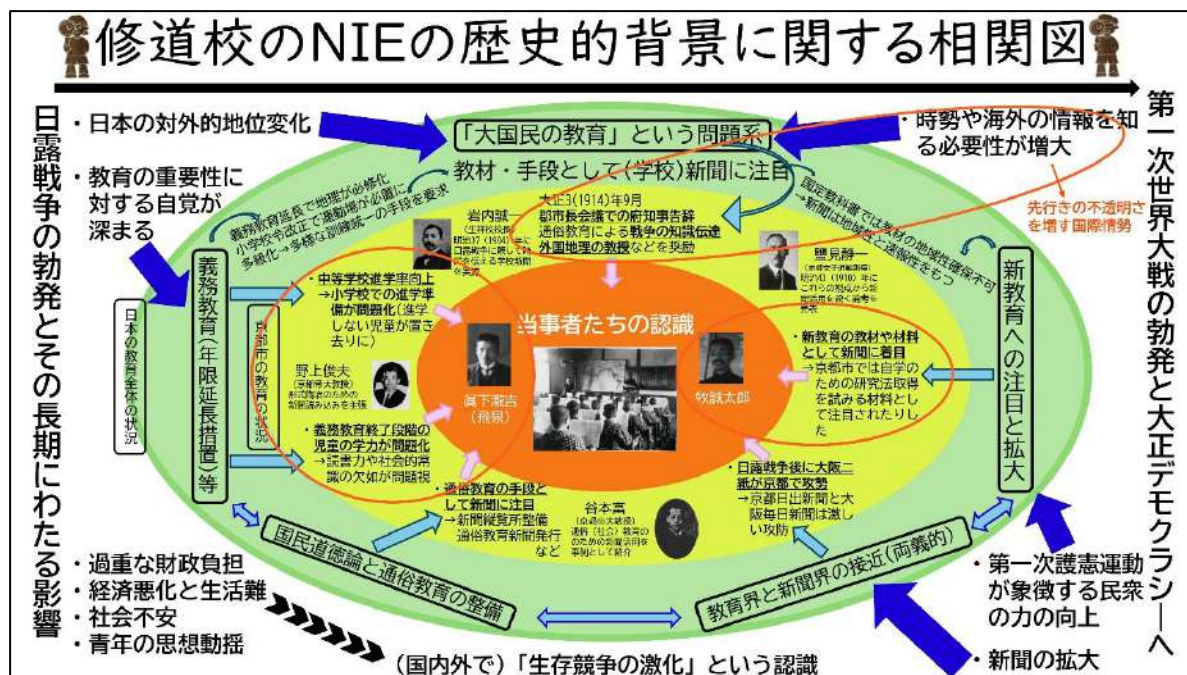


図1

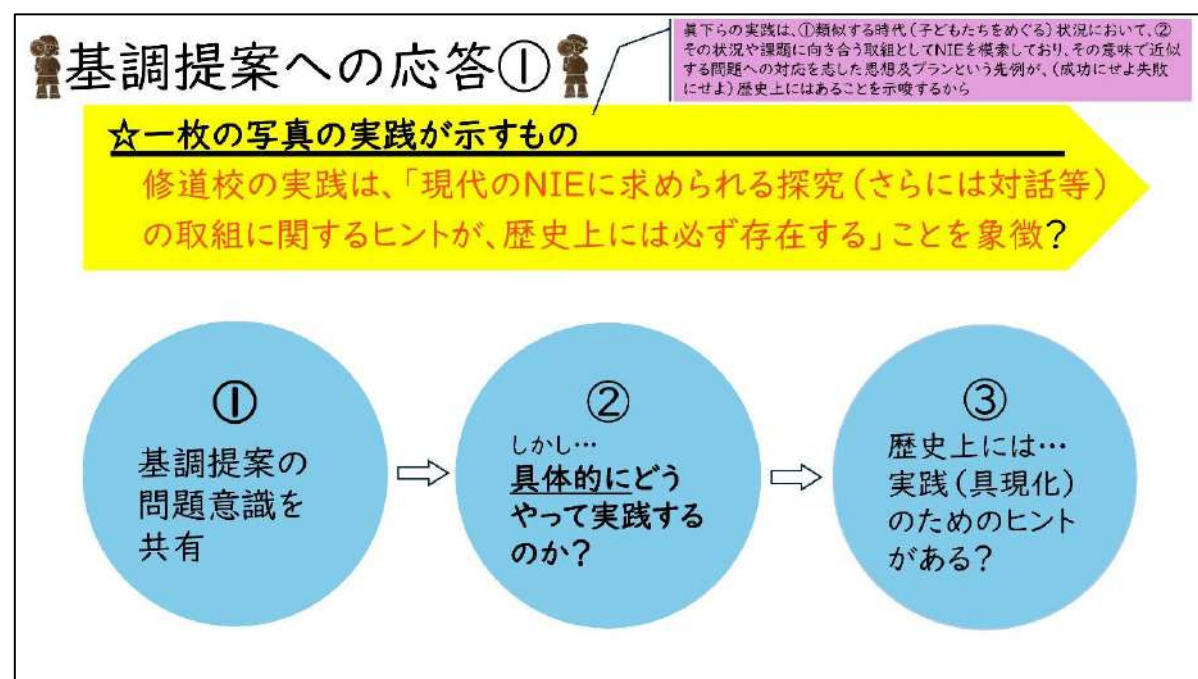


図2

ようなNIEの実践を模索していく過程で、歴史がいかなる役割を果たしえるのか」というテーマに関して、その可能性を吟味する試みに取り組んでみた。こうした筆者のイメージを具現化したのが、図2のスライドである。

筆者が分量で言うとは半分ほどを割いて発表で強調したのが、図2の右側下部に示した「③歴史上には・・・実践(具現化)のためのヒントがある?」と言

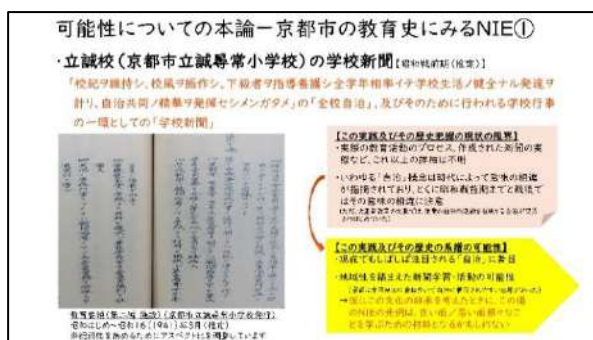


図3



図4

う論点とその実際例の紹介である（図3、4）。実際例を見ていくと、例えば図4の右下に記載したように、今回のNIE全国大会のスローガンや、基調提案で取り上げられていた学びにつながり、かつそうした学びを深めていく際に参考となるような実践が、歴史上には確かに存在していたことに気がつく。

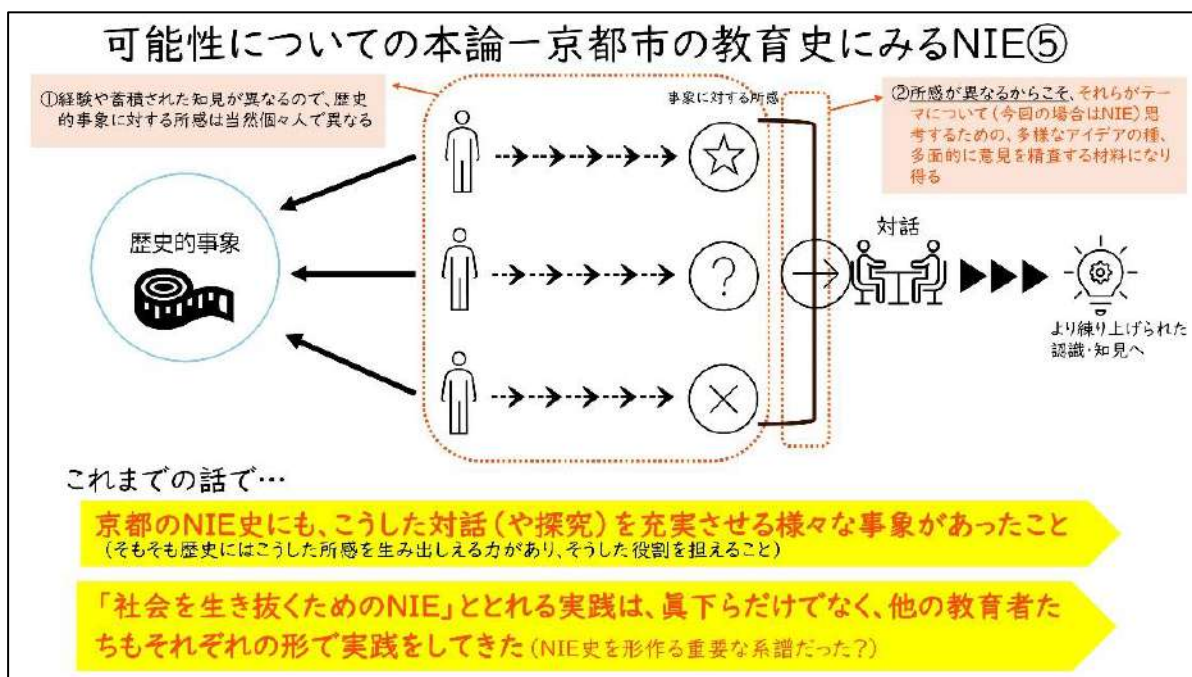


図5

こうした例は図5スライドの下部部分で示したように、「京都のNIE史にも、こうした対話（や探究）を充実させる」可能性があると示唆していると言える。その上で、本報告の最後で強調したのは、今回はあくまで大会のスローガンや基調提案の「視点・立場」から京都のNIE史を眺めてみたが、当然歴史を眺めるこの「視点・立場」の相違によって、歴史に対し異なる所感、さらに言えば「対話や探究とは関係がないかもしれないが、この歴史に登場した手法や考え方は、自身が追究したいNIE実践には大いに生かせるアイデアやヒントになるのではないか」という形の所感を、歴史に触れる人の数

だけ、歴史は「生み出しえる力があり、そうした役割を担えること」であった。本発表で実践例を多様に紹介することを意識したのは、こうした所感の生成を参加者それぞれが経験する可能性を少しでも高めるためであり、それによりNIE（新聞教育）史、つまり歴史に触れたり、その歴史の追究を進めることの意義を、より多くの人に実感してもらうためであった。

3. NIE全国大会京都大会報告の成果とその後の調査から見た今後の課題

大会での報告の最大の成果は、「2」で紹介した筆者の問題意識に共鳴してくれる人が、想定よりも多くいた点である。特別分科会後の会場、または大会後に足を運んでいただいた京都市学校歴史博物館にて、筆者が提起した問題についてディスカッションをしてくれた大会参加者が、東日本でご活躍の方々を中心に、多数いらっしやった。この場を借りて、こうしたお声掛けや、貴重な議論のための時間をいただいた方々、さらにはこのような対話の機会そのものの創出を実現した、第29回NIE全国大会京都大会の開催・運営にご尽力いただいたみなさまに、厚くお礼申し上げたい。

そして、筆者は大会の後も、折に触れて戦前期の新聞教育及びNIEと考えられる実践について、全国に流通していた教育雑誌、及び教育会が各地方発行していた教育雑誌などを対象として、その存在の発掘に努めてきたが、その過程で明らかとなったのは、そうした実践例が京都に限らず、日本中で多数、さらにはあらゆる場所で戦前期にも生み出されていた事実である。

試みに明治末期の『教育実験界』という雑誌の目次を概観すると、第21巻第4号(明治41(1908)年2月25日発行)に「学校新聞につきての実験」(生方賢一郎著)という論考が、第25巻第5号(明治43(1910)年3月5日発行)に「学校新聞の研究」(浦波清華著)が、第27巻第2号(明治44(1911)年1月20日発行)に「新聞教授の利害如何」(三輪田元道著)が、第27巻第6号(明治44(1911)年3月20日発行)に「新聞を教科書となすことに就いて」(樋口長市著)が、第28巻第6号(明治44(1911)年9月20日発行)に「学校新聞」(大豆生田精二郎著)が、第30巻第1号(明治45(1912)年7月5日発行)に「学校新聞」という論考が、それぞれ発表されていることがわかる。また、筆者は大会終了後、奈良県教育会が編纂した『奈良県教育』を悉皆調査する機会を得たが、調査は中途であるものの、第202号(昭和5(1930)年2月1日発行)に「新聞記事を教授資料に」(保川庄司著)という論考が発表されていることを見出した。これらの事例は、先の事実を端的に示唆している。

そして、この事実は次の問題点、つまり「こうした多量で多様な未発掘事例の数々は、「2」で述べた歴史の価値とその担い得る役割を、より遺憾無く発現し、かつ機能させていける可能性というものが、その新たに発掘された実践例の数だけ、実は広大に広がっていることを示している。しかし、この可能性の追究は、一人の人間の力では、時間も行動範囲も限られているがゆえに、と

ても十分にはできないと想定される。だとすれば、こうした可能性の追究を、いかにすれば具体的に行っていくことができるだろうか」という難題が、続く課題として私たちの前に立ちはだかっていることを示していると言えよう。この問題を解決するのは容易なことではないが、ただ心に留めておきたいのは、先にも述べたように、今回のN I E全国大会京都大会は、歴史を1つの重要なテーマに据えたからこそ、この課題の解決に向けて問題意識を共有できる人たちが、全国には確かに存在することを教えてくれたことである。この、筆者にとってはとりわけ重要な本大会の成果を、単なる貴重な財産にとどめるのでなしに、大切な足がかりとして積極的に活用し、自身も新事実の発掘に努めながら、歴史の可能性を追究するための調査・研究ネットワークを実際に構築していくことこそが、筆者が問題解決の開始を吟味すべきな、最も重要な今後の課題と言えるのかもしれない。

まちにツッコむ！子ども新聞

～おとなと子どもが学び合う～

inote+P 代表 服部 加奈子

1. 実践の概要

2022年に設立した本活動は、子どもたちが主体となって地域を取材し、新聞を制作することで、発想力や表現力などのソーシャルスキルを育む環境を提供しています。現在、「まちにツッコむ！きょうと子ども新聞」をA3両面カラーで1000部発行し京都市内150か所の児童館・学童での掲示、協力してくださる小学校、図書館、行政、企業、飲食店などに配架しています。そして、2025年1月に41回目の発行を迎えました。

2023年には京都市の「はぐくみ憲章実践推進者アクション賞」を受賞し「地域と共に次世代育成をする取り組み」として評価されました。

【理念】

私たちは、「子どもたちがまちとつながり、未来を語る存在」となる活動でありたいと考えています。子どもの目線から地域の魅力や課題を発見し、それを言葉にすることで、大人も新たな気づきを得られます。

そして、探究と対話で想像力と未来の選択肢をひろげ、しあわせな未来を創造します。

子ども新聞の運営方針は、

- ・子どもの取材活動・見出し・記事作成を大人が誘導しない。
- ・子どもが理解できる言葉を使う。
- ・子どもの興味を尊重する。
- ・子どもも大人もワクワクする活動を行う。



「まちにツッコむ！きょうと子ども新聞」2025年3月号

としています。

子どもたちが地域取材し新聞を作る活動を通して、未来に生きる体験を提供し、子どもたちの興味関心を育むことが当活動の価値であり、未来を生きる子どもたちの未来を切り拓く力となります。

2. 実践内容

小学生が地元企業取材し、地域の魅力を知ることによって、地元を誇りを持てるよう支援しています。参加費は無料とし、取材先企業が所在する行政区を中心に広報活動を行い、地元の小学生が自然に参加できるよう工夫しています。定員はスタッフ2名で十分に目が届く7名から10名程度としており、全ての参加者が安心して活動に取り組める環境をつくることに意識を高め全員が関われる雰囲気づくりを心がけています。取材や新聞づくりを通じて、一人ひとりがグループの中で主役として関わることができ、自分の意見や実施内容に自信を持てるよう配慮しています。

3. 成果と課題

(1)成果

子どもたちが自分の住んでいる地域に関心を持ち、地元の良さを再発見できたことが挙げられます。実際に地元の企業を訪れて話を聞き、自分の目で見たことを記事にまとめる体験を通して、地域の人や仕事への理解が深まりました。また、文章を書く力や人に伝える力も自然と身につきました。他校やちがう学年の参加者と交流することもでき子ども同士の情報交換もみられました。ワークショップ後には「もっと地域のことを知りたくなった」「新聞を家族に見せたらすごく喜んでくれた」などの声もあり、楽しく学びながら成長できる機会になったと感じています。

(2)課題

参加人数を少人数に限定しているため、関心を持ってくれたすべての子どもたちを受け入れることが難しい状況があります。一人ひとりにしっかり向き合える環境を大切にしている反面、参加の機会を広げるには工夫が必要です。

相反して広報活動にも課題があり、とくに小学校を通じてチラシなどを配布することができず、多くの子どもたちにワークショップの情報を届けることが難しい現状があります。そのため、地域全体への周知や広がりには限界があり、参加希望者の偏りや情報格差が生じやすくなっています。

ネパールとのN I E

ネパール訪問報告（2025 年 2 月 25 日～3 月 3 日）

大阪シティズンシップ研究会 西村 まさみ

1. 実践の概要

私が所属する「大阪シティズンシップ研究会」はN I Eを長年実践、指導、研究してきたグループで主権者意識を育成するために「子ども新聞社」を設け、手書きの新聞を地域読者へ向けて作成、配達する活動などの支援を行っています。また、全国各地で活動する「子ども新聞社」のネットワークづくりをめざしています。

この研究支援継続中、私たちは新聞づくりを通して、いかにシティズンシップを育てるかという議論の中で今回「ネパール」から学んでみようという考えに至りました。

2. 具体的な行動計画

本研究会は研究の3本の柱として

- ① N I Eを通した主権者教育の理論構築
- ② こども新聞づくりの全国ネットワークづくり
- ③ 海外のN I E・主権者教育調査(こども新聞のネットワーク構築)

を掲げ、構成員 10 人で相互に関連を持たせながら①②③の研究を並行してすすめています。

本報告は、今回のネパール訪問に際し、具体的な訪問内容、特に西村がレクチャー、指導したパーツについて述べ、現地教育関係者にインタビューしたこと、課題についても報告するものです。

(1) 出張日程：2025 年 2 月 25 日 ～ 2025 年 3 月 3 日（7 日間）

(2) 用 務：N I E 主権者教育実践に関する現地調査

(3) 用 務 地：ネパール・カトマンズ、ビラトナガル

3. ネパールでの活動

① 2 月 26 日

11：30～17：20 Pawan Ratala カトマンズ 現地生活風習・教育事情等レクチャー・現地視察

17：45～20：20 教育省・学校教育セクタープランにおける中央教育・人材開発プロジェクト Sabin Khanal 現地教育事情ヒアリング

20：30～21：30 交流授業ワークショップ準備等打合せ

② 2月27日 ビラトナガルへ移動

YouMe School Biratnagar 訪問

10:00～10:30 セレモニー

10:30～11:45 ワークショップ

12:00～12:40 Rakhi Jha 校長インタビュー(絵本、双六の贈呈)

12:40～14:30 学校見学

③ 2月28日

午前 資料収集 現地新聞、ネパール国定教科書 購入

Santosh Shrestha 現地教育事情ヒアリング

午後 カトマンズへ移動

④ 3月1日

Tokyo International Education Institute Ltd.訪問

9:20～9:30 日本語学校 Mahara Prakash 校長インタビュー

9:30～10:00 学生と交流

Eurasian School 訪問

10:30～11:00 Kewal Binabi 校長インタビュー

11:00～11:45 ワークショップ・インタビュー(教員、保護者)

11:45～12:00 双六紹介、挨拶

12:00～13:00 学校見学

Puspa Raj Ratala さん トリブバン国際空港管制官 自宅訪問

15:00～16:00 現地事情ヒアリング

⑤ 3月2日 日本へ移動(3日朝、帰国)

4. 学校訪問活動内容

(1) 【YouMe School Biratnagar 2月27日】

<ワークショップ>

●ワーク内容

はがき新聞の作成(理想教育財団提供)

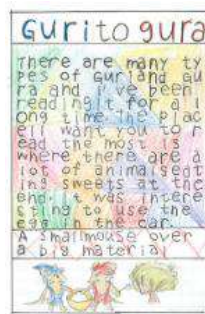
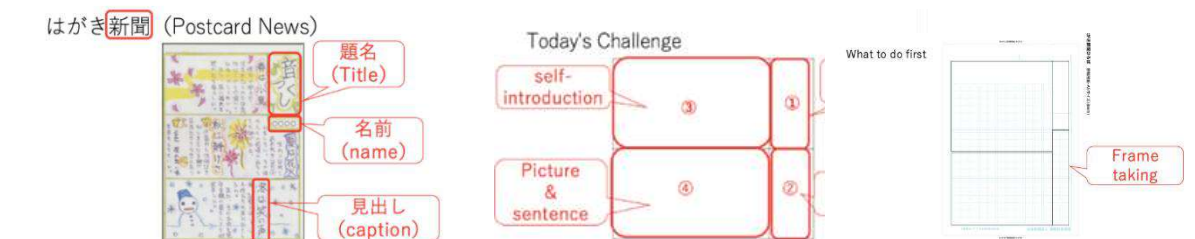
●ワークショップ手順(スライド)

- 1 挨拶と目的を伝える
- 2 自己紹介と大阪府、京都府の位置
興味を持ってもらえるように参加者の所属を自己紹介する。
- 3 新聞の紹介と書き方説明
本日書く内容を簡単にイメージしてもらえるように、はがき新聞を紹介し、新聞とは何かとそこに書く要素を簡単に示す。本日の課題を伝え、そこに何を書くのかを伝える。最初に行うこととして枠取りから始めることを伝える。



ウエルカムセレモニー





YouMe School のこどもの新聞作品

守口市立藤田小学校 5 年、
絵本紹介新聞の例

<学校見学>

午後からの授業を、全学年、全クラス、視察した。内容は、英語や数学等では、日本の同学年では扱わないような高度な内容を学習していた。

ワークショップは、スライドを提示してはがき新聞作成を行なった。子どもたちの目は真摯で、輝いていた。学ぶ意欲の高さは日本の子どもたち以上だと感じた。

(2) 【Tokyo International Education Institute Ltd. 3月1日】

9:20~9:30 校長室で挨拶

9:30~10:00 教室で学生と交流

<校長インタビュー>

<学生との交流>

学生へ激励、日本に来て守って欲しい3つのこと

(遅刻しない、ゴミを捨てない、夜に騒がない) を紹介

<京都新聞ジュニアタイムズ、双六 贈呈>

西村の自己紹介で京都在住を強調し、京都新聞の月2回発行「京都新聞ジュニアタイムズ」が漢字にふりがながふってあり、とても読みやすいと紹介。この学校の学生が日本語を学ぶ教材としては適当であると考え、日本からここまで重かったが運んできたことを伝えた。「京都新聞ジュニアタイムズ」を30部は配付。配布すると熱心に読もうとしてくれ、最終ページの日本語と英語の文章を一目みて「ロスの火災」と気が付き反応する生徒がいた。優しい(容易な)日本語を勉強するのには良い教材にできると感じた。



<ふりかえり>

- ・日本から来た視察団に対して、歓迎の気持ちを示してくれた。
- ・日本語を熱心に学ぶ学生の雰囲気を知ることができた。
- ・校長は学生へ刺激を与えることができた喜んでくれた。
- ・この意欲的な学生たちが安心して学び、生活し、仕事ができる受け入れ環境が日本に整っているのか、労働力として使い捨てにされず、共存できるのか、ひとりの日本人として不安はよぎった。

（３）【Eurasian School ３月１日】

10：30～11：00 Kewal Binabi 校長インタビュー

11：00～11：45 ワークショップ・インタビュー（教員、保護者）

11：45～12：00 双六紹介、挨拶（歌の交流 ネパール児童・西村）

12：00～13：00 学校見学

<ワークショップ・インタビュー（教員、保護者）>



<双六紹介、挨拶（歌の交流 ネパール児童・西村）>

ワークショップ終了後、双六配布、日本の遊びとして紹介した。サイコロも渡して、実際に２人組で遊んでもらった。サイコロを転がして、すすむことはすぐ理解をして、遊びはじめた。日本語、ネパール語の絵や日本文化説明文字が紙上にあふれていたの、すすむ順が解らない様子で何回か数字の順を探していた。

最後に、全員でお別れのセレモニーがあった。

児童のひとりが、日本語の「あいうえおの歌」を歌ってくれた。続いて、西村が日本の歌として「花」を歌い、交流を深めた。

♪セレモニーが終了しても保護者や、子ども達が何度も「さよなら」と言ってくれ、バスの傍まで来てくれ、名残惜しそうに見えた。



<学校見学>

インタビュー【Eurasian School 教員・Kewal Binabi 校長】

- ・こどもの意見表明を大事にするための授業がある
- ・こどもは授業中よく話す。その理由として、以下のようなことが示された。
 - しつけを教える（教員をリスペクトすることなど）
 - Happy Children Day（毎週金曜日）の取り組み
- ・7ディベートコンテスト、・スピーチ 等
 - いろいろな意見を聞くようにしている。
 - こどもの意見を聞いてから教員が話す（こどもが納得するように）
 - こどもの権利を尊重する授業をつくっている
 - シラバス、ドラマ、保護者会
 - （学者の講演、LINEで毎日連絡）
 - 中1で「コミュニティを知る」学習も行っている



←地域へ向けて新聞を発行することも不可能ではないとの事でした

5. 訪問の感想、今後の課題

滞在時間にすれば5日足らず、学校訪問は3校。

わずかの時間で何が吸収できたのか。NIE新聞づくりを子どもたちに教えたい、新聞がとても有効な情報源として活用できることの有益さを伝えたいと思い夢中で視察、指導を行ってきました。

さて次は。今帰国後3カ月が過ぎ、ようやく、次のステップに踏み出せそうです。今回の提出報告書で限られたページだったため書ききれなかった課題が山積、頭をクールにして、研究を続けます。詳しい報告は2025年6月21日、大阪朝日新聞本社にて「第82回大阪NIEセミナー」で行うことになっています。

【おまけ】

最後になりましたが、2025年5月18日付京都新聞丹後中丹版で私のNIE・ネパール研究視察について石崎記者に取材していただいた記事を掲載していただきました。

京都新聞購読者に限らず、メールや、電話、直接の声掛け等、当日以降の反響が大きく、戸惑いながら対応をしました。私の研究を全く知らない方からも、エールを送っていただき、恥ずかしく、でも励みになり、今後の研究活動がはつきりとライフワークと言えるようになりました。



第24回 京都府NIEセミナー

「体験格差」解消とNIEの可能性

教育に新聞を

探究と対話で、想像力と選択肢を

さまざまな体験の機会が社会・経済的な事情や環境によって等しく得られない「体験格差」。子どもたちの成長にとどまらず、私たちの社会生活の課題として注目されています。

新聞・メディアを通じて世の中の出来事や表現と関わるNIE（教育に新聞を）の取り組みは、この課題の解決にどのような役割を果たせるのか、より効果を上げる工夫や掛け合わせは何か、学校や地域社会での実践や模索をもとに、共に考えましょう。



■ **参加無料**、定員250人(会場100人・オンライン150人)

日時 **2025年2月1日(土) 13:30~15:30(13:00開場)**
※終了後、交流の時間を設けます

会場 **京都新聞社7階文化ホール** ※オンライン併用
(京都市中京区烏丸通夷川上ル 京都市営地下鉄「丸太町」駅7番出口)

パネルディスカッション登壇予定者

古田 祐子さん 京都市立 羽東師小学校 教諭・研究主任 **NIEサポーター**

船越 寿子さん 綾部市立 八田中学校 教諭 **NIEサポーター**

田坂 祥子さん 平安女学院高等学校ミルトスコース(単位制)教諭

奥井 凜さん 一般社団法人 京都子ども記者クラブ 代表理事 **NIEサポーター**

服部 加奈子さん inote+P(きょうと子ども新聞)代表 **NIEサポーター**

◆進行:京都府NIE推進協議会事務局 石崎立矢

NIEサポーターとは

NIE全国大会京都大会(2024年8月)開催をきっかけに、地域社会の幅広い分野で新聞活用、メディア情報リテラシーを育むため府NIE推進協が新たに設けました。現在、16人が登録しています。



Newspaper in Education

参加申し込み・問い合わせ先

参加申し込みは**1月24日(金)**までに

nie@mb.kyoto-np.co.jp もしくは**075-241-5231**へ

①氏名・所属 ②連絡先(電話番号とメールアドレス) ③希望の参加方法(会場か、オンラインか)をお知らせください
※オンライン参加ご希望の方は必ずURLの受信・参加が可能なメールアドレスをお知らせください。

問い合わせTEL **075-241-5231** 受付時間 平日9:00~17:00/年末年始12月28日(土)~1月5日(日)休み
京都府NIE推進協議会事務局(京都新聞社メディア局情報センター内)上野・小谷

主 催

京都府NIE推進協議会

後援(申請中を含む)

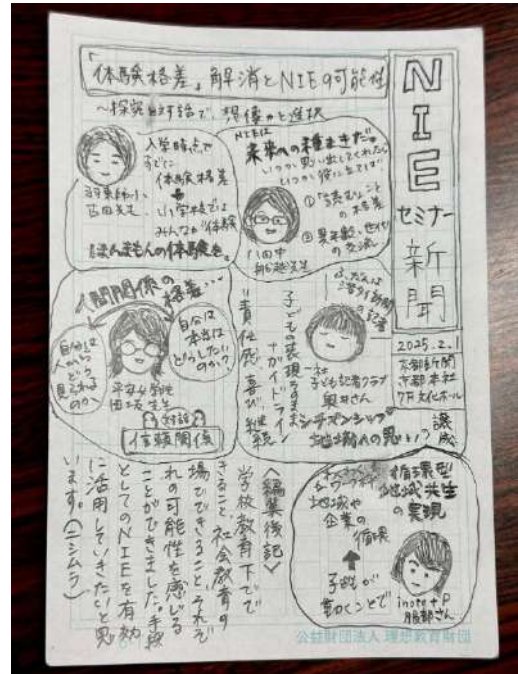
京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会、
京都市小学校NIE実践研究会、京都市立中学校新聞教育・NIE研究会

【事業の成果】

登壇者は、子ども達に「体験格差」が生じていることを前提としつつも、各自が学校や地域社会で行っているNIEの実践がその格差を埋めるためにどのように役立っているのか、事例を交えて報告した。具体的には、新聞記事について話し合うオピニオンタイムで子どもたちの世界を広げる試み（船越）や体験・取材を積み重ねることで年々深まる児童の探究（古田）、人間関係の経験格差を対話で埋める重要性（田坂）、子どもの取材記事に対する表現の尊重による責任感の向上（奥井）、地域の企業を取材することで多世代交流を生む効果（服部）など。

それに対して、会場から「体験の差を生かしてはどうか」や「格差はあって当たり前だが、多様な人がよりよくなるように取り組む必要がある」など4人の発言があった。

それを受けて、一人一人が得意なものを生かし、多様な解釈を伝えられるよう、学校や地域がどういう役割を担っていけるのかなど、NIEが学びに果たす役割を話し合うことができた。



作成：NIEサポーター
子どものよりよい育ちを支える会
西村 奈美

「体験格差」の解消とNIE（教育に新聞を）の可能性をテーマにした京都府NIEセミナーがこのほど、京都市中京区の京都新聞文化ホールで開かれた。教員や市民団体代表ら5人が活動を報告し、新聞を使う教育活動についての役割や工夫を考えた。

古田祐子教諭、綾部市立八田中の船越孝子教諭、平安女学院高の田坂祥子教諭、各地域で子ども記者として活動に携わる奥井凛さん、服部加奈子さんが登壇した。

古田教諭は、今年で地域を探索したり、インタビューをしたりして新聞にまとめる活動を通して「実践を積み重ねることで、広げる質問や深める質問を子どもたちが協力してできるようになった。取材力がアップ

「表現尊重 子に責任感」

中京でNIEセミナー 教員らが活動報告



NIEの実践事例を紹介する教員ら
（京都市中京区・京都新聞社）

している」と話した。子ども自身が住んでいる地域を取材した記事を地域紙などに掲載する奥井さんは「当初は子ども記者の原稿をかなり修正していたが、その子らしい表現を尊重するようにした。そうすることで責任感が高まり、記者を継続する子が増えた」と報告した。

会場の参加者からは「新聞を読むことで知らなかったことを知る入り口となること、また学校教育の中で体験を提供することがNIE活動の役割だ」と指摘する発言もあった。

2025年2月5日付 京都新聞

年度	校数	＜これまでの実践校・準実践校・奨励校・トライアル校＞
1994	2	聖母学院小学校、京都府立商業高等学校(現すばる高等学校)
1995	3	聖母学院小学校、京都市立修学院中学校、同志社高等学校
1996	3	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校、立命館宇治高等学校
1997	3	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校、立命館宇治高等学校
1998	2	京都市立百々小学校、京都市立修学院中学校
1999	3	京都市立養正小学校、京都市立吉祥院小学校、京都文教女子高等学校
2000	3	京都市立養正小学校、京都市立吉祥院小学校、京都文教女子高等学校
2001	6	京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 京都市立花山中学校、八木町立八木中学校、京都文教女子中学校
2002	9	京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 京都市立衣笠中学校、京都市立伏見中学校、八木町立八木中学校 京都文教女子中学校、京都府立北稜高等学校、花園中学高等学校
2003	10	京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、亀岡市立曾我部小学校 八幡市立美濃山小学校、京都市立衣笠中学校、京都市立伏見中学校 向日市立勝山中学校、京都府立北稜高等学校、花園中学高等学校 華頂女子中学高等学校
	4	(準)京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、大山崎町立第二大山崎小学校 八木町立八木中学校
2004	10	京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、聖母学院小学校 亀岡市立曾我部小学校、八幡市立美濃山小学校、京都市立洛北中学校 京都市立洛南中学校、向日市立勝山中学校、長岡京市立長岡第三中学校 華頂女子中学高等学校
	6	(準)京都市立山王小学校、京都市立清水小学校、京都市立伏見中学校 八木町立八木中学校、花園中学高等学校、京都府立北稜高等学校
2005	9	京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、聖母学院小学校 京都市立洛南中学校、京都市立洛北中学校、京都市立蜂ヶ岡中学校 長岡京市立長岡第三中学校、京都教育大学附属桃山中学校 京都市立塔南高等学校
	8	(準)京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、八幡市立美濃山小学校 京都市立伏見中学校、向日市立勝山中学校、京都府立北稜高等学校 花園中学高等学校、華頂女子中学高等学校
2006	10	京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、京都市立鏡山小学校 城陽市立寺田西小学校、京都市立蜂ヶ岡中学校、京都市立旭丘中学校 京都教育大学附属桃山中学校、亀岡市立育親中学校 京都市立塔南高等学校、京都市立洛陽工業高等学校
	7	(準)京都市立第三錦林小学校、京都市立山階小学校、八幡市立美濃山小学校 京都市立洛北中学校、京都市立洛南中学校、長岡京市立長岡第三中学校 華頂女子中学高等学校
2007	11	京都市立鏡山小学校、京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校 城陽市立寺田西小学校、向日市立第5向陽小学校、京都市立旭丘中学校 京都市立久世中学校、京都市立西京高等学校附属中学校、同志社中学校 京都府立園部高等学校、京都学園高等学校
	7	(準)京都市立紫竹小学校、京都市立嵯峨野小学校、京都市立洛北中学校 京都市立蜂ヶ岡中学校、京都教育大学附属桃山中学校 京都市立洛南中学校、長岡京市立長岡第三中学校

年度	校数	＜これまでの実践校・準実践校・奨励校・トライアル校＞
2008	10	京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校、京都市立吉祥院小学校 向日市立第5向陽小学校、京都市立久世中学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都市立下鴨中学校、城陽市立西城陽中学校 京都府立園部高等学校、京都学園高等学校
	2	(奨励校)立命館小学校、京都市立周山中学校
	5	(準)京都市立紫竹小学校、京都市立鏡山小学校、京都市立蜂ヶ岡中学校 京都市立旭丘中学校、京都教育大学附属桃山中学校
2009	10	京都市立吉祥院小学校、京都市立安井小学校、京都市立一橋小学校 京都市立二条中学校、京都市立下鴨中学校、京都市立桂中学校 城陽市立西城陽中学校、綾部市立上林中学校、宮津市立養老中学校 京都府立鴨沂高等学校
	6	(準)京都市立静原小学校、京都市立松尾小学校、向日市立第5向陽小学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都府立園部高等学校 京都学園高等学校
2010	10	京都市立月輪小学校、京都市立安井小学校、京都市立一橋小学校 福知山市立大正小学校、京都市立北野中学校、京都市立二条中学校 京都市立桂中学校、宮津市立養老中学校 京都府立鴨沂高等学校、東山中学高等学校
	7	(準)京都市立吉祥院小学校、京都市立松尾小学校、京都市立静原小学校 向日市立第5向陽小学校、京都市立下鴨中学校 京都市立西京高等学校附属中学校、京都学園高等学校
2011	10	京都市立月輪小学校、京都市立竹の里小学校、京都市立葵小学校 福知山市立大正小学校、京都市立北野中学校、京都市立向島中学校 八幡市立男山第三中学校、京都教育大学附属京都小中学校、東山中学高等学校 京都府立東稜高等学校
	5	(準)京都市立吉祥院小学校、京都市立一橋小学校、京都市立下鴨中学校 宮津市立養老中学校、京都府立鴨沂高等学校
2012	10	京都市立藤ノ森小学校、京都市立竹の里小学校、京都市立葵小学校 京都市立西陵中学校、木津川市立木津南中学校、京都市立向島中学校 八幡市立男山第三中学校、京都教育大学附属京都小中学校、 京都光華中学・高等学校、京都府立東稜高等学校
	5	(準)京都市立月輪小学校、京都市立一橋小学校、宮津市立養老中学校 東山中学高等学校、京都府立鴨沂高等学校
2013	10	京都市立藤ノ森小学校、京都市立朱雀第六小学校、京都市立藤城小学校 木津川市立恭仁小学校、京都市立西陵中学校、木津川市立木津南中学校 京都市立西京極中学校、長岡京市立長岡中学校、京都府立向陽高等学校 京都光華中学・高等学校
	2	(準)京都市立竹の里小学校、八幡市立男山第三中学校
	1	(トライアル校)宇治市立笠取第二小学校
2014	10	京都市立朱雀第六小学校、京都市立藤城小学校、京都市立明德小学校 木津川市立恭仁小学校、京都市立双ヶ丘中学校、京都市立西京極中学校 長岡京市立長岡中学校、八幡市立男山東中学校、平安女学院中学校高等学校 京都府立向陽高等学校
	5	(準)京都市立竹の里小学校、八幡市立男山第三中学校、京都市立藤ノ森小学校 木津川市立木津南中学校、京都光華中学・高等学校

年度	校数	＜これまでの実践校・準実践校・奨励校・トライアル校＞
2015	10	京都市立明德小学校、京都市立高倉小学校、京都市立衣笠小学校 京都市立双ヶ丘中学校、京都市立伏見中学校、八幡市立男山東中学校 京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校、京都府立東舞鶴高等学校 平安女学院中学校高等学校
	3	(準)京都市立西京極中学校、長岡京市立長岡中学校、京都光華中学・高等学校
2016	10	京都市立高倉小学校、京都市立衣笠小学校、京都市立宇多野小学校 京丹波町立瑞穂小学校、京都市立伏見中学校、京都市立大枝中学校 京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校、京都女子中学校高等学校 京都府立東舞鶴高等学校
	2	(準)八幡市立男山東中学校、平安女学院中学校高等学校
2017	11	京都市立宇多野小学校、京都市立山階南小学校、京田辺市立松井ヶ丘小学校 京丹波町立瑞穂小学校、京都市立京都御池中学校、京都市立大枝中学校 木津川市立木津第二中学校、亀岡市立亀岡中学校、綾部市立上林中学校 京都女子中学校高等学校、京都府立久御山高等学校
	3	(準)京都市立高倉小学校、京田辺市立田辺中学校、木津川市立山城中学校
2018	11	京都市立竹の里小学校、京都市立山階南小学校、京田辺市立松井ヶ丘小学校 京都市立京都御池中学校、京都市立深草中学校、木津川市立木津第二中学校 亀岡市立亀岡中学校、綾部市立上林中学校、南丹市立八木中学校 ノートルダム女学院中学高等学校、京都府立久御山高等学校
	0	
2019	9	京都市立新町小学校、京都市立竹の里小学校、宇治市立大久保小学校 伊根町立本庄小学校、京都市立下鴨中学校、京都市立深草中学校 南丹市立八木中学校、ノートルダム女学院中学高等学校 京都府立須知高等学校
	2	(準)京都市立京都御池中学校、綾部市立上林中学校
2020	8	京都市立新町小学校、京都市立竹の里小学校、宇治市立大久保小学校 伊根町立本庄小学校、京都市立下鴨中学校、京都市立大淀中学校 龍谷大学付属平安高等学校、京都府立須知高等学校
	1	(準)綾部市立上林中学校
2021	9	京都市立竹の里小学校、京都市立羽束師小学校、京田辺市立草内小学校 京都市立大淀中学校、京都市立花山中学校、八幡市立男山東中学校 宮津市立栗田中学校、京都府立久美浜高等学校・丹後緑風高等学校久美浜学舎 龍谷大学付属平安高等学校
	9	京都市立神川小学校、京都市立羽束師小学校、京田辺市立草内小学校 京都市立花山中学校、京都市立小栗栖中学校、八幡市立男山東中学校 宮津市立栗田中学校、京都府立丹後緑風高等学校久美浜学舎 京都橘中学校・高等学校
2023	13	京都市立新町小学校、京都市立御所南小学校、京都市立光徳小学校、 京都市立七条第三小学校、京都市立神川小学校、京都市立羽束師小学校、 京都市立西京高等学校附属中学校、京都市立小栗栖中学校、綾部市立八田中学校、 宮津市立栗田中学校、京都府立峰山高等学校、京都橘中学校・高等学校、 京都両洋高等学校

年度	校数	＜これまでの実践校・準実践校・奨励校・トライアル校＞
2024	14	京都市立新町小学校、京都市立御所南小学校、京都市立光徳小学校、 京都市立七条第三小学校、京都市立上高野小学校、京都市立伏見南浜小学校、 京都市立羽束師小学校、光華小学校、京都市立松原中学校、 京都市立西京高等学校附属中学校、綾部市立八田中学校、宮津市立栗田中学校、 京都府立峰山高等学校、京都両洋高等学校
2025	11	京都市立光徳小学校、京都市立上高野小学校、京都市立伏見南浜小学校、 京都市立下鳥羽小学校、京都市立松原中学校、京都市立四条中学校、 亀岡市立詳徳中学校、綾部市立八田中学校、宮津市立栗田中学校、 京都府立峰山高等学校、平安女学院高等学校

2024(令和6)年度 京都府NIE実践報告書

2025年7月発行

編集 京都府NIE推進協議会事務局

〒604-8577 京都市中京区烏丸通夷川上ル

京都新聞社内

TEL：075-241-5231

Email：nie@mb.kyoto-np.co.jp